

598-1



1200501528744

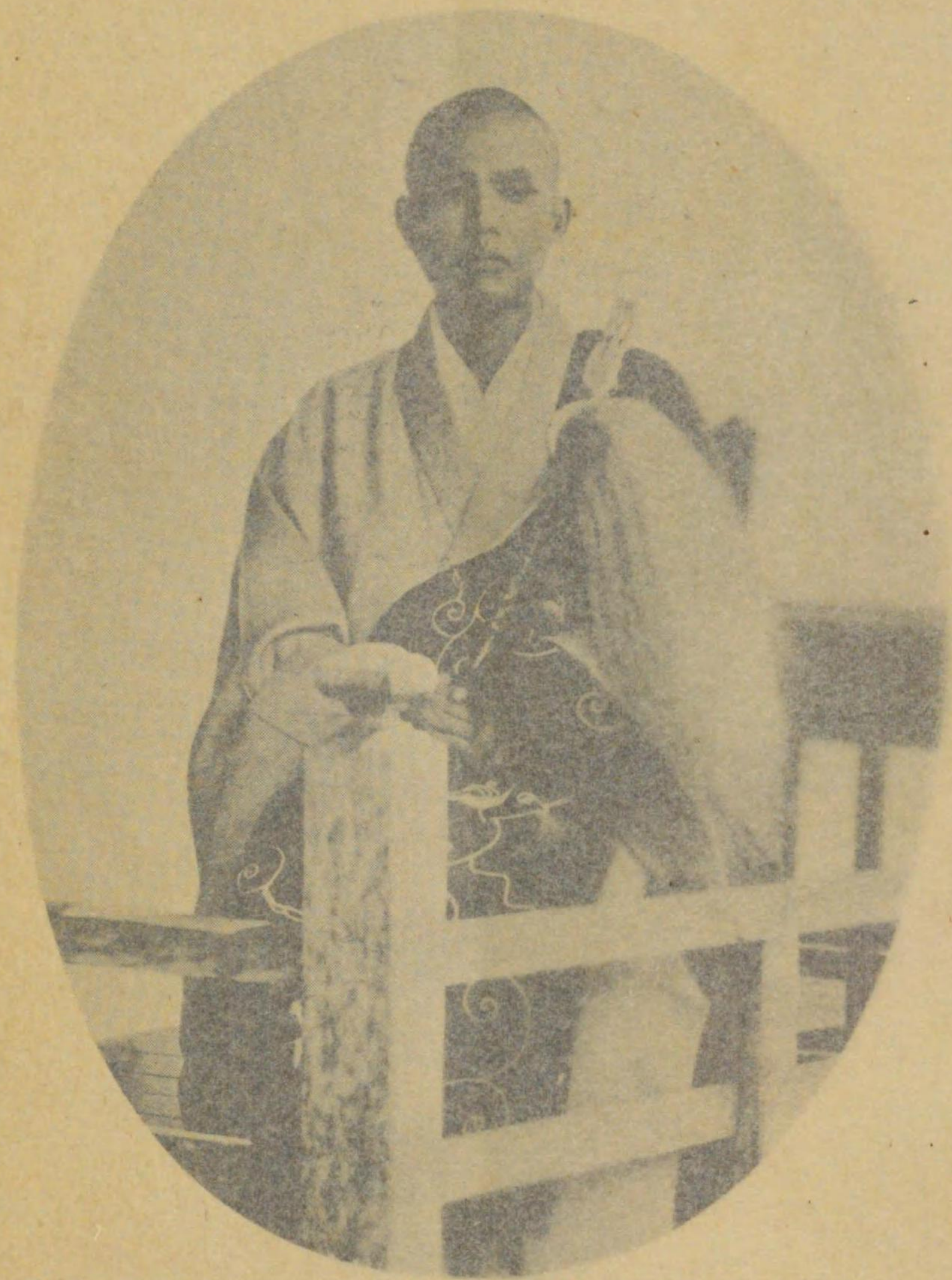


311



釋宗演全集 第八卷





圓覺寺住持に當る時
(廿九歳) 釋宗演師



の時當任初に長管派寺覺圓
(歳九廿) 師 禪 演 宗 釋

講 述 禪 海 一 瀾 (續) 目 次

明 德 第一則	三
朱 熹 の 言	六
學 問 の 大 綱	一三
執 中 第二則	二〇
人 心 即 ち 道 心	三
南 宗 と 北 宗	二六
惟 聖 第三則	三三
絶 對 善	四〇
佛 も 初 め は 凡 夫	三七
一 貫 第四則	四三

如何なるか道……………四六

大道の作用……………五〇

曾參 第五則……………五二

臨終の言葉……………五九

我が爲めに田を開け……………六三

慎獨 第六則……………六六

中庸の眼目……………六八

唯曾參一人のみ……………七〇

浩然 第七則……………七二

孟子の時代……………七三

正文二十九字……………七八

無隱 第八則……………九〇

毎日の行動即ち道……………九三

道は近きに在り……………九四

顔回 第九則……………一〇一

一簞の食一瓢の飲……………一〇四

誠の一字……………一〇八

夕死 第十則……………一一三

死の問題……………一二五

小覺と大覺……………一二九

不見 第十一則……………一三九

自然の趣……………一四〇

走る船を止める……………一四三

盡心 第十二則……………一四四

究め盡すの意味……………一四三

撥草参玄……………一四五

曲肱第十三則……………一五三

禪的生活……………一五四

禪定安樂の法味……………一六一

德 輶第十四則……………一六五

心の徳の讚歎……………一六七

弓術の奥義……………一六九

至 誠第十五則……………一七六

誠といふ一字……………一七七

寂然不動……………一七九

浴沂第十六則……………一八七

弟子四人の答……………一八八

五位の境界……………一九三

率 性第十七則……………一九九

天命何者ぞ……………二〇一

名は實の賓……………二〇七

致 知第十八則……………二一五

心の本體……………二二七

感格の意味……………二二九

忿 懐第十九則……………二三八

孔子壁中の書……………二四〇

張方平の言……………二四三

桔 亡第二十則……………二四四

孟告二子の問答……………三四五

虚明の氣象……………二五〇

躍 如 第廿一則……………二五八

無理な注文……………二五九

繩墨を改めず……………二六二

發 憤 第廿二則……………二六九

道を樂み憂を忘る……………二七一

具備すべき二者……………二七二

驅 納 第廿三則……………二八〇

味ふ可き中庸の辭……………二八一

禪宗のやり方……………二八三

形 色 第廿四則……………二八九

形體の現はれ……………二九〇

六 根 六 識……………二九一

性 近 第廿五則……………二九五

性は白紙と同じ……………二九六

因果應報の道理……………二九九

知 風 第廿六則……………三〇八

大乘佛教の入口……………三一九

劉禹端の祈雨……………三二四

克 己 第廿七則……………三三八

仁の字の解釋……………三三九

自己無明の偷心……………三三六

與 權 第廿八則……………三三九

道は更に一步を進む……………三四〇

雲門の痛棒……………三四四

易 與 第廿九則……………三五二

善惡美醜あり……………三五三

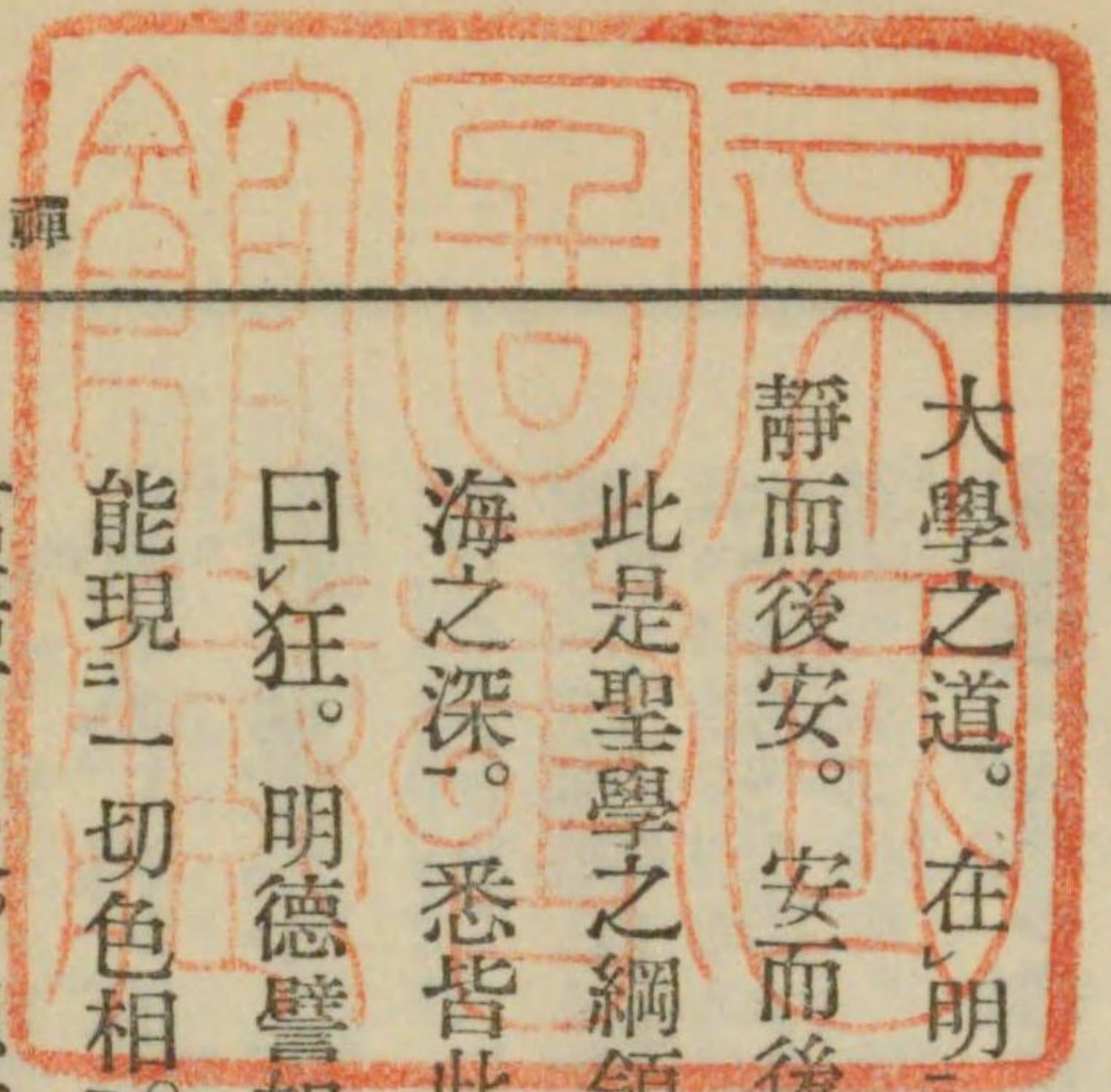
易と禪の合致……………三五八

無 言 第三十則……………三六三

味へば意味深重……………三六四

不説の一言……………三七一

講述
 禪海一瀾
 (續)



明德 第一則

大學之道。在明_二明德、在新_二民、在止_二至善。知_レ止而後能定。定而後能靜。靜而後安。安而後能慮。慮而後能得。

此是聖學之綱領。煉心之實法。而孔門之秘訣也。六經諸子之言。如_二山之高海之深。悉皆此一著子之註脚也。究之明白。曰_レ聖曰_レ賢。昧之昏蒙。曰_レ凡曰_レ狂。明德譬如_二一顆真珠。圓明寂淨。都無_二差別相。以_二體明_一故。對_レ物時能現_二一切色相。色自有_二差別。而珠無_二變易。如其精微深妙之理。非_二筆墨言語可_レ及。只在_二學者刻苦自得_一耳。自得之術。在_二止定靜安慮五者。是與_二吾門之靜坐工夫_一同。即鍊心活法也。竊按。正文自_二明德_一至_二能得_一。全用_二回文句法也。蓋聖者之屬_レ辭也。製作參_二天地。意匠自則_二陰陽運行之氣象_一而擒_レ藻。

太可翫味矣。凡學者欲明自己本具明德。便先須修止定靜慮之法。久久功夫純熟。則一旦濶然有大所得矣。然後養己所得以及衆人。俾衆人又明之。謂之新民。而於日用行事上。發揮明德之全光。上不恥天。下不恥人。得志與民由之。不得志。獨行其道。富貴不能淫。貧賤不能移。威武不能屈。謂之止至善。而尚以止定靜慮之法。煉來鍊去。愈益明了明德。以不廢新民止善之真修。幾回反復鍛鍊。終而復始。如循環無端。謂之大學日新之道也。故下文曰。物有本末。事有終始。知所先後。則近道矣。其反復叮嚀。示人之意。至深切矣。學者其可不研究乎。

(訓讀) 大學の道は、明德を明かにするに在り、民を新にするに在り、至善に止まるに在り、止まることを知りて、而して後に能く定まる、定まつて而して後に能く靜かなり、靜かにして而して後に能く安し、安うして而して後に能く慮る、慮つて而して後に能く得。

此れは是れ聖學の綱領、煉心の實法、而して孔門の秘訣なり。六經諸子の言、山の高く海の深きが如し。悉く皆此一著子の註脚なり。之れを究めて明白なるを聖と曰ひ、賢と曰ふ。之れを味く

して昏蒙なるを凡と曰ひ狂と曰ふ。明德は譬へば一顆の眞珠の如し。圓明寂淨、都て差別相無し。體明かなるを以ての故に、物に對する時、能く一切の色相を現す。色自ら差別有りて、而して珠は變易無し。其精微深妙の理の如きは、筆墨言語の及ぶ可きに非ず。只學者刻苦自得するに在るのみ、自得の術は、止定靜慮の五者に在り。是れ吾が門の靜坐工夫と同じ。即ち煉心の活法なり。竊に按ずるに、正文明德より能得に至る。全く回文の句法を用ゆるなり。蓋し聖者の辭を屬するや製作天地に參す。意匠自ら陰陽運行の氣象に則りて藻を擲く、太だ翫味す可し。凡そ學者自己本具の明德を明かにせんと欲せば、便ち先づ須く止定靜慮の法を修すべし。久々功夫純熟せば、則ち一旦濶然として大に得る所有り。然る後己れの得る所を養ひ、以て衆人に及ぼし、衆人をして又之れを明めしむ、之れを民を新にすると謂ふ。而して日用行事の上に於て、明德の全光を發揮し上天に耻ぢず、下人に耻ぢず、志を得れば民と之れに由り、志を得ざれば、獨り其道を行ふ。富貴も淫すること能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈すること能はず、之れを至善に止まると謂ふ。而かも尙ほ止定靜慮の法を以て、煉り來り煉り去り、愈々益々明德を明了にして、以て新民止善の心修を廢せず、幾回か反復鍛鍊、終つて復た始むるは、循環端無きが如し。之れを大學日新の道と謂ふなり。故に下文に曰く、物本末有り、事終始有り、先後する所を知れば、則ち道に近し。其反復叮嚀、人に示すの意、至つて深切なり。學者其れ研究せざる可けんや。

朱熹の言

愈々下巻に移つて、三十則の第一則から説きますが、其第一則は「明德」の章であります。本文に入る前に、一言いふて置きますが、それは此「大學」はいふまでもなく、一部の書であるが、それに就いて朱晦庵即ち朱熹が、或る時其「大學」を讀む方法を門人に教へて言ふたことがあります。其言葉に、

「大學の一書には、正經あり、解あり、或門あり。正經といふのは、即ち大學の本文であります。正經も又解釋した解もある。又或門といふ書物もある。所が其心を凝して、久しく大學を見來り見去るに従つて、更に或門を用ゐず、或門といふ書物の手引がなくとも、間違ひない所に至らう。又久しくして只正經のみを見る。又久しくして自ら一部の大學が、我が胸中に在るありて、正經も用ゐず。」

といふことが、朱熹の語録にあります。恚ういふことは、坐禪工夫する趣と同じやうな有様で、先師洪川老漢も恚う言はれました。恚ういふ説は、朱熹が晩年の定論でありませう。同じ朱熹でも、壯年時代、中年時代、晩年時代と、見識が違つて、段々と進歩してゐます。是等は晩年定論の識見であらうと、洪川先師が見てゐます。こんな心持を以て「大學」といふものに、吾々は對して行く、それ

が爲めに尙ほ朱熹の言葉を引いて見れば、「大學」の序文にある通り、

「聰明睿智にして、能く其性を盡くす者其間に出づるときは、則ち天必ず之れに命じて、以て億兆の君師と爲して、之れをして治めて、之れを教へて以て其性に復らしむ。」

云々とあります。恚ういふ鹽梅に、朱子は見てゐます。要するに此一部の「大學」の書物といふものは、復性の道を明かにした。吾々が本性へ復歸するところの其意味の書物であるといふことは、これで分つてゐます。吾々が此本文を見るのにも、其心持で行くが宜しい。尤も「大學」に就いて廣く見たらば、種々のことがありますが、吾が禪宗、就中臨濟に於ては、網干の龍門寺の開山に爲つてゐる盤珪禪師といふ方が、此「大學」に就いて、恚ういふ經歷を有つてゐられます。師が十有五にして學に志すといふ頃に、此章に出會ふて、大いに疑ひを起されました。明德を明かにするの章を疑ふて、禪に參すると傳に書いてあります。素より明かなものならば、更に明かにすることは、要りさうもないものだといふことが、疑ひの種でありました。これより東西に徘徊して、多くの善智識に遇ふたが、何んの得る所もなかつたが、常に屈せず撓まず、刻苦精勵して、時間の経過を忘れる位までに鍛鍊しました。常に靜坐して工夫してゐたので、臀部の肉が爛れて了つて、遂に膿血を出すに至るといふ位で、餘程猛烈に行りました。膿血の出る所へ、紙を貼りつけて、更に撓まず坐つてゐます。十五歳位から此疑ひを起して、そして三十歳位まで行つた。其後重病を憂ひ、飲食進まず、唯死

を待つといふ所まで至つた。何んでも人間といふものは、愆うした逆境、愆うした煩悶に出會はぬと、一條の血路を開くことは能きませぬ。それは當人の心の取りやうで、禍を轉じて幸と爲すことも能きませうが、只樂々としてゐたのでは、却々以て悟りを得られるものではありませぬ。ところで盤珪禪師は然ういふ逆境に陥つたところで、一日豁然として悟られました。既に明德といふ何をか明かにするといふ、此疑問を二十年來有つてゐたのであるが、爰に至りて大いに省みる所がありました。明德の隨に達する時まで、本文に書いてあります。それでも小成に安んぜず、江戸の千住小塚原の刑場に、獄門の首の並べてある下へ行つて、それと睨み合つて、坐禪したといふことで、それで禪定の力を鍊られました。愆ういふことが五六晝夜でありました。又或る夕に競馬場の堤の下で、馬が駈けてゐる下に仰向けに爲つてゐて、禪定力を試められました。其頃に肥前の松浦侯の下士を戒しめたことがありましたが、松浦侯が之れを聞いて、驚いて言ふには、

「是れ彼の琢藏主ならん。」

とて、それから家臣をして、自分の邸に迎へられたといふことであります。これは明德に就いての一つの話であるが、其他擧げれば種々あるが、略すこととして本文に入つて、「大學の道は明德を明かにするに在り」儒教の方では、三綱領と稱して居るのは、即ち此明德と、新民と、至善であります。それから「止まることを知りて」から「而して後に能く得」までは、之れを五術と稱します。之れに續

いた言葉は、本文の「大學」を見れば分りますが、八條目といふものが付いてゐる。それは、

「古の明德を天下に明かにせんと欲する者は、先づ其國を治む。其國を治めんと欲する者は、先づ其家を齊ふ。其家を齊へんと欲する者は、先づ其身を修む。其身を修めんと欲する者は、先づ其心を正しうす。其心を正しうせんと欲する者は、先づ其意を誠にす。其意を誠にせんと欲する者は先づ其知を致す。知を致すことは、物に格るに在り。」

で、これが「大學」の眼目で、三綱領、五術、八條目といふもので、「大學」は出來てゐます。これが先づ「大學」の骨子でありまして、先師洪川老漢の説を述べると、

「大學の書、開卷に大學の道は明德を明かにするに在り、民を新にするに在り、至善に止まるに在り、三綱領を擧ぐるは、先づ聖學の眼目を表顯するのみ。故に予は此文面に於て講説を用ゐず、先づ心修の術を述べ、而して後漸く講説に入る。其心修の術は知止以下の五句に在り。故に應に能得の下に於て、假りに十字を屬して「慮而后能得、明ニ明德、得レ新民、得レ止ニ至善」と連續して、始めて明德、新民、止至善の三綱領を講説すべし。此に到りて活文の句法宛轉として、窮り無く、愈々益々妙を覺えん。」

これは先師洪川老漢獨特の解釋でありますが、餘程勝れた解釋法だと納は思ふてゐます。今言ふた三綱領、五術、八條目といふものが、二百五字ばかりありますが、其文章は漢時代に發見したものであ

る。それは何ういふ所から得來つたかと言へば、孔子壁中の書といふて、彼の秦の始皇が、儒者を坑にした時、此「大學」といふ書を、壁の中に隠して置いた、それが孔子の生きてゐた時代の原文であつたといふ、然うした解し方でありませう。それで本文に就いて言ふて見れば、三綱領を先きにして、五術を後にするから、實行上より得たものは、明德から入つて來る。明德といふのはどんなものかと云へば、我が本心の變名と言ふても可い。或は上帝と言ひ、天命と言ひ、或は仁と言ひ、義と言ひ、名が種々に分れてゐるが、要するに其心は名もない、名付けやうもない。目で見ること、耳で聞くことも能きぬが、併し上天のことは、聲もなく、臭ひもなしと言ふては、捉へどころがないから、爰に表示して明德といふ。此徳といふものは、天から降つたのでも、地から湧いたのでもなく、神や佛が造つたのでもない。吾々が先天的に有つてゐるものを、暫く明德といふ。併し其有つてゐる明德であるけれども、如何せん人慾の私、佛法でいへば煩惱の爲めに、此明德を曇らせてゐるのだから、先づ「大學」即ち大人の道を學ぶ者の要義は、何處にあるかといへば、明德を明かにするに在る。明德を明かにし終つたならば、次に民を新にする。此新といふ字は、親の字が書いてあるのもありますが、程伊川は新の字を用ゐてゐますし、程明道は親の字を用ゐてゐます。そんな字義上には、やかましいことを澤山並べてゐるが、餘り然ういふことに重きを置かないでも、矢張新といふ字で宜しい。畢竟民を新にするに在り、自分が明德を明かにしたならば、一般の人をして、明德を明かにせしめよ

といふ意味をば、言葉を換へて民を新にするに在りといふたので、要するに明德を明かにするは自利的、民を新にするは利他的であります。利他は自利の起りで、自利は利他の起りであります。これに就いては古今東西、議論がありますが、畢竟一つであります。これから一步を進めて、何處に歸着するかといへば、至善に止まる。今の言葉でいへば、絶對的善であります。今倫理學上のことを聞いても、道徳上のことを聞いても、説は種々と分れてゐるが、大體の歸趣が、絶對善であるといふことは動かない。然ういふ所は吾が佛敎でも同じであります。佛陀といふことの意義は、自覺覺他覺行圓滿といふのであるが、其義理を此處に比べて見ても同じ意味で、明德が即ち自利であります。新民が利他であります。覺行圓滿といふ其悟りと、行ひと心が圓滿に至つた所が至善である。これが即ち三綱領であります。其三綱領を如何にして手に入れやうといふならば、それだけの修行が要る。實行を要する。其實行は何かといへば「止まることを知りて、而して後に能く定まる、定つて而して後に能く靜かなり、靜かにして而して後に能く安し、安うして而して後に能く慮る、慮つて而して後に能く得。」前に説いた通り、此三綱領を一つ我が物にしやうといふには、五術が要る。其五術の始まりは、止まるといふことで、先づ吾々が此動いてゐるところの心を以て、我が心の本を見やうといふても、それは難い。自分の動いて居る心其ものからして、先づ止水の如く、明鏡の如き其境界に入らねばならぬ。水の中に落ちてゐる玉を探らうといふならば、先づ其水を澄ましむるといふことが必要で、動い

てゐる心を以て、直ちに眞理を見ようといふても、決してそれは見えぬ。或は又色眼鏡を掛けてゐて本當の物を見やうとしても、物其者の正體は見えませぬ。先づ吾が心を止めることを一つ工夫しなければなりません。それが五術の始まりで、之れを詳しくすると、言ふ可きことは澤山あります。吾が佛法では、止觀といふやうなことがあつて、其事を例を擧げて言ふと、種々ありますが、餘り複雑に爲るから略して置きます。一と度心が止まつたならば、始めて能く定まる。止まるといふ字は、吾々が歩行してゐるのを、歩行みを止めたといふので、心が然ういふ状態に至つたならば、確然と定まつたので、吾が大道の定まるが如く、精神も一定不變といふ域に至る。若し其心が確然と一定の境界に至つたならば、定まつて而して後に靜かなりで、自ら靜寂の境界は、其處に現はれて來ます。靜にして而して後に安し。これは自然にして至るのであります。靜かならざるが爲めに、常に吾々は不安とか、若しくは煩悶とかいふことで、始終心が歩行してゐるが、靜かなる境界に居れば、自ら安く爲つて來ます。即ち心が安く爲つて來ます。而して後に能く慮る。恚ういふ工合に、心其者の形を對照して、一切の事を慮れば、着々其慮りが至善に爲る。慮つて而して後に能く得る。此下へ明德を明かにするを得、民を新にすることを得、至善に止まることを得といふ字を附けて、先師洪川老漢は回文的に解釋してゐられます。始まつて終り、終つて又始まる。吾が佛教では、禪那といふことを翻譯して、靜慮といふ意味に爲つてゐます。約めて言へば、五術といふものが、禪那といふこ

とに爲り、靜慮といふことに爲ります。言葉が違ふだけで、今日言ふ修養とか、或は實行とかいふことに爲れば、理窟から最う一遍直ちに實行の上に手を下さなければならぬ。其下すには、如何にして下すかといへば、五術で吾が心を練つたならば、自ら明德を明かにすることを得、民を新にすることを得、至善に止まることを得、これは考へれば考へる程、此文章が自然の法則に叶ふて、そして眞理を明かにしてゐます。

學問の大綱

「此れは是れ聖學の綱領」現時は聖學といふと、一種の文章學で、畢竟漢文學の如く爲つてゐるが、それは漢文としての聖學で、聖學には道が備はらなければならぬ。「大學」の此本文といふものは、聖人の學問の大綱で、大綱なると同時に、これが實行法であります。「煉心の實法、而して孔門の秘訣なり」孔門の秘訣といふのは外にはありません。此中にあります。「六經諸子の言」六經といひ、諸子といひ、其書物は浩漭なるもので、汗牛充棟も嘗ならぬ。形容して言へば「山の高く海の深きが如し」であります。「悉く皆此一著子の註脚なり」一著子といふのは、禪錄にある語だが、圍碁などでいへば一と手といふ意味で、禪宗でいへば、たつた一と手の其註釋だ。「之れを究めて明白なるを聖と曰ひ、賢と曰ふ」聖人といひ、賢人といふ「之れを昧くして昏蒙なるを凡と曰ひ、狂と曰ふ」凡夫といひ、

狂人と言ふ、同じ眞理であるけれども、心理を明かならしむるのと、心理に昏いと、差である。丁度吾々が大地に由りて、能く立つてゐるが、又同時に大地に由りて、能く倒れると同じであります。「明德は譬へば一顆の眞珠の如し」これは親切な譬へで、眞珠といふが如き一つの玉、これは佛教の經文などにも、其譬がしてありまして、其一つを擧げて見ると、「圓覺經」にある世尊が普賢菩薩に告げて言はるゝ條に、

「善男子當に知るべし、身心皆幻垢たり。垢相永く滅すれば、十方清淨なり。善男子譬へば清淨摩尼寶珠の五色に映じて、方に隨つて各々現するに、諸の愚痴の者は、彼の摩尼實に五色有りと見るが如し云々。」

とありまして、恚ういふ意味のことは、吾が佛教經典には澤山擧げてあります。爰に出てゐる譬へも其如く、眞珠其ものは「圓明寂靜」圓なり、明なり、靜かなり、淨きなり「都て差別相無し」珠其ものは、差別を以て掩はれず「體明かなるを以ての故に、物に對する時、能く一切の色相を現す」何ういふ色、何ういふ姿を持つて來ても、其姿其儘に現はれる、「色自ら差別有りて」青、黄、赤、白、黒の色は自ら差別がある。千差萬別、如何程複雑であつても「珠は變易無し」玉は變らぬ、黒くても赤くても、玉の性に變ることがない。それを自分の心に乘せて、工夫して行つたならば「其精微深妙の理の如きは、筆墨言語の及ぶ可きに非ず、只學者刻苦自得するに在るのみ」只自分で工夫して知る

より外はない。白隠禪師の言はれた言葉に、

「此玉現する時には、世界隠れる。世界現する時には、此玉隠る。」

と。實に面白い言葉であります。此玉現する時には、世界隠れる。吾々が目に物を見てゐる時、耳に物を聞いて居る時には、此心が隠れる。目を離れ、耳を離れた時は、此心は吾が掌を見るが如く現はれてゐる。吾々は只五官ばかりを當てにしてゐるから、それ以上のことは見えない。それ以上の眞理は分らぬ。これ皆五官に束縛されるからであります。目なくして見、耳なくして聞き、鼻なくして嗅ぎ、舌なくして味ひ、手足なくして運動自在といふ。然ういふ境界は、皆吾が室内に於て、法身とか、機關とか、言詮とか、難透難解とかいふことで、一々實地實驗的に、それを證明して行く道が立つてゐる。だから其精微深妙の理の如きは、筆墨言語の及ぶ所にあらず、只學者刻苦して、自得するに在る。それならば如何にして自得するかと言へば、諄々しいが、最う一遍いふと「自得の術は、止定靜安慮の五者に在り」それが實行法であります。「是れ吾が門の靜坐工夫と同じ」相談したやうに、實行法が同じやうに出來てゐる。坐禪工夫といふても、これと同じで變りはありません。「即ち鍊心の活法なり」である。「竊に按ずるに」吾れ洪川が按ずるに、「正明德より能得に至る、全く同文の句法を用ゆるなり」循環的の文法である「蓋し聖者の辭を屬するや」勝れた人の言葉の作り方が「製作天地に參ず」天地に參する位に出來てゐる。然うして文章の「意匠自ら陰陽運行の氣象に則りて藻を擒

く「春に爲れば花が咲き、秋に爲れば紅葉する。其四時の變化、晝夜の更代、其陰陽運行の氣象に則つて、綾を取るから、吾が心の本體を見たいといふものならば、直ちに其實行に就いて『止定靜慮』安の字は最う略してある。『止定靜慮の法を修すべし。久々功夫純熟せば』これは性急にして得られるものでない。精神の修養などいふことは、何時の間に此處まで進んだか、何時の間に此處まで出来上つたか、知らざる内に進んでゐるといふものであるから、緻密に縁大に考へ進めて行かなければならぬ。然うして行つたならば『則ち一旦濶然として大に得る所有り』これが則ち自利といふことの解釋であります。自利利他といふことを、初めに申しましたが、これは自利的で『然る後己れの得る所を養ひ、以て衆人に及ぼし、衆人をして又之れを明めしむ。之れを民を新にする』と謂ふ。己れが獨り之れを明らめたから、それで止むるといふのではない。他人にも之れを明らめしめる之れを新民といふ、これは利他でありまして、そして『日用行事の上に於て』行住坐臥の上に於て『明德の全光を發揮し』一とたび斯くの如きの道に依り、斯くの如きの方法に依りて、修養するならば、明德の全光は茲に赫耀として光りを發する。恚ういふことは多少でも然ういふことを實行した人でないと、徹底することができぬが、二たび其境界に至つた人は、明德の光りを發揮して『上天に耻ぢず、下人に耻ぢず』といふ有様で『志を得れば民と之れ由り、志を得ざれば獨り其道を行ふ』志といふのは、經世國、男子大丈夫の心だ。佛敎の言葉でいへば、衆生濟度であります。志を得たらば、皆と一緒に民

を始める。若し時利あらずして、其志を達することができなかつたら、獨り其道を行ふて、山林などに隠れてゐる。志を得ると得ざるとに拘らず、其道を行ふてゐる。其有様を形容して見れば、『富貴も淫する能はず』淫するといふのは、附け込むといふやうなことで、富と貴きは、皆人の欲する所、貧しきと賤しきとは、人の欲せざるのが普通の人情であるが、斯くの如き境界に至つたならば、富も貴きも犯すことができぬ。『貧賤も移すこと能はず』貧賤には誰れも志を移し易いものだが、貧賤と雖も、吾が志を移すやうなことがない。『威武も屈すること能はず』威武に對しては、多くの人が屈服する。併し此境界に爲れば、若し白刃を以て、吾が首に擬せらるゝとも、決して屈することができぬ。例を擧げると澤山ありますが、例せば彼の羅什三藏門下で、四哲と言はれた僧肇法師の如きは、秦王之れを刑場に引き出して、其首を刎ねんとした時に、

四、大元無主 五、陰本來空
將頭臨白刃 猶似斬春風

と唱へ、泰然自若として王の爲めに首を刎ねられて了りました。又鎌倉圓覺寺の開山佛光國師が、未だ日本に來られぬ前、支那の雁山能仁寺で、元兵の爲めに、今や首を刎ねられんとした時、偈を唱へられたのが、名高い彼の、

乾坤無地卓孤筇 喜得人空法亦空

珍重大元三尺劍 電光影裡斬春風

でありまして、其の由つて來たるところは、肇法師の偈唱から出てゐます。縱令國王の權威を以てしても、如何に勢力の壓迫を加へても、此心一箇を屈することは能きない。『之れを至善に止まると謂ふ』其處まで往つたのが、至善に止まるのであります。即ち覺行圓滿の境界であります。それでは此處で止むかと言へば然らず「尙ほ止定靜慮の法を以て煉り去り、愈々益々明德を明了にして、以て新民至善の心修を廢せず、幾回か反覆鍛鍊終つて復た始まる」天地陰陽の運行といふものは、春始まつて、冬終つて、それで了ひかといへば、然うではありませぬ。又廻はり舞臺の如く一轉すると、大晦日の一番終りには、一月一日といふものが、其處に胚胎してゐます。去れば一月一日に大晦日があります。大晦日の最後に、一月一日を有つてゐます。原因の中に結果があり、結果の中に原因があり、無始に涉り、無終に涉つてゐます。幾回も反覆鍛鍊して終つて、復た始まる有様は「循環端無きが如し。之れを大學日新の道と謂ふなり」一日一日を新にして行く、最う其日は其日は即ち一月一日であります。其日其日の一月一日が、洵に長時間の過去際であり、長時間の過去際が、未來際であります。過去、現在、未來が、目前の一念頭を離れて居りませぬ。然ういふ心持が「大學」日新の道であります。「故に下文に曰く『大學』の本文を見たら分る「物本末有り、事終始有り」本といふのは、明德を指してゐます。末といふのは、日常行事の上のことを指してゐます。物には本末がある。事には終始

がある。終始は附いて廻つてゐる。本末といふことは、決して離れられないが、本にすべき所を末に考へたり、又終りを始めに誤つたりしては不可ぬ。宜しきを得なければ不可ぬ。先後する所を知れば則ち道に近し」これは矢張本文であります「其反覆叮嚀、人に示すの意、至つて深切なり。學者其れ研究せざる可けんや」これは矢張先師洪川老漢の評釋と言ふて宜しい。一言にしていへば、先師の評であります。此評は實は見る人が見たら、別に講釋に及ぶまいが、併しながら先師の大に力を用ゐたのは、此評にあるので、本文は借りて來たので、評は先師獨特の見識を以て擲いたので、これだけの解釋では、先師の心の萬分の一も盡して居らぬのであります。

執中 第二則

人心惟危。道心惟微。惟精惟一。允執其中。

允執其中一語。聖王傳授道統之警語也。誠盡善矣。至大舜加三句。又可謂盡美矣。惜乎朱熹道眼不明。漫下凡解云。有「人心道心之異者。則以下其或生於形氣之私。或原於性命之正。而所以爲知覺者不同。是以或危殆而不安。或微妙而難見耳。精則察夫二者之間而不雜也。一則守其本心之正而不離也。從事於斯。無少間斷。必使道心常爲一身之主。而人心每聽命焉。則危者安。微者著。而動靜云爲。自無過不及之差矣。嗚呼。以朱熹之才之美。何以如此謬解也。是必中年未悟之說也。唯以道力微弱。頻出凡情之計較。打成兩橛。以理窟捏合。而評定聖語。費居多閑言語。譬如野人在先王廟外。博量盪盪之美百官之富也。不齟齬者殆希。

蓋物之不駁雜。謂之精。聖語分明曰惟精惟一。允執其中。言人心即道心。道心即人心。無二無別。惟精惟一也。左之右之。至此妙境。謂之允執。厥中。是已。若夫眞箇見性分上之人。豈待註解哉。是鍛鍊心術之極也。須入予室究之。雖然。學者自非刻苦用力之久。不能信之矣。

(訓讀) 人心惟危く、道心惟れ微、惟れ精惟一、允に其中を執れ。

尤に其中を執れの一語は、聖王道統を傳授するの警語なり。誠に善を盡せり。大舜三句を加ふるに至りて又美を盡すと謂ふ可し。惜い哉朱熹道眼明かならずして、漫りに凡解を下して云ふ、人心道心の異有る者、則ち其れ或は形氣の私に生じ、或は性命の正に原くを以て、而かも知覺する所以の者同じからず、是を以て或は危殆にして安からず、或は微妙にして見難きのみ。精なれば則ち夫の二者の間を察して雜はらざるなり。一なれば則ち其本心の正を守つて離れざるなり。斯に従事して、少しも間斷無ければ、必ず道心をして常に一身の主と爲りて、人心毎に命を聽かしむ。則ち危き者は安く、微なる者は著はる。動靜云爲、自ら過不及の差無し。嗚呼朱熹の才の美を以て、何を以て此くの如く謬解するや。是れ必ず中年未悟の説ならん。唯道力の微弱なるを以て、頻りに凡情の計較を出す、打して兩橛と成し、理窟を以て捏合し、而して聖語を評定し、居多の閑言語

を費す。譬へば野人先王廟外に在り、盪盪の美、百官の富を博量するが如し。齟齬せざる者殆んど希なり。蓋し物の駁雜ならざる、之れを精と謂ふ。聖語分明に曰く、惟れ精惟れ一、允に其中を執れと、言ふは、人心即ち道心、道心即ち人心、二無く別無し。惟れ精惟れ一なり。左之右之、此妙境に至る。之れを允に厥の中を執ると謂ふ是れのみ。若し夫れ眞箇見性分上の人、豈に註解を待たんや。是れ心術を鍛錬するの極なり。須らく予の室に入りて之れを究むべし。然りと雖も、學者刻苦して力を用ゆるの久しきに非るよりは、之れを信する能はず。

人心即ち道心

「人心惟れ危く、道心惟れ微、惟れ精惟れ一、允に其中を執れ」は「書經」にある辭で、其大禹謨といふ所に出てゐます。註釋に就いて見ると、初め堯帝が舜帝に天下を讓る時の言葉は、此終りの只一句だけで、允に其中を執れといふ只それだけでありましたが、一轉して舜が禹に天下を讓る時に爲つて其意を擴めて、人心惟れ危く、道心惟れ微、惟れ精惟れ一、の三句を加へたのであります。それに就き洪川先師の評論があります、本文の文字は、洵に意味は易い。先づ暫く人心と道心と分つたので、之れを吾が佛教の言葉に比して言ふと、人心といふのは煩惱の心、道心といふのは菩提の心であります。勿論菩提といふのは梵語であります、矢張、道といふ字に當つてゐます。煩惱心即ち迷ひ

の心は洵に危く、菩提心といふものは、洵に微かにして見難いものであります。惟れ精惟れ一なりといふのは、精しくして、人心と道心とを一にして、允に其中を執れといふ。これは誰が見ても能く分つてゐる。只議論の分れるところは、何處かといふと、人心と道心とを二つに見るといふのと、人心即ち道心である。道心即ち人心であると、恚う見るのとの相違である。現今の言葉でいへば、一元的に見るか、二元的に見るかといふそれだけの違ひであります。今洪川先師の説を、評論の中に入るに先だちて言ふて見ると、これは外の書にある先師の説であります。

「朱熹は人心道心を分つて二と爲す。妄を離れて眞を見る、黒を離れて珠を求むるが如し。山僧は人心に即して道心を明らむ、所謂妄に即して眞を見る、黒を以て珠と爲すが如し。乞ふ高見の者、縑素を辨じて看よ。」

と。これは獨り先師洪川老漢が然う見たばかりでなく、一二古人の見る所を擧げて見ると、有名な陸象山は、

「解する者多くは人心を指して人慾と爲し、道心を天理と爲す。此説是に非ず、心は一なり。人安んぞ二心あらんや。人よりして曰ふ時は、惟れ危しと曰ひ、道よりして曰ふ時は、惟れ微なりと曰ふ。念ふこと罔ければ狂と爲り、克く念へば聖と爲る。危きに非ずや。聲も無く、臭も無し、微なるに非ずや。」

と言ふてゐるが、矢張先師洪川老漢の見る所も同一であります。最う一つ確めの爲めに、王陽明の見方を擧げると、其語録に曰く、

「王道息み、伯術行はる、功利の徒外天理の近似を倣り、以て其私を濟して、以て人を欺いて曰く、天理固より是くの如しと。知らず、既に其心を無にす。而るに尙ほ何んぞ天理と謂はんや。是れよりして後、心と理とを析つて二と爲す。而して精一の學亡ぶ、世儒の支離、外刑名器數の末に索め、以て其所謂物理なる者を明かにせんことを求む。而して吾が心即ち物理初めより外に假るなきを知らず。」

とあつて、之れ又陸象山の見る所と、殆んど同一であります。此二人のみならず、他にも尙ほあるが略して置きます。禪的立場に依つて見ると、今説く如く、人心が即ち道心であり、道心が即ち人心である。之れに就いて、種々例を擧げ、證を擧ぐれば限りがないが、眞淨克文禪師、これは世間では知らぬ人もありますが、宗門では有名な人で、此克文禪師の説に依ると、「圓覺經」の中に、佛が言はれたに、

「一切衆生は皆緣覺を證する」

と恚ういふ辭がある。一切衆生は迷ひの凡夫であるが、其迷ひの凡夫も、皆緣覺といふ悟りを證明してゐる。明かに悟つてゐるといふ。更に最う一つ「維摩經」の辭を擧げて見ると、

「受を滅せずして證を取る」

恚ういふ工合に言ふとあります。更に文殊菩薩の辭を見ると、

「衆生現行の無明、即ち是れ如來根本の大智なり」

とあります。大乘佛敎の立場から言ふと、斯くの如くであつて、然ういふことを經文には種々言ふてあります。それに就き一つの譬へがある、

「人の本月に依りて、第二の月を見るが如し」

と。本月といふのは、空間に輝いてゐる一つの月、それを本月といふ。本當の月に依りて、第二の月を見るときといふので、第二の月といふものはある理由はないが、或る一種の作用で見ると。月には二相ないけれども、目をよる者の見るところに依りて、第二の月と爲す。自分の本月よりして、第二の月を見る。恚ういふ工合に譬へた今も其通りで、人心道心が元來一つであるが、之れを二つに分けるのは恰も第二の月を見るが如くである。恚ういふやうな説が、大乘佛敎の中には、到る處にあります。此意味に於て、先師洪川和尚は、此本文を解釋しやうといふのであります。本文に現はれてゐる言葉は朱熹なども重きを置いてゐる言葉で、

「夫れ堯舜禹は天下の大事なり。天下を以て相傳ふるは、天下の大事なり。天下の大事を以て、天下の大事を行ふ。而して其授受の際、叮嚀告戒、此くの如きに過ぎざれば、即ち天下の豈に以て此

れに加ふるあらんや云々」
此朱熹などの解釋する所は、吾々の立場から見ると、大に違つた解釋であるといふことを言はれてゐます。

南宗と北宗

これから評論に入ります。「尤に其中を執れの一語は、聖王道統を傳授するの警語なり」これは辯を付けるまでもありません。支那に限らず、凡そ千年二千年前の時代には、國を治めるといふ帝王の道といふものは、政治も、宗教も並に法律のことも、皆殆んど一つでありました。此國の歴史を見ても古いところは政教一致であるから、天下を讓るのは、道を傳授するといふことに爲ります。其處で道を傳授するの、其意味に於いて、言ひ出したところの言葉であります。尤に其中を執れの一語は聖王道統を傳授する警語であります。「誠に善を盡せり」言葉こそ簡單であるけれども、其意義に至りては、善盡してゐる。併し善盡した上、更に美盡すといふことに爲ると、愈々益々完全なものに爲ります。「大舜三句を加ふるに至りて、又美を盡すと謂ふ可し」人心惟れ危く、道心惟れ微、惟れ精惟れ一、此三句を加ふるに至りました。美を盡せりと謂ふ可きであります。殆んど善盡し美盡して、一字一句も間然する所はない。「惜しい哉朱熹道眼明かならずして、漫りに凡解を下して云ふ」これからが

先師洪川和尚の議論で、是れ位善盡し美盡した本文であるに拘らず、朱熹の眼が明かならぬので、漫りに凡解を下して云ふに「人心道心の異有る者は」朱子は初めから甲は人心、乙は道心と二つに分けた。此異りがあるのは「或は形氣の私に生じ」朱子などの辭では、或は形質の心といふ字を用ゐた。言はゞ身體に屬した心で「或は性命の正に原づくを以て」性命といふことは、本然の性と儒者の方では言ふてゐます。氣質の性、或は本然の性、今は言葉を変へて、一は形氣といひ、一は性命といふ。本文に人心とあるは、形氣の私に生じた心、道心とあるは、性命の正しきに依りて起つた心である。と、初めから二つに見て了つた。故に「知覺する所以の者同じからず」知覺する所が違ふ。これは一應至當なことでありますが、實は幼稚な見方であります。「是れを以て或は危殆にして安からず、或は微妙にして見難きのみ」初めから恚う二つに分れたのであるから、若し人心といふ側から見れば人心といふものは、危殆にして危険なものである。何時憎い心を起すか、何時怒りの心を起すか分らぬから、其起す所の心に依りては、随分自分の身を亡ぼし、家を亂し、天下國家を亂すといふことゝ爲るから、其形氣の私から生ずる人心といふものは、頗る危険千萬なものであります。又道心といふものは、本然の性から出てゐる言葉であるが、其代りに微妙で、却々吾々凡人には、其道心といふものを明め難い。至極微かなる爲めに見難い。恚う二つに分けた。それから本文の精と一といふ言葉を使ふたのは外ではない。「精なれば則ち夫の二者の間を察して雜はらざるなり」心を精しうする時は

彼の二者、人心と道心の間を能く觀察して雜へない。これは人心であるから、退けなければならぬ。これは道心であるから、明らめなければならぬと雜へないでゐる。「一なれば則ち其本心の正を守つて離れざるなり」我が心を一にして保つ時には、其本然の正を守つて、本然から離さない。恚ういふ風に分けた。「斯に従事して、少しも間斷なければ」恚ういふ鹽梅に従事して、平生自分の修養を怠ることなければ「必ず道心をして常に一身の主と爲りて、人心毎に命を聽かしむ」道心が、恰も一家の家長か、主人の如くである。そして人心なるものは、其雇はれてゐる人の如くにして、一々命令に従ひ家僕が行動する如く、凡夫の心が常に徳性の精神支配を受けて、着々其事に當ることに爲ります。恚う保ち、微かにして見難い所の道心を、愈々明かにして「動靜云爲、自ら過不及の差無し」恚ういふ調子が取れて行つたならば、立ち働く上に於ても、總てのことを爲す上に於て、過不及の差を免れて、常に中庸の節に當る。是迄が朱熹の註釋であります。これも併し一概に退ける譯には往かぬだらうと思ふ。恚ういふ風に心を修め、氣を整へて往くことが必要で、現に我が宗門にも、南宗北宗といふことがあります。其南宗北宗と分れた所以は、何處から分れたかと言へば、彼の達磨大士から五代目、弘忍大師に至りて、一は慧能大師、一は神秀大師の二派に爲りました。其二人の見解は、何ういふ所で分れてゐるかといへば、五言絶句の詩に、自分の意見を現はしたのであります。其神秀大師は、

身是菩提樹 心如明鏡臺
時時勤拂拭 勿使惹塵埃

と恚う其意中を述べてゐます。これは衲の考へであります。朱熹が前に言ふた説に稍近い。ところが同じ門下で修行した六祖慧能大師は、

菩提本無樹 明鏡亦非臺
本來無一物 何處惹塵埃

と恚ういふ風であります。ところが此慧能の方が、師匠弘忍大師の意に叶つて、遂に傳法することに爲りました。同じ禪宗が分裂して二と爲り、神秀の方を北宗と言ひ、慧能の方を南宗と言ふことに爲りました。北宗の方は漸的漸進で、南宗の方は頓的急進といふと弊があるが、頓悟といふので、一は漸進といふならば、一は頓禪といふ工合に、二つに分れました。丁度今の朱熹の説が、北宗たる神秀の説に近く、直ちに同一と斷言することは能きませぬが、近い一つは、二元的見解であります。哲學派から見ると、古今東西二派が相争ふてゐます。今日は一元的議論に歸してゐるやうだが、細かに論ずると、今日でも矢張此二派は相争ふてゐます。相争ふてゐる間に、眞理は益々磨かれると思ふ。先師洪川和尚は恚う言はれたが、強ち朱熹の説も非難すべきことではないかと思ふ。「嗚呼」と歎息して「朱熹の才の美を以て、何にを以て此くの如く謬解するや」朱熹程の豪らい人で、何うして恚う誤ま

り解したので——あらうか、「是れ必ず中年未悟の説ならん」朱子一代でも、青年時代中年に至つての説は、又大變遠ふ「唯道力の微弱なるを以て、頻りに凡情の計較を出す」一口に言へば、未だ年が若い、見識が若いから、道力微弱なる故を以て、頻りに彼れ是れと比べて「打して兩楸と成し」慙ういふ分別をして、丁度一本の木を二つに断ち切つたやうなもので、「理窟を以て捏合し、而して聖語を評定し、居多の閑言語を費す」と洪川先師は評論されました。其様子は「譬へば野人先王廟外に在り重盪の美、百官の富を博量するが如し」我れに田夫野人なる者が、國王の嚴かなる廟内のことは知らず、只廟外に立つてゐて、九重雲深きところのことを推量するやうなものであります。博の字は博の字の誤りであらうと思ふ。重盪は天を祭つたり、祖先を祀つたりする時の器物であります。此字は説文に依ると、酒食を盛る所の器とありますが、嚴かなる所の重盪の美を、只空に推し測つてゐるやうなものであります。又百官の富を種々當て推量してゐるやうなものであります。「齟齬せざる者殆んど希なり」である。「蓋し物の駁雜ならざる、之れを精と謂ふ」字義上からいふと、米を白けたのが精といふ字だ。「聖語分明に曰く、惟れ精惟れ一、允に其中を執れ」と聖人の語に明らさまに言ふてゐる。惟れ精惟れ一、允に其中を執れ「言ふは、人心即ち道心、道心即ち人心」で、此間に「二無く別無し」波が即ち水なり。水が即ち波なりといふが如く「惟れ精惟れ一なり」で「左之右之」此見解から、一つ切つて出るならば、「此妙境に至る」此妙境に至つた時が「之れを允に既の中を執ると謂ふ」のであ

る。これ位著しく本文に其意味が現はれてゐる。「若し夫れ眞箇見性分上の人ならば、豈に註解を待たんや」註を爲すには及ばぬ。經文などを見るのでも、今洪川先師の言はれるやうな見方によろしい。佛教の經論といふものは、註の上に又註を加へて、了ひには末に付いてしまつて、本文は始終留守に爲つて了ふ。勿論精しく爲るが、大變煩瑣なものに爲つて了ふ。經文を見るには、註釋を見ずして、本文を見るのが、矢張一種の讀書術の一と思ふ。「是れ心術を鍛錬するの極なり」故に此本文の如きは「須らく予の室に入りて之れを究むべし」人心即道心、道心即人心差別の中に平等があり、平等の中に差別があるといふ理を明らめて、然ういふ風に活かして見なければならぬ。それは何うしても室内に於て、實地の修行を要する。「然りと雖も、學者刻苦して力を用ゆるの久しきに非るよりは、之れを信する能はず」併し幾ら講釋して見ても、講釋は講釋だ。學者が刻苦して力を用ゆることが久しくなければ、私が言ふやうなことを能く信じまいと、慙う評されました。洪川先師は此則に於て、更に別に腕頭の力を示し、却々骨を折られましたから、禪宗的の言ひ現はし方で、慙ういふことを言ふてゐます。若し人あり前語を擧して、如何なるか是れ其中を執ると、慙う尋ぬる人があつたならば、最無理窟は言はぬ、今までのやうなまだるツこい事は言はぬ。俺は慙う答へるがと言ふて、古人の詩を借りて來られました。

「事に感じては花にも涙を漲ぎ、別れを惜んでは鳥にも心を驚かす」

これは古人の名句であります。恚ういふことは、却つて辯を付けると疵が付くことであるから、人々が能く味はつて見るが宜しい。尤に其中を執るといふのは、中央を眺めやうといふのではありませぬ。今日吾々が人事百般の上に、心を種々に用ゐてゐる其中の中を執るといふことで、差別の上に精一なるところの意味が現はれてゐます。恚ういふ意味を洪川先師が説かれたのであります。

惟 聖 第三則

書曰。惟聖罔念作狂。惟狂克念作聖。

聖人也。狂亦人也。性情豈不亦同乎。唯其所以爲聖者。以下其見得自性明白。雖喜怒哀懼愛惡欲之情時或發。直作眞淨明妙一枚之大光。而受用焉。其所以爲狂者。自不知其性之明潔。故被利衰毀譽稱譏苦樂之風漂溺。七情交相攻。未始有窮。卒昧沒自己本有之光輝焉。是以悟之與迷分。聖之與狂別。爲之如何。蓋悟時情皆爲性。迷時性却爲情。只須截斷迷情之本源。截斷迷情之本根。即在見性。見性即在克念。然則克念作聖一語。即吾門見性成佛之轉語也。莫以語之異怪之。詩曰。伐柯伐柯。其則不遠。採柯以伐柯。尙以爲遠。噫。

(訓讀) 書に曰く、惟れ聖も念ふ罔ければ狂と作り、惟れ狂も克く念へば聖と作る。聖も人なり。狂も亦人なり。性情豈に亦同じからずや。唯其聖たる所以の者は、其自性を見得す

る明白なるを以てなり。喜怒哀懼愛惡欲の情時に或は發すと雖も、直ちに眞淨明妙一枚の道光と作して受用す。其狂たる所以の者は、自ら其性の明潔なるを知らず、故に利衰毀譽稱讚苦樂の風に漂溺せられ、七情交も相攻め、未だ始めより窮有らず、卒に自己本の光輝を味没す。是を以て悟と迷と分れ、聖と狂と別る。之れを爲す如何。蓋し悟の時情皆性と爲り、迷の時性却つて情と爲る。只須らく迷情の本源を截斷すべし、迷情の本根を截斷するは、即ち見性に在り。見性は即ち克念に在り。然らば則ち克念聖と作るの一語は、即ち吾が門見性成佛の轉語なり。語の異なるを以て之れを怪しむ莫れ。詩に曰く、柯を伐り柯を伐る。其れ則ち遠からず。柯を採つて以て柯を伐る、尙ほ以て遠しと爲す。噫。

絶對善

「書に曰く、惟れ聖も念ふ罔ければ狂と作り、惟れ狂も克く念へば聖と作る」これは「書經」の周書多方の篇に出てゐまして、周の成王が、諸侯に告げた所の言葉で、其言葉の中の肝腎なところを擧げたのであります。今之れを講釋するに先立ち、衲の考へを少し述べませう。爰等の言葉は、儒教の倫理學といふやうなものとも見ても宜しからう。今時の倫理學といふものは、種々の説があつて、却々難かしいが、畢竟倫理學の根本立場は何處にあるかといふならば、言ふまでもなく至善といふことに外

ならぬ。即ち絶對善といふものに歸する。これは古今東西殆んど立つ所を同じうしてゐると言ふても宜しい。併し善惡の標準といふことに爲ると、大分議論が多いやうであります。衲どもの僅に知つてゐる所を言ふと、大體善惡の標準といふものを、二派に分けたらば、大抵今の學説が、之れに含まれてゐるであらうと思ふ。其二派といふのは何かと言へば、一つは法則論、他は目的論であります。此目的論と、法則論と大別せられた中に、所謂倫理學説といふものは、束ねられてゐるでありませう。委しく言ふならば、法則論の側にも種々あつて、宗教的法則論とか、或は政治的法則論とか、或は直覺的法則論とかいふことに分けることが能きます。又目的論といふ中にも、快樂説とか、克己説とか完己説とか、學者に依りて種々言ひます。大體然ういふ風に分けて見ますと、孔孟の説といふものは先づ目的論の中の所謂克己派に屬する所のものでありませう。併し態々然ういふ派であるとか、流儀であるとかいふ所へ持つて往かぬでも可いけれども、併し今流行してゐる所の倫理學説の部類に依りて、當て箴めて見ると、然う思はれるのであります。一方の快樂説に對して、一方は克己説で、快樂説は言ふまでもなく感情を主としてゐます。一方の克己説に爲ると、理性に重きを置いてゐます。一方の快樂説も細かに分けると、種々あるやうで、自己の快樂を進めるといふのと、社會の快樂を進めるといふのとがあります。自己の利益を進めて往かうといふのと、更に社會の利益を進めやうといふのと、其處に自利と、利他とか、自愛とか、他愛とか、段々枝から枝に岐れてゐますが、兎に角理性



といふものを比較的軽く見て置いて、人間の感情慾望を満足させやうといふのであります。それ故目前の利益とか、瞬間の快樂とか、自然主義であるとか、現實主義であるとか、さては本能だの、衝動だのと種々の説を並べる。それに反して克己説といふものは、恰も孔子の己れに克つて、禮に復へるといふ如く、自己の慾望に打ち勝ち、所謂本能だの、衝動だのといふ利己的情念に打ち勝ち、そして自分本来の理性といふもの、向上發展を計らうといふのであります。それから又克己説といふのは自己本来の面目を完うするといふので、即ち吾人が先天的に備へてゐる美はしき感情、眞なる理性其儘の眞面目を完全に實現しやうといふのであります。之れをセルフ、リアリゼーションとか、自我實現説とか言ふてゐます。今は完己といふ字に變へて言ふたが、然ういふ説を、近世のグリーン博士やゼームス教授などいふ心理學者達も唱へてゐるやうであります。現今の學者の説は、大體此完己論に一致してゐるやうな有様であります。此處に出てゐる所の言葉も、然ういふ所に當て敵めれば、言ふまでもなく克己派であると思ふ。佛教の如きは快樂説もあり克己説もあり、大小一乘其説く所に本末があるが、歸する所完己説で、其ことは『法華經』などに詳しく説いてあります。さてこれから本文に戻つて、惟れ聖も念ふ問ければ狂と作り、惟れ狂も克己念へば聖と作る。此言葉は洵に見易く、初めから聖人はないし、又初めから狂人もない。狂といふても、通俗にいふ氣違ひといふ意味ではありませぬ。狂といふ字は、寧ろ愚といふ字の意味に解してよろしい。聖人と雖も、念ふことがなければ

狂愚と爲る。又狂愚なるものと雖も、克己念へば聖人と爲る。譬へていふならば、一つの大地の上に吾々は時あつて倒れることがあるし、又起きる時も、矢張大地によりて起きる、轉げて倒れるのも土の上、起きるのも矢張土の上、どちらにしても念ふと念はぬとで、其處に聖と狂と分れるのであります。此本文は初めに説いた如く、周の成王が諸侯に告げた言葉でありますが、此言葉は周公が作られたので、成王は未だ年少でありましたから、周公が皆成王の詔を作られたのであります。

佛も初めは凡夫

次に先師洪川老漢の註に入りますが「聖も人なり、狂も亦人なり。性情豈に亦同じからんや」聖といふても人で、狂といふても又人で、人に變りはない。吾々佛教の上からいふても、初めからの佛はありませぬ。佛も初めは凡夫であり、凡夫も遂には佛と爲ります。其性情も亦決して異つたものではない。博士とか何んとか肩書のある大學者でも、學ばぬ以前は無學であります。此處では總て儒教の言葉を藉りて言ふてありますが、佛教の言葉でいふと、性情などいふことは、餘程委しく分けられてありまして、鳥渡一言して見ると、性といふ字は、常に佛教では、如々不動といふ意味の時に、恚ういふ性の字を用ゐます。同じ心でも、心の本體といふ時は、性の字で、情は所謂感じて遂に動く、之れを情といふて、喜怒哀懼愛惡欲、次から次へ移り變つて行くものを指します。それを佛教

で種々の分け方がありますが、搔い摘んだことを一言すると、此心を三種に分ける、第一が縁慮の心が獨頭の心、其次が眞實の心、恚ういふ風に分けて、此三つは箇人的心であります。それから宇宙的の心を指しては、總該萬有心といふてゐます。それで縁慮の心といふのは、外界一切の物を、五官の作用で縁じて起る心であります。即ち眼に見、耳に聞き、鼻に嗅ぎ、舌に味はひ、身體で觸る。恚ういふ五官作用から、動き出る心、それを佛教では縁慮心といふてゐます。其心は取り止めもなき一時的の心であります。獨頭といふのは、これは單獨の心の働きで、直接には何も對境がありません。色を見るとき、聲を聞くとか、然ういふことなしに、獨りで起る心、それも微細に分けると、定中の意識とか、夢中の意識とか、獨散の意識とか言ふてゐます。現代の言葉でいへば、想像とか、聯想とかいふてゐます。其ことであります。それから眞實心、これは文字と少しも變らぬ。眞實至誠の心で、少しも移り變りのない心であります。以上は個人としての心を、三通りに分けたのであるが、それから個人といふ境界を超えて了ふて、直ちに宇宙的大精神の當體を指して、總該萬有心といふのであります。それを丁度此處に敘めると、性の字は眞實心、情の字は縁慮の心、恚ういふ工合に分けて置いたら、性と情との區別が能く分かうと思ふ。唯其聖たる所以の者は、其自性を見得する明白なるを以てなり。聖と狂と分れるのは、何處で分れるかといふと、先きの所謂總該萬有心を見得しえへすれば、今度は喜怒哀懼愛惡欲の七情を發して、喜ぶとか、怒るとか、哀しい、怖しい、可愛い、惡

い、欲しいと思つても、一向差し障りはない。譬へば明珠の五色夫れくく映するやうなもので、情の起るのは自然に起るのであるから、情其者に罪があるのではありませぬ。「喜怒哀懼愛惡欲の情時に或は發すと雖も」それを「直ちに眞淨明妙一枚の大光と作して愛用す」即ち根本的に於て自性を見得してゐるから、自由自在のものであります。此心を見るときは、鳥渡素人には、どんなことか解らぬか知れぬが、恒に菩薩は、眼に佛性を見るときは、自性を見得して、掌を見る如くまで至つたら、如何に喜怒哀懼愛惡欲の情が時に發したりとも、其發したものが、直ちに眞淨明妙一枚の大光となる。迷ふてゐる時は、菩提といふものが煩惱であります。悟るときは、煩惱が即ち菩提であります。此處が手を翻へせば雨、手を翻へせば雲といふ鹽梅に、僅の心氣一轉の作用に依りて、其働きが頗る違つて來ます。それが即ち聖人、ところが「其狂たる所以の者は」外ではない。「自ら其性の明潔なるを知らず」宛るで自己の自覺を缺いて居る。元來吾々は、初めに言ふた通り、總該萬有心の現はれたる、個人としての眞實心を備へてゐる。其心は元來明潔なるものであるにも拘らず、自己の自覺が足りない故に「利衰毀譽稱譏苦樂の風に漂溺せられ」此利衰毀譽稱譏苦樂といふは、經文にも種々出て居りますが、「大般若經」に、

「菩薩所レ行、於レ利於レ衰、於レ毀於レ譽、於レ稱於レ譏、於レ苦於レ樂、平等不變」

とあり、又「佛地經論」に、

「此八法、世間所愛所憎、而能煽動人心、名之爲風、苟心所有、主安住正法、不爲愛憎之所惑亂、即八風不能動云々」
とあり、又「維摩經」佛國品の偈に、

「毀譽不動如須彌」

ともあります。それに就き往昔宋朝時代の有名な黃山谷が、黔南といふ所に謫居してゐる時に、酒を制し、慾を絶ち、「大藏經」を讀むこと凡そ三年、常に言ふに

「利衰毀譽、稱譏苦樂の八風、四威儀中に於て、未だ曾て相離れず、古の元聖大智と雖も、八風の外に立つあらんや。道を學ぶに非んば知らざるなり」

と恠ういふことを言ふた。利の字は、何ういふものかと言へば、凡そ我れに益するものを名づけて利と爲す。衰は我れに減損するものを名づけて衰と爲す。毀は陰に毀訕せられるを毀といひ。譽は陰に讚美せらるゝを譽といふ。稱は陽に讚美せられ。譏は陽に誹刺せられ。苦は即ち逼迫の義で、惡縁惡境に遇ふて、身心を逼惱するを苦といひ。樂は即ち歡悅の義で、好縁好境に逢ふて、身心を適悅するを樂といふのであります。其處で其狂たる所以のものは、自性の明潔といふことに、自ら氣付かすにゐるが爲めに、利衰毀譽稱譏苦樂、八萬四千の煩惱の風に、朝から晩まで吹き飛ばされ、漂はされて「七情交も相攻め」といふ有様で「未だ始めより窮有らず」遂に疑ひから疑ひに入り、暗きより暗き

に葬られて了ふ。卒に自己本有の光輝を味没す。所謂自己本來の面目を味ましてゐる。「是を以て悟と迷と分れ、聖と狂と別る、之れを爲す如何」それなら如何にするか、狂を轉じて聖と爲し、迷ひを轉じて悟と爲す方法は如何「蓋し悟の時、皆性と爲り、迷の時性却つて情と爲る」これも言葉の通りであります。如何にも明かであります。悟つた時は、喜怒哀懼愛惡欲の情が、其儘一味平等の本性と爲ります。能く水の性を知る者は、千波萬浪、寄せては返す其波の中にあつても、湛然たる水の本性を認めてゐる。迷の時は、性却つて情と爲る。若し亦無明の一念が爰に崩す時は、忽ち水の本性を忘れ、寄せては返へす波の中に漂溺されて了ふ。ではそれを如何にするか、「只須らく、迷情の本源を截斷すべし」で「宗鏡錄」といふ書に、

「無明癡惑、本是法性也。以癡迷故、法性變作無明、如眠來變心有三種々夢」と。

又曰く、

「如人因地而倒、因地而起、正隨迷時、名之爲識。正隨悟時、名之爲智。但隨迷悟立名、若覺始終、如空中求迹、依住所在終不可得也。」

とあり、又「仁王般若經」には、
「菩薩未成佛時、以菩提爲煩惱、菩薩成佛了、以煩惱爲菩提」とあり、又古い道歌に、

澁柿の澁こそよけれ其儘に

變り果てたる柿の甘さよ

とあつて、只須らく迷情の本源を截斷すべきであります。往昔僧ありて、古徳に向ひ、

「如何なるか是れ涅槃の心」

と問ふたら、古徳は答へて、

「直ちに生死の心を盡せ」

と言はれた。すると更に僧は、

「如何なるか是れ生死の心」

と問ふたらば、古徳は、

「涅槃を求むる即ち是れ生死の心なり」

と答へられました。是等は能く味はふべきことであります。又或る古徳の言葉に、

「念起是病、不續是藥」

と、これも適切な教であります。京都妙心寺の關山國師は、餘り語録などは傳はつて居らぬが、毎も

僧が来て、

「私は生死大事の爲めに、それを決着せんとして参りました。切望御垂教下さいまし」

といふと、國師は

「慧玄（國師の諱）が這裡に生死はなす」

そんなことを決着する積りならば、お門が違ふ、サツサと外へ往けと大喝して逐ひ出しました。然う

した辛辣なる手段を以て、學者に接せられた。尙又楠正成が、湊川に於いて、弟と刺し違へる前に

明極楚俊禪師に参じた因縁があります。正成曰く、

「生死交謝の時如何」

と。禪師答へて曰く、

「兩頭俱に截斷して、一劍天に倚りて寒し」

正成曰く、

「畢竟如何」

禪師威を振つて一喝す。其處で「迷情の本根を截斷するは、即ち見性に在り」見性は如何にするかといへば「見性は即ち克念に在り」自分の邪念に打ち勝つといふにある。「然らば即ち克念聖と作るの一語は、即ち吾が門見性成佛の轉語なり」恚ういふ安排に論じて來ると、「書經」に出てゐる克念といふ一語が、即ち吾が見性成佛の轉語、變へ言葉であるけれども、見性といふと、其意味は深刻であるが、克念といへば、未だ根本に觸れてゐないやうで、只其處には多少の優劣があるだけで、併し意味に於

ては變らぬ。「語の異なるを以て之れを怪しむ莫れ。詩に曰く」これは「詩經」の伐柯の篇に出てゐる。「中庸」にも、孔子が此言葉を引用して居られます。

「子曰く、道人に遠からず、人の道を爲して人に遠きは、以て道と爲す可からず」

と。詩に曰く「柯を伐り、柯を伐る。其れ則ち遠からず。柯を採つて以て柯を伐る。尙ほ以て遠しと爲す」柯は枝であります。木の枝を以て、木の枝を伐る。其れ則ち遠からず。或る人が鉞の柄を作らうと思ひ付いた。そして木の枝を伐つて、それを作り鉞の柄にしやうと、慙ういふ意味であります。丁度鉞の柄も木の枝から出来た。今鉞を作らうと伐り落す枝も、矢張り枝だ。どちらも枝であります。一つは既に鉞の柄にして了つた。一つはこれから爲やうといふ、それだけの違ひだが、其柄の手柄は我が已に持つてゐるのである。然るに彼の枝を採つて、そして此柄を作るといふは、未だ其處に迂遠な所がある。例へば自分の目で、自分の目を見やうとして見えないが、其目其儘で其處に見るといふ手柄がある。克念の意味は、斯くの如き言葉の上に照して、其微妙なる所に徹底せよとなり。「噫」は説くには及ばぬ。

一 貫 第四則

孔子曰。參乎。吾道一以貫之。參曰唯。

一者。非數義。凡道之爲體也。甚難言矣。其爲用也。亦不測矣。故強唱曰「一已」。吾大雄以一音演法。伯陽抱一以爲天下式。宣尼亦只以一貫立宗旨。余嘗問學者。一是何物。非四大。非五蘊。歷然現在爾鼻孔裏。若道得諦當。許爾見一貫。未嘗有適吾機者。宋儒釋一唯曰。應之速而無疑之謂。是則是。蹉過了。山野先是蓄疑于此有年矣。三十一歲時。徹見這妙處。始識得曾參腕頭有拔山力。不禁歡喜。不知飲食之味。累日。聖賢之機言。寔一語千金也。後至門人間。輒只答忠恕而已。彼云此云。一放一收。其美不可言。太極芙蓉未央柳。芙蓉如面柳如眉。顏回沒後。得道統正脈者。爲曾參一人。於是可觀矣。

(訓讀) 孔子曰く、參や、吾が道は一以て之れを貫く。參曰く唯。

一とは、數の義に非ず。凡そ道の體たるや、甚だ言ひ難し。其用たるや、亦測られず。故に強いて唱へて一と曰ふのみ。吾が大雄一音を以て法を演ず。伯陽は一を抱いて以て天下の式と爲る。宣尼亦只一貫を以て宗旨を立つ。余嘗て學者に問ふ、一是れ何物ぞ。四大に非ず、五蘊に非ず、歴然として儒が鼻孔裏に現在す。若し道ひ得て諦當ならば、儒に許す一貫を見ることを。未だ嘗て吾が機に適する者有らず。宋儒一唯を釋いて曰く、應ずることの速にして、疑ひ無きの謂なりと。是は即ち是、蹉過了。山野是れより先き疑ひを此に蓄ふる年有り。三十一歳の時、這の妙處を徹見す。始めて曹參の腕頭拔山の力有るを識得す。歡喜に禁へずして、飲食の味ひを知らざること累日、聖賢の機言、寔に一語千金なり。後門人の問ふに至りて、輒ち只忠恕のみと答ふ。彼れと云ひ此れと云ひ、一放一收、其美言ふ可からず。太掖の芙蓉、未央の柳、芙蓉は面の如く、柳は眉の如し。顔回歿して後、道統の正脈を得る者、曾參一人と爲す。是に於て觀る可し。

如何なるか道

此本文は、『論語』の里仁の篇に出てゐるのであります。其全文を擧ぐれば、

「子曰く、參や、吾が道一以て之れを貫く。曾子曰く、唯。子出づ、門人問ふて曰く、何んの謂ぞ

や。曾子曰く、夫子の道は、忠恕のみ」といふのであります。洪川先師は其始めの所を採つて、以て本則とされました。或る時孔子が、

「參や」

と曾參を呼ばれました。孔子の道統を得た者は、曾參一人でありまして、其曾參に對し、名を呼んで「吾が道は一以て之れを貫く」吾が此大道は、只一以て貫ぬいてゐる。それに對して曾參は「唯」と答へた。唯といふ字義は、「曲禮」などに

「父召す時は諾すること無し。先生召せば諾すること無し。唯して起つ」

とありまして、諾といふ時には、明かにハイと返事するのであります。唯といふと、ハイと最も速かに引受けた言葉であります。文意は洵に見易いが、さて其孔子の心を推測すると、却々深遠高妙で大體道といふものは、平素吾々は屢々口にしてゐるが、さて如何なるものが道であるかと考へて見ると、茫たり漠たりで、何を指していふか、捕まへ難いのであります。先づ一二古人の道に對する言葉

を擧げて見ると、
「物あり混成す。天地に先ちて生る。寂たり寥たり、獨立して改めず、周行して殆からず、以て天下の母たる可し。吾れ其名を知らず、之れを字して道といふ、強いて之れが名と爲して大と曰ふ云々」

これも又却々面白い言葉であります。未だ名がありません。物と言ふ、物といひましても、或る一つを物といひ、一つを心といひます。然ういふ相對的のものではない。今此處で言ふ物といふのは或る物といふより仕方がありません。未だ神とも、佛とも、道とも、本當の名が附いて居らぬ、恚ういふ言葉の意味が修養のある人には、自分の頭に自ら概念に現はれて來るでありませう。物あり混成す、一切のものが混成してゐる。天地に先だちて生る、大抵吾々が今見聞覺知してゐるところのものは、天地始まつて以來の現象で、此現象は即ち天地分れて後の現象であるが、此處に所謂物といふのは、然らず、天地に先だちて生ずる。して見ると何ういふものであらうか、人が目を睜つて見やうと思つても、一向音も沙汰もないから、寂たり寥たりひっそりとしてゐる。面白い言葉であります。孔子も或る場合に

『上天の事は、聲もなく、臭もなし』

と言はれたやうな意味で、獨立して改めず、其物は對待的の物でない。嶄然として獨立して居る。凡そ世の中のもの、皆對待的のもので、天あれば地あり、陰あれば陽あり、山あれば川あり、男あれば女あり、皆相對的で對手がある。今物ありと指したのは、獨立的で改まらぬ。昔でも今でも變らず彼處でも此處でも同じこととあります。周行して殆からず、周行は普ねく行はれてと讀んで可い。そんな獨立的のものであるが、其獨立的の物に離れて、別に何か一つあるかといふに、然うでもありません。

せぬ。獨立といふことを佛敎の言葉で換言すると平等的のものであります。平等的のものであるが直ぐ差別の上に行はれてゐるのであります。これは衲が蛇足を添へたのであるが、然う言ふて可からうと思ひます。相對的の物かと言へば、然うでない。獨立して改めない。それでは一切の現象から離れて、獨立的の物かと言へば、然うでない。何事にも行き渡つてゐる、地を這ふてゐる蟻の髻のやうな小さいなものにも、野原に咲いてゐる名もなき小さいな花にも、行き渡つてゐます。小さいな花は小さいな一つの天地を作つてゐます。小なる蟻は、小なる宇宙を含んでゐます。衲は原文に就いては委しいことは知らぬが、英國の詩聖であるテニソンは、

『一輪の花を知れば、天地及び一切萬物を知る』

と言ふてゐます。矢張普ねく行はれて、殆からずといふ意義であらうと思ふ。其物には何ういふ名前があるかといふと、名はありません。名がなければ、人にも示すことができないから、已むことを得ず、字して道といふ。吾々恚ういふ工合に、之れを考へ來るといふと、吾々は矢張り其物の中に宿されて居るといふても可い。又主觀的に考へれば、其物と共に起き、其物と共に寝ね、其物と共に常住活動して居ると言ふても可い。老子はそんな安排に云ふてゐる。又基督教のバイブルの中にも、

『太初に道あり、道は神と共にあり。神は道なり。道は神なり』

とあつたやうに覺えてゐます。それが佛敎とか、若しくは禪とかいふものゝ中に入つて見ると、佛の

一代の説教も、又祖師の千七百則の公案も、畢竟道といふものゝ甚深微妙なることを示されたに外ありませぬ。三祖鑑智禪師の言葉に依ると、

『至道は無難なり。唯簡擇を嫌ふ。但憎愛なければ、洞然として明白なり。毫厘も差あれば、天地懸隔す』

これは唯一つ擧げたのでありますが、恚う意味は至る所にあります。去れば此道を得た人が、釋迦なり、孔子なり、耶蘇なり、マホメツトなりで、其得た所に多少深淺優劣の別はあるか知らぬが、大體に於て其道を得て、始めて釋迦たり、始めて孔子たるのであります。此道は釋迦獨り專にしてゐる譯でもなく、孔子獨り之れを恣にし、私してゐるといふ譯のものではありません。畢竟此道あるが爲めに、天地は此處に成り立つた。此道あるが故に、吾々は生活の眞意義といふものを、此處に現はして居る。それで孔子が、或る時言はれるに、

『參や、吾が道一以て之れを貫く』

と。時に會參は、それに多少の説明を付けるとか、多少の理窟を加へるとか、そんなことは一言半句も言はず、唯と受けた。それが先師洪川老漢の最も稱嘆したところでありませぬ。

大道の作用

これから評註に移りまして「一」とは、數の義に非ず。凡そ道の體たるや、甚だ言ひ難し。其用たるや、亦測られず」一と此處に本文にあるのは、決して數學上の意義ではない。暫く道といふことを、體と用との二つに分ける。體用といふものは、必ず何事にもある。今道體といふものから言ふと、孟子は、

『曰く言ひ難し』

と言ふたが、言ひ難しどころではありませぬ。實に言語文字、想像分別といふやうなそんなことは、悉皆立ち超えてゐるのであるから、如何なる人と雖も、此處に一言を拵むことが能きませぬ。所謂

『止々不須説、我法妙難思』

で、此儘大道は現はれてゐるといふより仕方がありませぬ。俳句の「これはく」とばかり花の芳野山」とか、又は「松島やあゝ松島や松島や」それでも道體には遠ざかつてゐるが、恚う言ふより仕方がありませぬ。然るに其大道の作用といふものに至つては、千變萬化、變現極まりない所のものであるから、却々目の子算用で、推し量ることが能きない。現代の科學とか、サイエンスとか言ふてゐるのは其部分々に就いて、只或る程度までの道理を明らかに往くだけで、其用といふものは、實に無限である。故に強いて唱へて、「一と曰ふのみ」已むを得ず、之れを孔子は一と言はれた。又「吾が大雄」佛のことを大雄と言ふ。釋迦は英雄中の英雄といふやうな意味から、大雄といふので、吾が釋迦は、

「一音を以て法を演ず」これは「維摩經」の言葉に依ると、
 「佛は一音を以て法を演説す。衆生類に従つて各々解することを得」といふことがあるが、恚ういふ時でも、數字の一の字ではありませぬ。此一眞實の旨を以て、そして大法を演べると、恚う佛は言ふて居られます。又「伯陽」といふものは老子であります。老子の別名といふて可い。其伯陽即ち老子は「一を抱いて以て天下の式と爲る」恚ういふことを言ふてゐる。老子の曲則に、

「少なる時は則ち得、多き時は則ち惑ふ。是れを以て聖人は、一を抱いて天下の式と爲る」

とありまして、其處から引用してあります。「宣尼亦只一貫を以て宗旨を立つ」宣尼即ち孔夫子は、本文にある如く一貫を以て宗旨を立てゝゐます。其辭は違つてゐるが、指してゐる所は、外れて居りませぬ。「余嘗て學者に問ふ」余洪川も亦此道を修行する者に尋ねた。「一是れ何物ぞ」孔子も、老子も、釋迦も一と言ふてゐるが、其一とは何か、素より一切萬法は、一元に歸するのであるが、其一とは何か恚ういふことは皆室内の調べごとだ。趙州和尚は、僧の

「萬法一に歸す。一何れの處にか歸す」

の問ひに對して、

「吾れ青州に在りて、一領の布衫を作る。重きこと七斤」

と言はれたが、恚ういふことは、逆も門外漢では窺ひ知することはできません。一是れ何物ぞと、恚う自分に引受けて見る「四大に非ず、五蘊に非ず」四大五蘊といふやうなことは、度々説いて置いたが四大とは地水火風、五蘊とは色受想行識の五つで、畢竟物心の二つであります。四大に非ず（身にも非ず）五蘊に非ず（心にも非ず）身體と言ふても、靈魂と言ふても、皆寄せ集めのもので、之れを指す自性がない。四大に非ず、五蘊に非ず。それなら何もないかと言へば、然うではありませぬ。恰も水中の月の如く、水に映つてゐる月影は、キラ／＼としてゐるが、手を出して之れを捕へやうとしても捕へることができません。又鏡中の花の如く、綺籠に映つてゐるが、手に觸るかといへば、何もない。それと同じで、四大に非ず、五蘊に非ず、何もないかと言へば「歴然として、儂が鼻孔裏に現在す」あり／＼と儂の鼻先にブラ下つてゐる。即ち鼻先にブラ下つてゐると言ふても、足下に踐まへてゐると言ふても同じで、此物と共に朝から晩まで行住坐臥、活潑に働いてゐる。之れは洪川先師が、誰れにでも修行者に對して示されました。「若し道ひ得て諦當ならば」此處を親しく答へることができたならば「儂に許す一貫を見ることを」孔子の一以て、之れを貫くといはれた道の本體を、恰も掌を指すが如く見ることができやう。「未だ嘗て吾が機に適する者有らず」大抵は一種の哲學的理窟を並べることが、科學的の説明を施す位のものであらう。それは藥の效能書のやうなものであります。直覺的に道の根本に徹底する者は一人もない。佛法の中にも、教相學の上で、法理は充分に分つてゐるが、そん

なことでは眞の事實に觸れない。吾々が生命の根元といふか、生活の眞意義といふものを丸出しに出したといふのではない。ところが多くの人は、字面通りの説明をして「宋儒一唯を釋いて曰く」程子朱子などが、孔子の一貫に對して、曾子の答へて唯と言ふたのを解釋して、恚ういふ註釋をしてゐる。「應ずることの速にいて、疑ひ無きの謂なり」と言ふてゐる。字義はそれに違ひないが「是は則ち、是」恚ういふ解釋をしてゐるのは、悪いことはないが、最う一つの一隻眼を備へて見るといふことに爲ると「蹉過了」である。それだけで孔子も肯はれまいし、曾子もそれだけで道統を傳へるといふ、其處までには至らぬであらう。「山野是れより先き疑ひを此に蓄ふる年有り」これは先師洪川老漢の自傳を讀めば分りますが、先師は始め儒に入り、晩年に儒を捨て、禪に入つたので、吾々のやうに幼少の時から、佛門に入つたのとは經歷が違ひます。其修行中に、一とは何かといふ疑ひを抱かれて、頗る苦しまれたが、漸く「三十一歳の時、這の妙處を徹見す」で、三十一歳の時に、此極處を發見し得ることが能きたといふのは、其頃に趙州萬法歸一の則が、先師の手に入りました。其力に依つて類推して、孔子一貫の理を知られたのでありませう。其處に至りて「始めて曾參の腕頭拔山の力有るを識得す」只ハイと返事したゞけであるが、其唯といふ一字の中に、拔山の力がある。往昔漢の高祖と、天下を争ふた楚の項羽の如きは、力山を抜き氣世を蓋ふといふ一大豪傑でありましたが、其山を抜く力が、唯と答へた中に、歴々として備はつてゐるといふことが、始めて痛快に分つた。「歡喜に禁へず

いて、飲食の味を知らざること累日」眞に其一といふものに徹底した時の喜びといふものは、心此處にあらざれば、食へども其味を知らぬといふ言葉があります。それと同じで、人間に最も急切なもの、飲食が一番始まりで、飲まず食はずして、人間は贅澤は言はぬ。飲食があつて、それから種々贅澤を思ひ付くが、飲まず食はずとなつては、種々の慾念は起るものでありませぬ。それ程急切な飲食だが、其飲食の味を知らぬことが累日であつた。「聖賢の機言、寔に一語千金なり」恚ういふ有様で、聖人賢人の機言、機言といふのは、神機一轉した所からいへば、突發した言句であります。唯と答へた只一字だけでも、千金の價があります。「後門人の問ふに至りて、輒ち只忠恕のみと答ふ」最初に里仁の篇の言葉を擧げた通りでありまして、孔子は吾が道一以て之れを貫けりと言はれたのに曾子は唯と答へたゞけであつたから、外の弟子達には、一向分らなかつた。其處で門人が曾子に問ひました。すると曾子が、夫子の道は忠恕のみと答へました。一といふことを、曾子は忠恕とのみ解釋したやうであります。此處は所謂人見て法説けの手段でやられました。此問答往來の有様を、禪門公案の中で、最う一つ類例を擧げて見ると、多少會得が能きやう、或る僧が趙州和尚に、「狗子に還つて佛性ありや、也た無きや」と尋ねたら、趙州和尚は「無」と答へた、これは禪門で有名な難かしい公案で、此「一無字」の公案を、古來幾多の英雄豪傑が、皆血の涙を流して研究をし、立派な人に爲つてゐます。問ふた僧は、始

めから理窟を有つてゐる。佛は一切衆生悉く佛性有りと言はれたのに、何故狗子だけに佛性がござらぬか、無といふ字を虚無又は滅無の意味に誤解した。こんなことでは、逆も禪宗の眞意は分らぬ。此僧は唯當り前の學問的の理窟で言ふた。無といふのは、狗子に佛性が無いと受けたのであらう。其位の僧であつたから、趙州和尚は再び彼れに、

「業識性あるが爲めなり」

と答へた。業識を平たく言ふならば、迷ひの心だ。之れを教相的に解釋すると、餘程の言葉を費さねばならぬが、今は要がない。即ち迷ひの心があるからさと言はれました。恚ういふことは文字、言語の表面からは、到底其眞意は分らぬ。分らぬが其問答往來の様子が、能く似て居る。一以て貫けり。唯と受けたが、それは孔子と曾子の間には通じてゐる。門人には更に分らぬ。分らなかつたから、後に問ふたら、曾子は一といふ字を忠恕のみと答へた。これは又曾參の力であると、洪川先師は之れを頗る面白く見られました。忠恕といふことは、大切であるが、一貫といふことに就いては、忠恕と世間で解してゐる位の意味では未だ盡きない。其處で曾子は、問ふた人相應に忠恕と答へた。「彼れと云ひ此れと云ひ」始めは一貫といふ時には、唯と言ふてゐる。門人が尋ねた時には、忠恕のみと答へた。彼れと云ひ此れと云ひ「一放一收」忠恕のみと答へた所は一放であるし、唯と答へた所は一收である。一方は許し、一方は收めた。放の字は與へるといふ字に變へて可く、收の字は奪ふの字に變へても可

い。一と度は與へ、一と度は奪つてゐる。活したり殺したり、其道を扱ふ自由といふものは「其美言ふ可からず」其手際の洵に綺麗なことは、言葉では言ひ難いが、強いて言ふならば、恚うでもあらうか「太掖の芙蓉未央の柳」支那の宮城の内に、太掖池といふ池があつて、其池の芙蓉即ち蓮の花が清麗に咲いてゐる如く、又未央宮の柳の糸を垂れた如くで、丁度「芙蓉は面の如く、柳は眉の如し」其美しい顔色は、太掖池の芙蓉の花の如く、其清楚なる眉目は、未央宮の柳の如きである。「顔面殺して後」顔回は亞聖と言はれた人だが、夭死であつたから「道統の正脈を得る者、曾參一人と爲す。是に於て觀る可し」道統の正脈を得た者は、曾參一人であるといふが、成程然うであらう。其實際は此一則で見ることができると言はれました。

曾 參 第五則

曾參有疾。召門弟子曰。啓予足。啓予手。詩曰。戰戰兢兢。如臨深淵。如履薄冰。而今而後。吾知免夫。小子。

這翁臨生死代謝之際。警示門人。有此妙密之伎倆。古往今來。縫掖門中見一人矣。諸家以啻免乎毀傷之事。見曾參。可惜未盡曾參在。學者不可不知也。

(訓讀) 曾參疾有り、門弟子を召して曰く、予が足を啓け、予が手を啓け。詩に曰く、戦々兢兢として、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し。今にして而して後、吾れ免るゝを知るかな。小子。この翁生死代謝の際に臨み、門人に警示す。此妙密の伎倆有り、古往今來、縫掖門中一人を見る。諸家皆に毀傷を免るゝの事を以て曾參を見る。惜しむ可し未だ曾參を盡さざること有り、學者知らざる可からざるなり。

臨終の言葉

此則も亦「論語」の泰伯の篇に出てゐまして、字面は洵に易らかであります。「曾參疾有り、門弟子を召して曰く」字義上から言ふと、同じ病でも、此疾の字の書いてある時には、最も大患で、迎も再び起たれないと自覺せられた。そして平素教へてゐる門弟子を召して言はれた。大抵の人の死に際には、其人の人格が赤裸々に現はれるもので、平生種々のもので飾り立てゝゐたのでも、其金箔が總て剥けて了つて、其人の性格のありの儘が現はれる。勿論病に依つては、種々現象が違ふであらうが、普通天壽を終へて死ぬ時には、其人の一生の性行を卜することが能きます。だから同じ「論語」に、

「鳥の將に死なんとする其鳴くや哀し、人の將に死なんとする其言や善し」

といふやうな言葉があります。曾子も其臨終の際に、門弟子を召して「予が足を啓け、予が手を啓け」と言はれました。先づ世間並であるならば、子孫の爲めとか、財産分配のこととか種々あらうが、曾子の臨終には、そんなことが少しもない。吾邦にでも俳人芭蕉の臨終を見ると、其臨終の時、門人どもが、

「凡そ勝れた人には、誰れでも辭世があるから、此際是非辭世の句を願ひたい」といふと、芭蕉は色を嚴にして、

「今日まで吾れ幾十年の間、吐き出した幾多の句は、何れも辭世ならざるはなし。今に及んで何んぞ辭世の句を要せんや。」

と言ふた。曾子の臨終と、少しく趣きを異にしてゐますが、人と爲りの手段は、東西同風であります。曾子は予が足を啓け、予が手を啓けと言ふただけで、門人共お前達は、篤と吾が身體を調べてくれよと言ふて置いて、そして『詩經』の小旻の章に出てゐる「戦々競々」として、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し』を引用した。戦々といふのは、恐懼の貌、競々といふのは戒慎の貌であります。吾が此身體を父母に受けてより、今日に至るまで、日夜戦々競々として之れを保持し、恰も深き淵に臨む如き心地、或は薄き氷を履むやうな心地して、先づ今日まで、幸に大過なく來た。『今にして而して後、吾れ免るゝを知るかな。小子』大恩ある兩親から預つた大切な此身體に、聊かの傷も付けず、大なる過もなくして、今日只今之れをお返へしすることが能きたぞよ。皆の者も喜んでくれと、寔に親切の籠つた所の臨終の遺言であります。それを洪川先師が評されたのでありますが、大抵此章に就いて、儒者達の註釋を見ると、

『父母全くして之れを生み、子全くして之れを歸へす』

恚ういふ風に言ふてゐます。吾が身體髮膚は、皆父母から受けたもので、兎の毛一本でも吾が物でない。父母が全くして生んでくれたのを、其子たるものが、それを全ふして、何一つ傷けずして歸へす

といふのは、頗る結構なことだ。

『曾子終りに臨んで、手足を啓くは是れが爲めの故なり』

恚う註釋が多い。予が足を啓け、予が手を啓けは、畢竟傷けずして、今日只今お返へしするといふこととであります。これは無論悪い註釋ではないけれども、併し先師洪川老漢の見る所は、其處に止まらぬ。其説くところを言ふと、

『凡そ孝を爲し、忠を爲す、形を以てせずして、心を以てするなり。縦令面上に大癩(大きな疵痕)あるも、衷心に忠誠ある時は、忠孝の人たるを失はず。肌膚玉の如く、一點の癩なしと雖も、心中正しからず、道情を打失せば、此れは是れ人にして人にあらず。正受老人言へることあり。曰く設令七尺の身材あつて、身子滿慈の辨智を巧みにするも、正念工夫相續なきものは、之れを臭爛膨壞の死人と名づく。今若し曾子、我が身體只癩なきのみを以て、自ら身を全ふして、父母に還へすと言はゞ、則ち是れ婦人小子の孝のみ。君子大人の見にあらず。未だ嘗て孔門上足の翁と爲すに足らず。曾子最後の作用、吾知免夫、小子の一句を言及す。誠に甚深の意味あり。大いに須らく子細にすべし』(原文漢文)

此説の如く、國家一旦緩急あるといふやうな場合には、死を見ること鴻毛の如く、假令身體に如何程の傷を負ふと雖も、決して避くる所でない。殊に吾々大和民族は、此精神が凜々として居らねばなら

ぬ。今假りに孔子、孟子が、支那四百餘州約四億の人民を率ゐて、無名の軍を起し、吾邦に來寇したとせば、吾等は坊主頭に鉢巻してども、眞先に進んで、彼れ孔孟の素首を引き抜かねばならぬ。之れが爲め身體髮膚を毀傷する位のことには、覺悟の前でなければなりません。洪川和尚又曰く

「戦々の二句は大道を保重するの切意なり。含蓄甚深味ふべし。蓋し不睹不聞は大道の本體なり、睹ざる所の無形、聞かざる所の無聲に於て、之れを戒慎して始めて大道を保重するの實行と謂ふべし。是れ會子詩經の明言を引證するの微意なり。學者勤めて審細にすべし。詩の小雅小旻の卒重に曰く、敢て暴虎せず、敢て憑河せず、人其一を知つて、其他を知ることなし。戦々兢々として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し。」

と。其集註に、

「衆人の慮りは遠きに及ぶ能はず、暴虎憑河の患ひは近くして見易し、則ち之れを避くることを知る。喪國亡家の禍は、無形に隠るゝ時は、以て憂となすを知らざるなり。故に戦々兢々として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し、其禍の及ぶことを懼るゝなり。」

我が爲めに田を開け

「この翁、生死代謝の際に臨み、門人に警示す」生死代謝の際といふのは、却々容易ならぬ場合で、平常無事の時は違ふ、其一生の總勘定の秋に臨んで「此妙密の技倆有り」水も洩さぬ深き所の考へがある。「古往今來、縫掖門中一人を見る」縫掖は、辭書で調べて見ると、大衣なりとあります。畢竟儒者の著る衣服のことです。古も今も、儒者達の中で、斯くの如き人は、實に只會子一人である。「諸家言に毀傷を免るゝの事を以て會參を見る」然るに大抵の後世の儒者達は、之れを毀傷せずして、返へすといふことにのみ重きを置いてゐる。勿論其註釋も悪るゝことはないが、それは只一通りの見方である。我れ洪川の見方では、それだけでは満足が能きぬ。「惜しむ可し未だ會參を盡さざること有り」それだけでは道統を受け得たといふ會參の奥の院まで見届けたといふことは能きぬ。「學者知らざる可からざるなり」苟も道を知る所の者は、此處まで考へて貰はなければならぬといふ工合に評されました。之れを禪門に例を取ると、幾つもあるが、其一つを挙げると、往昔百丈の惟政禪師といふは、法を慈明和尚に嗣がれた人で、其惟政禪師が、一日大衆に向つて言はるゝには、

「汝等我が爲めに田を開けよ。我れ汝等の爲めに大義を説かん」

と。恠ういふ垂示といふものは、吾々修行者に取つては、頗る有難い。大衆を捕へて、お前達柄の爲めに開墾をしてくれ、此百丈山は、大きな山であつて、未だ開けて居らぬが、切望皆力を合せて、荊を截り、莽を闢いて、此荒れ山を立派な田地にしてくれ、若しそれが立派に出來上つた曉には、我

れ汝等の爲めに大義を説かん。其骨折つた賞勞として、お前達に佛法の最も有難い悟りを説いて聞かせてやらうといふので、其處で一同が力を協せて、荒れた土地を開き、さあ田地が出来ましたから、これから大義を御示し下さいと言ふたら、其時百丈和尚は何ういふことを言はれたか、何にか難かしい佛教哲學の道理でも説くか、或は悟りを開いた有難い話でもあるかと思ふと、豈に圖らん禪師はそれと言つて、両手を展開した。嗚呼手に珊瑚の鞭を取つて、驪龍領下の玉を打ち砕いたやうに見事であります。それから最う一つ日本の例を挙げると、甲州鹽山の向嶽寺の開山拔隊和尚が、正徳四年二月二十日巳の刻に遷化される時に、端坐して門人達に言はれるには、

『端的看よ。是れ什麼ぞ。與麼に看よ。必ず相錯らず』

恚う高聲に唱へて、燈火の滅する如くに逝かれた。昔から苟も法燈を相續した人々の末期は、皆立派なことが書いてあるが、洪川先師は恚ういふ禪の立場から、此章を解釋された。併し儒者に言はせれば、そんなことは蛇足であると斥けるであらう。今一つ挙げるが、往昔宋の徑山の有名な大慧和尚が會子と顔回のことを、四言の偈にせられたことがあります。

五、逆、聞、雷、會、參、顔、回
一、粒、虹、子、爆、出、冷、灰

これも禪録を見ないと分らぬが、五逆罪といふのは、大罪悪で、例へば親を殺したとか、或は師匠を

殺したとかを、五通り數へて五逆罪といふが、然ういふ悪人が、雷鳴を聞くと、自己の良心が咎めて殆んど自分の腸が引き裂けるやうだといふことがある。其處から來た文字で、これは臨濟禪の惡辣な手段で、迷人の膽玉を奪ふことを形容したので、一粒の虹子冷灰より爆出すといふのは、冷たい灰の中から、不圖黑豆が爆出したといふ勢ひで、此處に味はふべき宗旨があります。恚様に禪的に解釋すると、儒者達の解釋以外に更に更に趣味があるのだといふのであります。

慎獨第六則

中庸曰。道也者。不可須臾離也。可離非道。是故君子戒慎乎其所不睹。恐懼乎其所不聞。莫見乎隱。莫顯乎微。故君子慎其獨也。

孔門三千徒。才明雋藝者。七十有二人。一陽之所驅。一雨之所霑。各自有所得。唯得大道之正統者。顏曾二人耳。顏回蚤世。故曾參獨得其宗。及孔伋受業於曾參。體究此一著。實學功夫。用力有年矣。竟通徹孔門立旨。始唱出這語。此時去孔子稍遠。乃憂其愈久愈失其宗。遂著中庸。以授後學。其要在此數言。數言之眼目。在慎獨二字。蓋古人憐後學難入。諄諄如是。後世儒士。務徒辨釋聖賢語。未嘗務明覈聖賢心。故孔門傳授之心法。墮如土。可痛可悲。學者苟欲爲孔子徒。先須依此語。強著精彩。反己觀照矣。觀照來觀照去。積歲月之久。念念不退。則忽然契當妙

訣也。那時不覺不知拍掌大笑去在。於是平日山野所謂不立之玄。不妙之妙者。果有自得焉。蓋於開入德要門。此外無更可撥轉者。

(訓讀) 中庸に曰く、道は須臾も離る可からざるなり。離る可きは道に非ず。是故に君子は其睹ざる所を戒慎し。其聞かざる所を恐懼す。隠れたるよりも見はれたるは莫く、微かなるよりも顯らかなるは莫し。故に君子は其獨りを慎むなり。

孔門三千の徒、才明雋藝の者、七十有二人、一陽の驅むる所、一雨の霑す所、各自得る所有り。唯大道の正統を得たる者は、顏曾二人のみ。顏回蚤世す。故に曾參獨り其宗を得。孔伋業を曾參に受くるに及んで、此一著を體究す。實學功夫、力を用ふる年有り。竟に孔門の玄智に通徹し、始めて這の語を唱出す。此時は孔子を去る稍遠く、乃ち其愈々久しくして、愈其宗を失ふを憂ひて、遂に中庸を著して、以後學に授く、其要は此數言に在り。數言の眼目、慎獨の二字に在り。蓋し古人後學の入り難きを憐んで、諄々として是くの如し。後世の儒士、徒に聖賢の語を辨釋するに務めて、未だ嘗て聖賢の心を明覈するを務めず。故に孔門傳授の心法は、墮して土の如し、痛む可く悲しむ可し。學者苟も孔子の徒たらんと欲せば、先づ須らく此語に依りて、強いて精彩を著け、己れに反つて觀照すべし。觀照し來り觀照し去りて、歲月の久しきを積み、念々退かざれば、則ち

忽然として妙訣に契當せん。那時覺えず知らず、掌を拍ちて大笑し去る在らん。是に於て、平日山野所謂不玄の玄、不妙の妙、果して自得有らん。蓋し入徳の要門を開くに於て、此外更に撥轉す可き者無し。

中庸の眼目

此第六則は「中庸」にある所の言葉で、「中庸」一篇の眼目ともいふべきであります。これから後に十章程あるが、それは畢竟此章を敷衍したといふても可い位のもので、文字は例に依つて平易で「道は須臾も離る可からざるなり。離る可きは道に非ず」此本文の説明に先立ちて、先師洪川老漢が書き遺されたものを披露しますが、それは漢文で書いてあります。それを和訓として示しますと、

「中庸は性を盡すの書なり。首めに道といふは、性の名を表はすのみ、睹ざる聞かざる、是れ道の本體なり。戒愼恐懼は是れ道體を受用するの工夫なり。故に學者、時々刻々、常に其睹ざる所を睹て戒愼し、常に其聞かざる所を聞いて恐懼す。即ち工夫將に此實落の處あらん。各成熟の後即ち力を盡すことを須むずして、自ら獨りを愼むの妙處を知らむ。豈に外にあるの聞見を以て果と爲さんや。是れを以て、未だ獨りを見ざる時は、則ち正に愼んで、獨りを見るを以て事と爲すべし。既に獨りを見る時は、獨りを愼むを以て事と爲すべし。故に貌言視聽必ず是に於てし、接物應事必ず

是に於てし、貧賤富貴必ず是に於てし、死生壽夭必ず是に於てし、毀譽得喪必ず是に於てし、造次も必ず是に於てし、顛沛も必ず是に於てす。故に曰く、入るとして自得せざることをなし」

恚ういふ鹽梅であります。これは思ふに洪川先師が、最も精密に工夫せられた結果であります。大體道といふものは、大抵な人が、己れを離れて、外に在るもの、如く思ふのが常であります。それ故に手近い所にあることを知らず、遠方に之れを求めやうといふのが、吾等の常であるけれども、道は須臾も離る可からずといふ、丁度吾々が月夜に、人が二人あるとして、一人が西に行き、他の一人が東に行くやうなもので、自分が東に向つて行くと、月影は恰も東に行く人に付き隨ふやうに見える。又西に行く人があると、其月影も又西に走るやうに見える。それ位道は親しくして、吾々に暫くも離れないものであります。何故といふと、畢竟吾々の道といふものは、吾々自身が人々具足し、皎々圓照で、圓に成就して居るものであります。先師の立論の通り、心の變名が畢竟道であります。道といふものは、則ち我が對してゐる所のもの、道は須臾も離るべからざるものであります。若しそれが暫くでも、我れを離れてゐるといふ道ならば、決して眞の道ではありません。併しながら恚ういふことは自分の身に體し、心に存して、幾度か之れを玩味して始めて其道に副ふことが能きやうと思ふのであります。故に餘り恚ういふ所には、煩鎖なる理窟を言はぬ方が可い。「是故に君子は其睹ざる所を戒愼し、其聞かざる所を恐懼す」見ず、聞かず、これを道の本體といふ。未だ吾々が眼を一つ明けざる所

耳を一つ欬てざる所、それが即ち大道の本體、其儘なのであります。それから後に今の戒め慎みといひ、恐れ懼るゝといふのは、其大道の本體を日用に修養する所の工夫を述べたのであります。それに照して此文面を眺めて見たならば、餘程親しいものが其處に現はれて来る。苟くも君子たる所の者は其未だ見ぬ所に於て戒め慎み、未だ其聞かぬ所に於て、恐れ懼るゝと恚うあります。古語にも

「君子は晴天に對して懼る」

といふことがあります。俗に謂ふ日本晴の好い天氣の時に恐れる、其代りに

「雷霆を聞いて驚かず」

で、大雷が爰に鳴り始めたといふても、敢て驚かない。

「平地を渡つて恐れ、風波を涉つて疑はず」

といふ。平々坦々たる大道を歩行きながら、常に恐れ慎んでゐるが、併し如何に大なる波が起り、烈しい風が起つても、かくも疑はないと、恚ういふやうな言葉もあります。それは即ち此意味であらうと思ふ。其踏ざる所に於て戒慎し、其聞かざる所に於て恐懼す、言葉は至つて平易、解釋するまでもない程であるが、之れを實行することは容易でありませぬ。それが即ち修養の最も大切な所でありませう。或る書物に書いてあるのだが、それは餘程飾りを付けて書いてありますが、其要領だけを擧げると、

「盗人が二三人連れだつて、田舎の資産家を襲ふた。ところが其盗人の一人が、戸の節穴から屋内を覗いて見ると、二十歳位の若い女が、獨り圍爐裏の傍に、行儀正しく坐つて、粥を煮てゐるらしい。聽て粥が煮えたか煮えぬかを試めす爲めに、靜かに鍋の蓋を取つて、そして綺麗な箸で鍋の中の粥の粒を、少し蓋の上に載せて、そして指先で潰して見た。其處には誰れもゐなかつたが、其様子が如何にも肅しやかで、綿密で其落ち着いた體度は、四邊に誰れもゐないといふ様子が毫もなかつた。盜賊は唯それだけを見て、悪い心の者ではあつたけれども、大變感服して、遂に其家を襲はなかつた」と。

これは何んでもない話のやうであるが、決して然うではない。餘程味のある話であらうと思ふ。彼の「詩經」にも確にあつたと記述するが、

「汝が室に在るを見れば、希はくば屋漏に耻ぢざらん」

と。屋漏でありますから、誰れも人は居らぬ。唯一人ゐる時でも、自ら心に疚ましき所、耻づる所がないといふ。唯道を得たといふのと、得ぬといふのと、唯それだけが境目であります。其踏ざる所を戒慎し、其聞かざる所を恐懼すといふことを、一層精しく言ふと「隠れたるよりも見はれたるは莫く微かなるよりも顯らかなるは莫し。故に君子は其獨りを慎むなり」といふことに爲ります。之れに就いては、洪川先師は大層高尚に解釋を施して居られます。併しそれを幾らか和けて見ると、獨りとい

ふことは、唯獨り室に居ると解するのが常であるが、畢竟我が心といふものは、所謂獨立のものであつて、是ればかり縦令親子の間と雖も、夫婦の間と雖も、決して他からは之を窺ひ知ることができない。獨りは言ひ換へれば自分の心、自分の心は自分獨り知つてゐる。然ういふ工合に、獨りといふことを、自分の物にして見たならば、親しいであらうと思ふ。それが隠れたるよりも見はれたるは莫し微かなるよりも顯らかなるは莫しで、我が心といふものは、實に隠してゐるのではない。けれども自ら隠れてゐる。何故ならば、外觀からは指一本差すことはできぬ筈のもの、人目からは決して窺ふことはできぬ。世の中の法律のやうなものが、細かく爲つて見ても、規則が如何に緻密に爲つても、どれ程形の上に於て、其制度が精しく爲つても、決して我が心を束縛するとか、我が心を窺ふといふことはできぬ。それは決して政治とか、法律とか、其他のものに於ては、決して動かすことはできぬ。宗教といふことに爲ると、其處へ入つて往く、畢竟我が心といふものは、自ら隠れてゐるけれども、其隠れてゐるのが、實は眼に一杯物を見、耳に一杯聲を聞くが如く、あり／＼と目前に現はれてゐる。隠れてゐるといふと、此姿を離れてゐるかと思ふけれども、然うではない。隠れたる其儘が、實に明々地の儘である。隠れたるよりも見はれたるは莫く、微かなるよりも顯かなるは莫し、我が心の有様といふものは、實に微妙である。實に微かなものである。肉眼を以て窺ふことのできぬものである。けれども其微かなるそれが、實に是位現はれてゐる所のものはないのである。

飛彈の國で、槍の版木板を作る者が、或る日山中に入つて、其用材を採らうと思ふてゐると、杉の大木の後ろに、山伏の姿をしたものが立つてゐるので、これが世にいふ天狗であらうと思ふて見てゐると、其山伏のやうなものが、聲を荒らげて、

「其方は俺れを見て、怪しい天狗だと思ふてゐるな」

と言ふた。それから版木職人が、これは何うも怪しい。愚圖々々してはゐられぬ。早く自宅へ歸らうと思ふたところ、又其山伏姿のものが、

「其方は俺れを怪しいものと見て、早く自宅へ歸らうと思ふてゐるな」

と言ふて、此方で心に思ふ通りであることをいふ、それで氣味は悪るいし、早く歸へらうと、版木板を繩で括らうとする機會に、繩が切れて、一枚の版木板が、山伏の鼻先に當つたと思ふてゐると、山伏が

「其方は一向氣の知れぬ奴ぢやわい」

と言ふたかと思ふと、其山伏の姿は掻き消す如くに消え失せて了つた。

恚ういふ話があるが、却々面白い。始めは心で然う思ふた。其ことが直ぐ自分の形の影法師の如くに向ふに現はれたところが、面白いことには、版木板を結ばうとした繩が切れて、彼れの鼻先に版木板が當つた。其時に版木職人の心には、一向何にもなかつた。故意に版木板を以て、向ふを打たうとも

傷けやうとも思はなかつた。不圖した機會であつた。當つた時には、我が心を見ることができなかつた。山伏の心を見ることもできない。見ることができぬ筈だ。何も考へて居らぬ。實は心が隠れてゐるのが常であるが、それよりあらはなことはない。其譬へ難き微細な心程愈々明かなことはないといふことは、日常公私の間に於て、屢々何かのことに就いて出會ふてゐることがあらうと思ふ。前方のことを首を回らして見ると、思ひ當ることがあらうと思ふ。故に君子は、其獨りを慎むといふ、唯人に對して慎む譯ではない。一つの何か掟に對して慎む譯でもない。自分自身の心を失はぬといふこととで言ひ換ゆれば、其獨りを慎むといふことである。恚ういふことは修養次第で何んとも爲ります。尙又洪川先師が例を引いて居られるが、これは今のやうな卑近な例とは、立ち上つた話であります。「往昔唐朝の時代、宰相の杜鴻漸といふ人が、或る時白崖山の無住禪師を、自分の官邸に招待して、そして法を聽いた。其時丁度庭の樹木に、鴉が止つてゐてカアと鳴いた。すると杜鴻漸が言ふやう、

「貴僧は鴉の鳴いた聲を御聽きなされたか」

「聞きました」

と無住禪師が答へると、杜鴻漸が言ふには、

「聞いたと言はれるが、鳴いた鴉は、最早何處かへ飛び去つた。カアといふだけで、最早何も

ない。それに何故聞いたと言はれる」

すると無住禪師は、傍に居並ぶ大臣侍臣を顧みて言ふには

「正法聞き難し、各々宜しく諦聽すべし。聞と不聞と聞性に關はらず、本來不生、今亦不滅、有聲の時是れ聲塵自ら生ず。無聲の時是れ聲塵自ら滅す。而して此聞性、聲に隨つて生ぜず、聲に隨つて滅せず、此聞性を悟る時は、聲塵の流轉を免れん。乃至香味觸も亦復是くの如し、將に知るべし、聞に生滅なく、聞に去來なきことを正法聞き難し。各々宜しく諦聽すべし」

これは讀んで文字の通り、明かに聞くべしといふて置いて「聞と不聞と、聞性に關はるにあらず」といふ。鴉の聲なら、聲を聞いたと聞かざるとは、聞かざるといふ心には與るのではない。唯これだけの言葉では、鳥渡分らぬが、聞性の性の字は、毎でも佛教では、不偏不黨の心の本體に名づけられてゐる。聞性といふ、今此處で聞いた音がした時と、音のせぬ時とは、一向見ない。畢竟聞かざるといふ心の本體には、一向音がしても、音がせぬでも、其本性といふものに於て、少しも相關することではない。何故といふならば、本來不生、今亦不滅、聞性といふ聞く心、心の根本といふものは、本來生れたといふ心ではない。何時其聞くといふ心が生れ出たといふことがないから、今まで無くなるといふことはない。恚ういふことは、大いに味はふべきで、本來不生、今亦不滅、有聲之時是聲塵自生、色、聲、香、味、觸、法、之れを六塵といふ。皆是れ佛教の實語であります。動ともすると此六塵が、心を穢



す所のものであるから、これに塵といふ名が付けてあります。「聲あるの時は、之れ聲塵自ら生ず」といふ。唯聲といふ外界の一つの響きが生じただけで「聲無きの時、之れ聲塵自ら滅す」鴉が飛んで行つた跡に、聲が無いといふのは、一時的の影が消えただけ、而して今の聞くといふ聞性は、耳に従つても滅せず、音のする時と、音のせぬ時とに、些とも變りはない。此聞性を悟る時は、今聞くといふ此本性を悟つた時に於ては、聲塵の流轉を免れ得るであらう。一時的の響きに、我が心に流轉せらるゝといふことを免るゝであらう。これは唯聲といふことに就いて言ふたのであるが「乃至香味觸も亦復此くの如し」聞くといふ心に、生と滅とはない。聲がしたとせぬとは相關しない。聞くといふ本性には、去ることも來たることもない。恚ういふことは餘程味はふべしだ。恚く無住禪師が説法されたに就いて、宰相の杜鴻漸が、

「屬僚と共に喜躍して善しと稱す」

とあつて、喜び悟つて宜しと稱したのであります。然ういふことに於ても、隠れたるよりも見はるゝは莫し、微かなるよりも顯かなるは莫しといふことが、大いに味はへるであらうと思ふ。畢竟隠れたると、微かなるといふと、今云ふた聞くといふ本性、見るといふ本性、味はふといふ本性、其不生不滅、不去不來の本性を指した。恚う一つ明かに照して見たらば、最も親しいであらうと思ふ。故に君子たるべき者は、其獨り慎むのである。

唯會參一人のみ

これから評論でありまして「孔門三千の徒」一と口に孔子の門下生は三千といひます。其中で「才明雋藝の者、七十有二人」其七十二人の中に「一陽の暈むる所、一雨の霑す所、各自得る所有り」各一藝一能得る所がある。「唯大道の正統を得たる者は、顔會二人のみ。顔回蚤世す、故に會參獨り其宗を得、孔伋業を會參に受くるに及んで、此一著を體究す」唯其大道の正位を得たものは、顔回と會子の二人のみであつた。ところが其一人の顔回が、早くも死んで了つた。故に會子が獨り其宗を得た。孔子の道を傳へたものは、唯會參ばかりである。孔子の子の伯魚といふ人、其人の子が孔伋で、字は子思といふた有名な人でありませう。其孔伋は誰れに道を學んだかといふと、業を會參に受けた。そして此一著といふのは、即ち獨りを慎むといふ本文を指しても可い。「實學功夫、力を用ふる年有り、竟に孔門の玄智に通徹し、始めて這の語を唱出す」恚ういふ所は讀んだ儘で可い。「此時は孔子を去る稍遠く」で、最う孔伋の時代に爲つては、大分年代が經つてゐる。「其愈久しくして、愈其宗を失ふを憂ひて、遂に中庸を著して、以て後學に授く」即ち孔子の宗旨を失ふであらうと心配して、「中庸」といふものを著して、そして後學に授けた。其「中庸」の中でも「其要は此數言に在り。此數言の眼目」は何處にあるかと言ふならば、即ち「慎獨の二字に在り。蓋し古人後學の入り難きを憐んで、諄々と

いて是くの如し」諄々と叮嚀に教へた。然るに「後世の儒士、徒に聖賢の語を辨釋するに務めて」儒學といふことは、殆んど一の文章學位に爲つて了つた。「未だ嘗て聖賢の心を明瞭するを務めず。故に孔門傳授の心法は、墮して土の如し。痛む可し悲しむ可し。學者苟も孔子の徒たらんと欲せば」我れこそ儒教の徒であると言はんとするならば「先づ須らく此語に依りて、強いて精彩を著け」たらば可からう。「己れに反つて觀照すべし」で、兎に角外に向はずに、内に向つて「觀照し來り觀照し去りて」そして「歲月の久しきを積み、念々退かざれば、則ち忽然として妙訣に契當せん」之れを禪宗の最も本領としてゐる。是に至りて「覺えず知らず、掌を拍ちて大笑し去る在らん」此快き一笑を發する時節が到來するであらう。「是に於て平日山野所謂不玄の玄、不妙の妙」玄らしい玄は、眞の玄ではない。妙らしい妙は、妙の妙ではない。禪宗の禪宗臭きは、眞の禪ではない。悟りの悟り臭きは、眞の悟りではない。昔の種々の悟りがある通り、不玄の玄、不妙の妙といふものは「果して自得有らん」之れを自分が常に學者に向つて提唱してゐる。「蓋し入徳の要門を開くに於て、此外更に撥轉す可き者無し」孔伋の如何なる人であつたかといふことは、一例を擧げて分りますが、「説苑」といふ書にあるには、孔伋が衛といふ所にゐる頃は、襜褕表なしといふて、畢竟表のない衣服を着てゐた。二旬にして九食すといふて、一口に言ふならば、二十日間に二遍程しか食ふことが能き程貧であつた。其時に田子方が、それを聞いたから、人をして狐の皮衣を贈らしめた。そして其使ひの者に、彼

の孔伋は堅い人であるから、多分受けぬであらうから、恠ういふことを言へと口傳へをさせました。

「我れ人に假せば、遂に之れを忘る。吾れ人に與ふれば、之れを捨つるが如し」

我れは人に品物を貸しても忘れて了ふ。何物を人に與へても捨てたやうに思ふ。それであるから狐の皮衣をお前さんに贈つても、何んとも思はぬと。すると果して孔伋即ち子思は、辭退して受けませんでした。其時田子方が言ふには、

「我れは有り、子は無し、何が故に受けざる」

お前は衣服が一枚もないのに、何故に受けないか。それ程窮してゐるならば、受けたら可からうと。すると子思が言ふには、

「假之れを聞く、妄りに與ふるは、物を溝壑に遺棄するに如かず」

却々昔の人は、今の世の中に照し合はせると、深い感じを惹きます。現代では贈賄とか、收賄とかいふ賤しい下劣なことが、盛んに行はれてゐますが、孔伋は恠ういふことを言ひました。妄りに與ふるのは、物を谷底に捨てるに如かず。滅茶苦茶に人に物を與るのは、未だしも谷底へ物を捨てるが可いと。

「假貧なりと雖も、身を以て溝壑と爲すに忍びず」

我れ孔伋は、如何に窮し、且つ貧なりと雖も、此貴き身體を、谷底同様にすることは能きぬ。お前さ

んは物を捨てるといふが、我れの身體を谷底にせよといふのか、無禮千萬なといふやうな言葉が仄の
見えてゐます。爰を以て受けずといふて、遂に受取ませんでした。此一節だけでも、孔伋の人と爲り
が窺ひ知らるゝであります。

浩然 第七則

孟軻曰。我善養吾浩然之氣。其爲氣也。至大至剛。以直養而無害。則塞乎天地之間。

凡天下儒流。讀孟軻浩然章。愬乎過者。非眞儒人矣。山野疇昔逢此章。而根求道之志。故後來常歎云。當大教未東來以前。有此卓見。孟軻可謂生而知之者。試問學者。正文二十九字。但一字有用。生知之全力處。作麼生。那一字。

(訓讀) 孟軻曰く、我れ善く吾が浩然の氣を養ふ。其氣たるや、至大至剛にして、直を以て養ふて害ふ無ければ、則ち天地の間に塞がる。

凡そ天下の儒流、孟軻の浩然の章を読み、愬乎として過ぐる者は、眞の儒人に非ず。山野疇昔此章に逢ふて、道を求むるの志を根す。故に後來常に歎じて云く、大教未だ東來せざる以前に當りて、此卓見有り。孟軻は謂つ可し、生れながらにして之れを知る者なり。試みに學者に問はんに、

正文二十九字、但だ一字生知の全力を用ゆる處有り、作廢生か那の一字。

孟子の時代

此「浩然」の第七則は、「孟子」七篇中に於ける有名な一章でありまして、それを取つて以て、此三十則の一則としたのであります。孟子が斯くの如きことを述べた其時代といふものも、眺めて見ればなりませぬ。矢張孟子の背景には、其時代の種々の事情があります。それは孟子の傳を見れば、能く分ります。其一端を挙げれば、其頃は聖を距る稍遠しといふやうな有様で、孔子が歿せられて、餘程遠く爲つてゐる。それで孟子は、業を子思の門人に受けました。孔子の道統は、孔子から曾子、それから孔伋即ち子思、其子思の門人に業を受けました。ところで一方には、既に六國といふやうなものがあつて、秦に對し、所謂春秋戰國の時代に爲つてゐます。秦の側に於ては、有名な商鞅といふやうな人があつて、それからそれへ對する楚の國、魏の國では、吳起といふやうな人を用ゐてゐます。又齊の國に於ては、孫子であるとか、田忌であるとかいふやうな有名の人々を用ゐてゐます。それから又彼の有名な蘇秦、張秦といふやうなものがあつて、蘇秦は合縱を以て、六國を合せて秦に向はうといふやうな有様、それから秦の方に於ては、張儀を用ゐました。此張儀は即ち連衡といふ策を以て六國を併呑せんといふのであります。畢竟一方には秦の國があり、それに對する六國があり、所謂合

縱連衡を以て、互に天下を争はうといふ然うした時代でありました。故に天下は攻伐を以て、賢なりとするといふ有様で、只自分の領土を擴めるとか、他の領土を侵略するとか、然ういふ謀をする者を、賢なりとした時代でありました。であるから獨り孟子が、仁だとか、義だとか説いて廻はつてもそれを時の人は迂遠なりとして、相手にするものはありませんでした。大道は廢れて土の如し、昔から堯舜禹湯文武周公孔子と傳へて來た大道といふものは、土の如く、人の足に蹂躪されて了つてゐる有様で、其中で孟子は、獨り道を唱へてゐたといふのは、皮相上から見ると、甚だ迂遠と言はねばならぬ。併し今日から之れを見ると、其時代にあつて道を唱へたといふのは、孟子の一つの卓見であります。彼の維新當時、福澤諭吉翁は芝の新錢座に塾を開いてゐたが、上野の戰爭で、ドン／＼鐵砲の音がするの、何やらの經濟書を講じて居つたといふこともある。吾々は自分の職分に向つて、忠實業に服するのが、矢張一つの戰闘であります。昔から勝れた人のやり方は同じであります。先づ然うした時代に於て、孟子は彼の通りの仕事を爲しました。それが貽つて今日は「孟子」といふ書物に爲つてゐますが、其「孟子」の七篇の中でも、此浩然の章は、最も有名であります。此浩然の氣を唱へる以前に、例の告子との問答往來があります。それは心を動かすも、若しくは心を動かさないかといふ問答で、告子は斯くの如くにして心を動かす、孟子は斯くの如くにして心を動かさずといふやうな議論があります。其處で孟子が、

「志は氣の帥なり。氣は體の充なり」

と言ふた。然ういふ所から、次第に論究した所が、孟子は遂に浩然の氣といふことを言ふた。「我れ善く吾が浩然の氣を養ふ」と恂う言ふたのであります。然らば何をか浩然の氣といふと言ふたらば、孟子は「曰く言ひ難し」恂ういふ言葉が挟まれてゐる。それから「其氣たるや、至大至剛にして、直を以て養ふて害ふ無ければ、則ち天地の間に塞がる」此處に出してある本文は、矢張意味だけは十分現はれてゐるけれども、「孟子」に書いてある所から見ると、言葉が少し省略してある。孟子の説では「志といふのが、丁度軍隊で言ふならば、將帥のやうなもので、氣といふものは、それに従屬してゐる所の兵卒のやうなものである。心と言ふても、大した違ひはないけれども、多くは氣といふ時は、身體に屬する。志は吾が心を決定した意思だ。我れ善く吾が浩然の氣を養ふ。此氣といふ字は、却辯が付け悪くい。孟子自身ですらも、曰く言ひ難しと言つてゐます。浩然といふのは、盛大流行の貌と、朱熹は註釋をしてゐる。洵に盛大に流行して、已まざる所のものを形容した文字で、浩然の氣は何處にあるかと言へば、之れを遠方に求めやうとしても、そんな氣が何處にもあるのではない。畢竟一章の主眼とする所は、此養ふといふ所にある。此浩然の氣なるものは、盛大流行のものであるけれども、養ふことを知らざる人において、此氣といふものは、此言葉の反對で、實に至小至柔であるといふても可からう。始めから浩然と限られたものでない。それが養はれる時は、流行已まざる所

のものであるが、養はぬ時は不足言らぬものである。だから氣は恂ういふものであると言ふて、一定した註釋を下すならば、下すことができませんが、それでは死んだ註釋であります。だから孟子自身が、曰く言ひ難し、自分に修養して、味はう人に於て、始めて浩然の氣たるものは、何者かといふことが、我が物に爲るを見て置いて可からう。それは吾が佛敎の言葉から見ると、爰に洪川先師の説を紹介するが、先師は「首楞嚴經」を引いて、「首楞嚴經」といふは、我が大乘佛敎では有名な經文であつて、心理的に佛敎の蘊奥を説いてある。其經文中に

「色身より外山河虚空大地に泊るまで、咸く是れ妙明眞心中の物なり云々」

とあつて。色身といふのは、我が身體であります。之れを始めとして外界一切の現象の代表を呼び出して、虚空大地と云ふたのであります。其一切のものは、何んの現はれであるかと言へば、これは悉く妙明眞心の現はれである。此五官を以て、總ての現象に對した所では、恂ういふ一切のものが、吾よりも以前に現はれて居る如く思ひ爲すのであるが、佛説に依ると然うでない。眼に映じて居り、耳に響いてゐる此一切の現象は、悉く妙明眞心中のものである。佛敎の見方は、始終然うである。仰向いて見ると、日月星辰燦然と、其處へ現はれてゐる。俯向いて見ると、山河大地人畜草木、其處に雜然として現はれてゐるが、これは外のもの、現はれでない。皆我が本來有つてゐる妙明眞心中のものであるといふ思想が、經文に出てゐる。「楞嚴經」ばかりでない、大乘佛敎の思想は、常に恂うい

ふものであります。元來天地は無形なり、無知なり、無靈なり、而して之れに主宰なる者は、即ち此妙明真心である。此妙明の真心といふ心を通じて、始めて一切萬物に其眉目あり、一切萬物に其心靈ありと言ひ得ることができます。之れを除いて了へば、天地は無形無知無靈のものと言ふ外はない。彼の恚ういふ立場から見ると、孟子の浩然の氣と唱へ始めた氣は、始めから良能があるのではない。彼の氣を主宰する所の妙明の真心あつて、そして良知良能といふものゝ働きを現はす、それを孟子は養ふと此處では言ふた。此養の一字を以て、活用するのである。學者能く、此理を熟察精思す可し。これは洪川先師が言はれたことを、納が取次いだのであります。其處で浩然の氣といふものを、如何に養ふか、これから實行であります。若し其浩然の氣を養ひ得て、十分に鍛錬し、修養し得るかといふと、其氣たるや至大至剛である。至大至剛であるけれども、養ふといふことを知らざれば、不足言らぬものである。直を以て養つて害ふことなければ、則ち天地の間に塞がる。此直の一字であります。此事も『維摩經』などを見ると、

「直心是れ道場」

など、言ふてある。白隱禪師の師匠である正受老人の言葉に、直を以て養ふといふ意味のことを、

「正念工夫、不斷相續」

と言ふてゐる。總て修養といふことは、實行せざれば無味淡泊にして、無意味なものであるが、一と

度之れを實行するといふことに至つて、愈々益々其意義の甚深なるを知るので、恰も大海に入るが如く、轉た入れれば轉た深しである。それを孟子は、直を以て養ふて害ふなければ云々と言ふた。然るに吾々は常に人慾の私なるものゝ爲めに、之れを害ふてゐる。朝から晩まで吾々の五官の機能から起る七情、即ち喜怒哀樂愛惡欲の情の爲めに、常に盛大流行なる氣を傷だらけにしてゐる。然るに之れに反して、直を以て養ふて害ふなきときは、天地の間に塞がる。これは世間的の言葉であるから、天地の間を言ふたのであるけれども、別に何んにも元來天地といふて、内外があるのではない。畢竟天地の間に一杯、地に一杯、天地其儘に一杯に塞がつてゐる。これは「孟子」といふ書物の言葉を讀んだだけで置けば、それだけであるが、此氣といふものは、何かといふことから、次第に修養して行くと、其氣といふものが著しく力附いて来る。段々修養し得て来ると、殆んど天地一體の間に充實するといふ境界にまで至り得ることが能きる。これは修養の實行上に於て現はれて来るのであります。さて先師洪川老漢が儒を出て禪に入つた其動機は何かと言ふと、前にも説いた通り、或る時孟子浩然の章を講釋してゐて、突然大聲を發して、門人に向ひ、孟子は浩然の氣を養ふといふが、我れは浩然の氣を行はんと言はれた。それも不意と思ひ付いて叫んだ譯ではない。豫てより密々に工夫を凝して居られたのであります。それから遂に儒を捨て、禪に入られた。其時の告別の詩は、

孔聖釋尊非別人、彼謂見性此謂仁

脱塵、休怪吾、盡放、行箇、浩然、一片、眞、
といふ七言絶句であります。恁ういふ譯で、此浩然の章といふものは、餘程洪川先師と深き因縁が
るのであります。

正文二十九字

「凡そ天下の儒流、孟軻浩然の章を読み、恕乎として過ぐる者は、眞の儒人に非ず」恕乎といふのは
憂ひなき貌で、我れは儒者であると言ふても、孟子の此浩然の章を、殆んど讀み流して了つて、唯講
釋する位では、眞の儒者と稱することはできない。「山野疇昔此章に逢ふて、道を求むるの志を根す」
疇昔は遠い昔ではない。先きといふことで、前日といふが如くである。先きに此章に出會ふて、始め
て求道の志といふものを立てた。「故に後來常に歎じて云く」これ程因縁のある一章だから、後に
志を成して後、賞讃して言ふには「大教未だ東來せざる以前に當りて」大教は言ふ迄もなく佛教で
佛教が印度から東の方へ渡らぬ前に「此卓見有り」孔子一代には、餘り恁ういふキツパリしたことを
言はぬ、其處は孔子の味はうべき所だ。然るに孟子が、未だ佛教の渡來せぬ前に、此浩然の一句を唱
へたといふ、恁ういふ卓見を有したのは、驚き入つたことである。「孟軻は謂つ可し、生れながらに
て之れを知る者なり」同じ知るにしても、苦んで知る輩もあり、學んで知る輩もあり、又は生れなが

らにして知る者もある。知ると言ふも種々あるが、どちらかと言へば、本當は苦んで知るのが、吾々
には爲めになることで、次ぎに學んで知るのも大切である。そして生れながらにして知るは、十人が
十人能きることではない。これは千萬人の中一人あるかなしであります。此點からいふと、孟子は生
れながらにして知る者といふことが能き。「試みに學者に問はん」試みに學者修行者に、自分が尋
ねて見るが「正文二十九字、但だ一字生知の全力を用ゆる處有り」此處に言ふ本文は、丁度二十九字
あります。此中で僅一字といふと、大抵の人が早合點して、養の一字であらうとか、又は直の一字で
あらうとか、當て推量をしようとする。然るに先師洪川老漢の見てゐる所は、然うした字義上の沙汰
ではありませぬ。「作麼生か那の一字」如何なるが那の一字で、此二十九字の中から、假り染めに一字
を捕へ來て、あれかこれかと言ふてゐるこんな文字ではない。其處は孟子でないが、曰く言ひ難しで
人々が修養鍊磨した上で知ること、其一字を筆先で、書く譯ではない。書き表はせるものでない。
天地に塞がるといふ境界を、爰に實現しなければならぬ。禪の本領は此處にある。それなら何か神秘
的のものか、不可思議のものがあつて、偶然に現はれ出づるのかといへば、決して然ういふ譯のもの
でない。それは何んの一字であるか、此洪川の目の前に突き付けて見ろ、作麼生か那の一字。

無 隱 第八則

孔子曰。二三子。以我爲隱乎。吾無隱乎爾。

吾妙道。至簡至近。知之則尋常事也。決非高明者。決非幽遠者。而又莫幽遠焉者。故其妙甚矣。孟軻曰。道在近。却求之遠。事在易。却求之難。是已。今如本則一語。孔子向學人面前。傾盡一栲栳。而當時十哲徒。各盡充分力量。而收得寶珍者稀。不亦奇乎。昔宋黃庭堅參黃龍晦堂。堂曰所公諳書中有一兩句。甚與吾門事恰好也。公知之麼。庭堅云。不知。時當暑退涼生。秋香滿院。堂乃曰。聞木犀香乎。庭堅云。聞。堂曰。吾無隱乎爾。庭堅欣然領解。後在黔州道中晝臥。覺來忽然通徹本源。便寄一偈。偈中有石工來劉鼻端塵。無手人來斧始親之句。全偈在羅湖野錄。可往見。噫如庭堅刻意斯道。如實盡力。如實徹見。可謂收得寶珍者。學者若激發大志。不懈。則亦必有收得孔門寶珍之時節。吾亦無隱乎爾。

(訓讀) 孔子曰く、二三子、我れを以て隠せりと爲す乎。吾れ爾に隠すこと無し。

吾が妙道は、至簡にして至近、之れを知れば則ち尋常事なり。決して高明なる者に非ず、決して幽遠なる者に非ず。而して又焉れより高明なる者莫く、又焉れより幽遠なる者莫し。故に其妙甚し。孟軻曰く、道は近きに在りて、却つて之れを遠きに求む。事は易きに在りて、却つて之れを難きに求む。是れのみ。今本則の一語の如き、孔子學人の面前に向つて、一栲栳を傾盡す。而かも當時十哲の徒、各充分の力量を盡し、而して寶珍を收得せる者稀なり。亦奇ならずや。昔宋の黃庭堅黃龍の晦堂に參す。堂曰く、公の諳んずる所の書中に一兩句有り。甚だ吾が門の事と恰好なり。公之れを知るや。庭堅云く、知らず。時暑退き涼生ずるに當る。秋香院に滿つ。堂乃ち曰く、木犀の香を聞くや。庭堅云く、聞く。堂曰く、吾れ爾に隠すこと無し。庭堅欣然として領解す。後黔州道中に在りて、晝臥し、覺め來つて忽然として本源に通徹す。便ち一偈を寄す、偈中石工來り劉る鼻端の塵、無手の人來つて斧始めて親しの句有り。(全偈羅湖野錄に在り往いて見るべし)噫庭堅の如きは、意を斯道に刻して、實の如く力を盡し、實の如く徹見す。謂つ可し寶珍を收得する者と。學者若し大志を激發して懈らざれば、則ち亦必ず孔門の寶珍を收得するの時節有らん。吾れ亦爾に隠すこと無し。

毎日の行動即ち道

此八則は、「論語」の述而篇の

「子曰く、二三子我を以て隠せりと爲す乎、吾れ爾に隠すこと無し。吾れ行ふとして二三子の者に與らしめずといふこと無し。是れ丘なり」

から引用してあります。これを解釋すると、或る時孔子が、門弟子に向つて言ふに、お前達我れを以て隠せりとするか、吾々も矢張然うであります。自分が至極見識が低い所から眺めると、其處に何か吾等の爲めに殊更に秘し隠して、更に示してくれない。其處に殊更に何か秘密を有つてゐると思ふであらうが、そんなことはない。吾れ爾に隠すこと無し、吾れは元來、爾等に向つて、塵程も隠す所はない。隠す所ないといふばかりでは、未だ言葉が至らないから、其次ぎに吾れ行ふとして二三子の者に與らしめずといふこと無しと付けた、吾れは朝起きてから、晩に寝るまで、其間行住坐臥、あらゆる行動の上に於て、一々爾等に示して居るのである。道といふと、遠い所へ求めるやうだが、實は吾が毎日々々の行動が、即ち爾等の爲めに示してゐるのである。恚ういふ言葉は、道を修める者から言ふと、有難い所のもので、一つ目を開いて、總ての宇宙間に放つて見ると、天にある現象も、地に現はれてゐる。總ての此差別も、それが一種の無言の說法をしてゐるのである。佛法でも能く言ふが、

說法は決して口の上で、彼れ是れ喋舌るばかりではない。それは低い說法で、其上に心に行ふ。それが大なる說法であると佛も言はれてゐる。孔子の立場から言ふと、一切の者が、吾々に無言の說法を與へてゐると言ふて可い。無言の說法といふことは、洵に味はうべきものであります。須菩提といふ人は、釋尊十大弟子の一人であつて、解空第一と言はれ、所謂眞空無相の玄理を能く會得してゐます。其須菩提が巖中に於て安坐して、深般若三昧に入つた。すると何處から出て來たものか、誰れが花を雨降らして、讚美する所の人がある。須菩提が、

「私が坐つてゐる所へ、花を散らして讚嘆するは誰れか」と尋ねると、

「吾れは帝釋天で、尊者の說法を讚嘆するのである」と答へた。須菩提曰く、

「吾れは唯巖中に默然として、三昧に入つて居る儘で、何一つ說法して居らぬに、何を以て讚嘆するかと帝釋天は、

「いや貴方の一言も説かれぬところ、私が未だ一音も耳に聞かぬ。無聞無説の所、それが眞の般若波羅密の大說法である。それが有難いから、此通り花を雨降らして、讚美するのである」

と答へた。憊ういふことが『碧巖』などにも出てゐます。然うした意味から言ふと、例へば春風の中に鳥が歌ひ、花が舞ふてゐる、秋の霽れた空に月が冴え渡り、風が囁いてゐる。これが眞の說法で、所謂『古松談般若、斷鳥弄眞如』といふものである。此立場から言ふならば、有情も無情も、常時說法で、經文には常說熾然說といふてあります。朝から晩まで、或る者が大說法をしてゐる。所謂無言の說法であります。憊ういふ所に引き當てゝ見ると、孔子の門人に示された所が、深甚にして微妙なる趣があると思ふ。それを先師洪川和尚が評せられて、左の如く言はれました。

道は近きに在り

『吾が妙道は至簡にして至近』眞の道といふものは、然う大袈裟なものではなく、至極簡にして、至極近い。之れを知らば則ち尋常事なり』眞の道の本體を知り得た時に於ては、何も變つた譯のものでなく尋常事である。昔の人は、未だ悟らぬ時は、山は是れ山、水は是れ水、既に悟れば水是れ水に非ず、山是れ山に非ず、そして其悟りといふものも、更に打破して了つた所では、相も變らず山は是れ山、水は是れ水なりで、所謂廬山は烟雨、浙江は潮、憊ういふ工合に、蘇東坡は悟つたのだが、それに違ひない。此尋常事といふことが、最も有難いことで、何か其處に隠し事がある、未だ秘密があるといふならば、未だ眞に知り得たといふ譯に往かぬ。古人も佛法に不思議なしと言ふた。『決して高

明なる者に非ず、決して幽遠なる者に非ず』併し時ありて、人の爲めにする時には、殊更に高明なる所を示すこともあり、又幽遠なる所を示すこともある。餘り目を卑近な所にばかり着けてゐる輩には高遠な所を挙げ示すが、畢竟之れを看破つて了つた時には、何も不思議はない。而して又焉れより高明なる者莫く、又焉れより幽遠なる者莫し』實は尋常一様のこと、其實至つて高く、至つて明かである尋常一様のこと、實は能く幽に、能く遠なる所の有様である。それ故に決して其一端を捕へて、此處であるなどいふ早合點をしては、逆も道の妙に及ぶことはない。『故に其妙甚し』其處で此處に孟子の言葉を引いた。『孟軻曰く、道は近きに在りて、却つて之れを遠きに求む。事は易きに在りて、却つて之れを難きに求む』孟子は又別の所で憊ういふことを言はれました。

『君子の言は下帶せずして道存す』

道は近きにあるが、多くの輩は之れを遠きに求めてゐる。事は易きにあるのに、却つて難きに求めてゐる。世の中のことを眺めて見ると、然ういふ嫌ひが往々ある。『今本則の一語の如き、孔子學人の面前に向つて、一栲栳を傾盡す』憊ういふやうな有様で、實例を挙げると、六祖禪師が五祖禪師の法を嗣ぎ、衣鉢を受けて、黄梅山を出られた時、之れを争はんとして、明上座が蹤から追ひ駆けて、衣鉢を奪ひ返へさうとしました。すると六祖禪師はさては衣鉢を取りに來たと察して、五祖禪師から傳授されたところの鉢と袈裟を、石の上に置いて、

「お前は之れを得んが爲めに來たのであらう。欲しければ持つて往け」と言はれた。明上座は脊力の勝れた僧でありまして、其力剛き明上座が、石の上から袈裟一具と鉢とを取り上げやうとしたところが、山の如く動かさず、これは吾が宗門では、室内で調ぶべきことであります。何んでもない軽いものが、山の如く重かつた。其宗旨を取つて見なければ、一種の奇蹟が轉じて、迷信に爲つては困るが、それは兎も角として、山の如く動かぬ。明上座が忽ち態度を變へて、

「私が貴方を追ひ駈けて來たのは、衣鉢を取り返へさうが爲めではござらぬ。私は五祖禪師の所で多年修行したが未だ得る所がありませんから、願はくば行者吾が爲めに心要を示し給へ」と宛るで打つて變つて出て來た。すると六祖禪師は

「不思議、不思議、正に與麼の時如何なるか是れ汝が父母未生前、本來の面目」

と言はれました。善を思はず、惡を思はず、世の中の道德上の言葉で言へば、凡そ相對界は善と惡とに分れる。吾々が朝から晩まで、考へてゐることは、善に非れば惡か、惡に非れば善、昔の人は何ういふ所を標準にして數へたか知らぬが、朝起きてから晩寝るまでの間に、二億四千ばかりの正邪の念が、種々に轉變するといふことが書物に出てゐる。そんな數は何うでも可いが、初めのものがなくなれば、後のものが頭を擡げて來る。混々として水の流れて盡きざるが如く、飄々として雲の空中に浮

ぶが如く、今此處に現はれ、又忽ちに滅するといふ有様で、前念滅し後念生じ、念々不斷相續してゐる。今之れを善と惡に分けて言つたのでありますが、此善惡を外の言葉に直せば順か逆か、苦か樂かで、順の裏は逆、苦の裏は樂、裏所ではない。苦と樂と、順と逆と何時も同居してゐるやうなものであります。大體二つの相手方を離れると、得々の智慧も、才覺も及ばぬ絶對界に入るのであります。吾々が一則の公案を念じて、無念無想の境界に入れといふのも、善惡を超絶しなければ、迎も入り込むことは能きぬ。正に斯くの如き如何なるか汝が父母未生前本來の面目、言ふまでもなく此身體は親から貰つたが、親が未だ生み付けぬ先き、押し廣めて言ふと、天地間に塵一本顯はれ出ぬ前の本來の面目如何、恚ういふことを六祖禪師は不思議、不思議、正に與麼の時如何なるか是れ汝が本來の面目と示めされた。此瞬間に於て、明上座が廓然として醒むる所がありました。これは漸く悟りが開けた譯ではない。明上座が豫てより専心一意、骨を折つたのが、是に於て忽然として氣が附いた。氣が附くと明上座が實に有難さが身に徹して、

「上來密語密意の外、却つて更に意旨ありや」と言ふと、六祖禪師は、

「我れ今汝が爲めに説くものは、即ち密あらず、汝若し自己の面目を返照せば、密は返つて汝が邊にあり」

と言はれた。これは親切な言葉で、其處で更に徹底した所の意を、愈々確めた新な有様である。所で此本則の吾れ爾に隠すこと無しの一語は、學人即ち修行者の面前に向つて、一栲栳、栲は山栲で、栳は柳で作つた器物をいひ、先づ柳行李で、何もかも納めてゐる。其柳行李の蓋を開いて、其處へさらけ出して了つたやうな傾きがある。而かも當時十哲の徒、各充分の力量を盡し、而して寶珍を收得せる者稀なり。孔子の門下には、七十餘人の勝れた者があり、又それに勝れた者が十人あつたといふが其十人の最も勝れた弟子達が、各々負けぬ氣に爲つて、力を振ひ出したけれども、眞の寶物を收め得た者は、實に稀である。只顏回が之れを得たが、惜しいことには天死をした。其外には獨り曾子が、道統を傳へた位で、其他子路とか、子貢とかいふ人もあるが、それは各々一能一藝を有つてゐるけれども、道の淵奥を傳へたといふ者は、只會子一人である。亦奇ならずや、昔宋の黃庭堅。これは宋朝の名臣で、又學者として聞えた人であります。『宋史列傳』に

『黃庭堅字は魯直と言ひ、洪州分寧の人、幼にして穎悟、讀書數過すれば輒誦を成す。舅李常其家を過ぎて、架上の書、之れを問ふに通せざるなし。常驚いて以て一日千里となす云々、元祐中大史と爲る。』『羅湖野錄』に大史黃公元祐の間、晦堂和尚に従つて遊び、而して死心の新、靈源の清と尤も方外の契り篤し(中略)黔南に在るに及んで、源、偈を以て之れに寄せて曰く

昔日對面隔千里、如今萬里彌相親云々

公之れに和して曰く、

石工來劉鼻端塵、無手人來斧始親
 白狐狸奴心即佛、龍睛虎眼主中賓
 自携瓶去沽村酒、却着衫來作主人
 萬里相看常對面、祖心寮裡有清新

さて或る時晦堂が言ふに『公の語んする所の書中に、一兩句有り、甚だ吾が門の事と恰好なり、公之れを知るや』と。すると『庭堅云く知らず』丁度其頃『暑退き涼生ずるに當る』で秋の初めであつた。『秋香院に滿つ』庭の木犀の花の芳香が滿ちてゐた。『堂乃ち曰く、木犀の香を聞くや』お前さんは、此良い薰りを嗅いでゐるだらうと言ふたら、『庭堅云く聞く』勿論良い薰りでござると言ふたら、『堂曰く、吾れ爾に隠すこと無し』禪宗の示し方は始終恁うであります。吾れ爾に隠すことなしといふ。講釋をして話をするやうな間どろいことでは不可ぬ。庭の木犀の香を聞きましたか、聞きました。吾れ爾に隠すことなしと、直覺的に會得せしめた。『庭堅欣然として領解す』今まで疑念を蓄へてゐたが、此句に觸れて、忽ち其趣を知つた。それから之れが初入であつて、段々修業して『後黔南道中に在りて』茶屋か何處かで晝寢をした。『覺め來つて忽然として本源に徹す』晦堂の示したことを、又此處に至つて、愈々益々其妙を會得しました。此處に其偈の二句だけを出した。偈の全部は『羅湖野錄』

に出てるが、それを黃庭堅が和韻しました。其中に「石工來り、鋸る鼻端の塵、無手の人來つて斧始めて親し」といふ句がある。其故事は「莊子」の徐無鬼篇に、
 「莊子葬を送つて、惠子の墓を過ぎる。顧みて從者に謂つて曰く、郢人聖其鼻を汚すこと蠅翼の如し。匠石をして之れを剡らしむ。匠石斤を運らして風を成す、聽いて之れを剡る。聖を盡して鼻傷かず、郢人立つて容を失はず、宋元君之れを聞きて、匠石を召して曰く、嘗て試みに寡人の爲めに之れを爲せ。匠石曰く、臣嘗て能く之れを剡る。然りと雖も臣の質死すること久し、夫子の死より吾れ以て質を爲すことなし。吾れ與に之れを言ふことなし。」
 と。これから來てゐるのであります。それで石工來り鋸る鼻端の塵、無手の人來りて斧始めて親し「噫庭堅の如きは、意を斯道に刻して、實の如く力を盡し、實の如く徹見す、謂つ可し寶珍を收得する者と、學者若し大志を激發して懈らざれば、則ち亦必ず孔門の寶珍を收得するの時節有らん」獨り黃庭堅ばかりでなく、誰れでも大志を激發して懈らなかつたならば、亦必ず孔門の寶珍を收得するだらうと、恚う言葉を確認して置いて、「吾れ亦爾に隱すこと無し」と洪川先師は言はれた。恚ういふ所は、下手な辯を付けぬが可い。

顏回 第九則

孔子曰。回也其幾乎。屢空。

至誠。至仁。至道。皆同實異名。其爲體也虛。故流行無息。流行不息則實。實而虛。虛而實。照天地而莫遺。彌綸六合而莫欠。其明妙誠不可思議者也。聖得之以爲聖。佛得之以爲佛。昔者孔子傳諸顏回。顏回拳拳服膺。其心三月不違仁。以至於屢空。故孔子稱歎有餘矣。空者。體究乎至誠虛明之理。而中心無妄情之謂。達磨大士曰。大道者虛懷爲本。不著爲宗。是也。孔門之極功亦一轍。嗚呼顏回之傑出于七十子者。其之在于此歟。宋儒之解。對於賜不受命而貨殖之語。以空爲空匱。取意太淺近。只是求切于字句耳。若以屢貧自安稱之。恐應不至動孔子之嘆如是也。乞高見士反覆察焉。

(訓讀) 孔子曰く、回や其れ幾いかな。屢空し。

至誠、至仁、至道、皆同實異名なり。其體たるや虚なり。故に流行して息むこと無し。流行して息まざれば則ち實、實にして虚、虚にして實、天地を照して遺すこと莫く、六合に彌綸して欠くこと莫し。其明妙誠に思議す可からざる者なり。聖は之れを得て以て聖と爲す。佛は之れを得て以て佛と爲る。昔は孔子諸れを顔回に傳へ、顔回拳々服膺して、其心三月仁に違はず、以て屢空しきに至る。故に孔子稱歎して餘り有り。空とは、至誠虚明の理を體究して、而かも中心妄情無きの謂なり。達磨大士曰く、大道は虚懷を本と爲し、不著を宗と爲す。是れなり、孔門の極功、亦一轍のみ。嗚呼顔回の七十子に傑出するもの、其れ此に在るか。宋儒の解、賜は命を受けずして貨殖すの語に對し、空を以て空置と爲す。意を取る太だ淺近なり。只是れ字句に切ならんことを求むるのみ。若し屢貧にして自ら安んずるを以て之れを稱せば、恐らくは應に孔子の嘆を動かすこと是くの如きに至らざるべし。乞ふ高見の士反覆焉れを察せよ。

一簞の食一瓢の飲

此本文も矢張「論語」の先進の篇に出てゐて、「回や其れ幾いかな。屢空し」といふて置いて、「賜は命を受けずして貨殖す。億るときは則ち屢中る」とあります。一と通りの解釋に依ると、同じ孔

子の十哲と稱する十人の勝れた弟子方に就いても、賜といふのは子貢の諱で、其子貢といふ人物は、却々伶俐であつた。命を受けずして貨殖す。現代の言葉でいふならば、經濟といふと、大分大きいが兎に角理財といふやうなことに長けた人であつて、到る所富を作るといふことが、其最も得意であつた。億れば則ち屢中るといふて、大抵な企てをしても、子貢のやることは皆中ると、恚う批評を下して置いて、それから顔回は何うかといふと、是れはそれに反して、餘程道に幾い所のものである。顔回は一向富貴も功名も眼中に置いてゐない。富貴といひ、功名といふことは、勿論結構で、只仙人氣取りで、富貴を浮雲の如しであるとか、功名を一朝の槿花の榮えるものであるとか、昔の或る一種の儒者のいふことだけを氣取つて、そんな心を以て言ふてゐては、不足言らないが、併しズツと立ち勝れてゐる人に爲ると、富貴も功名も畢竟眼中に置かない。それ故屢空して、顔回の生活といふものは、頗る貧にして乏しかつた。恚ういふのが當り前の解釋であるが、先師の解釋は然うでない。けれども先づ一と通りは然うだ。何故といふと、顔回といふ人は、一簞の食、一瓢の飲といふ有様、然ういふ貧しい暮らしをして居つた。而かも陋巷といふて家居住居をして居つた。人は其憂ひに堪へず普通の者ならば、四百四病の疾よりも、貧が一番辛いといふ、昔の俗言にもある位であつて、大抵なものはそれが爲めに、殆んど身體も憔悴し、心も沮喪して了ふであらうが、顔回はそれ程貧しい境涯にゐても、其中に一つの樂みがあつた。然ういふ工合に、孔子は褒めてゐるから、矢張憂ひも空しと

いふのは、其意味に於て空しといふて、毎も足らぬ勝ちで、食ふや食はずにゐるのだが、それでも安んじてゐるといふて、爰に褒めた言葉はないやうだけれども、態々孔子が之れを擧げたのは、即ち褒めて爰に擧げたのだと、一と通りの解釋は、之れが寧ろ穩かな方であらう。けれども先師洪川老漢の解釋は、只それに止まつて居らぬ。あらゆる人道、あらゆる佛法、其宗教の蘊奥を究め盡して了つた揚句は、畢竟空しといふて、只空々寂々といふ。佛法で謂ふ聲聞的の一種の空理の悟りであらう。朱熹が能く言ふ言葉で、虛誕寂滅の教へといふ、それが即ち空といふ意味と思ふのだが、決して然うでない。此空といふことは、有るといふことに對する無いといふやうなそんな低いものではない。最少し言葉を換へて言ふならば、佛といふものも空、佛法といふものも空しい、悟りといふことも、迷ひといふことも、世間といふことも、そんなことはスツキリ跡方が絶えて無くなつて了ふたる其境界を言はふとしてゐるのであります。其ことは評の中に詳しくありますから、此處では説きませぬけれども、其處まで言はぬでも、大抵昔から東洋でも、西洋でも、大哲學者とか、大宗教家とかいふやうなものも、屢々空しといふ人が多いのであります。吾々が大本教主と仰いでゐる釋迦牟尼世尊でも、生れ立ちは貴族に生れたが、其富貴も榮華も捨て了つて、山に入り、そして彼のやうに修行を積んで、唯一個の形は乞食だ。さういふ修業をして、一とたび世に出て、あの通りの大獅子吼をせられました。それから四十九年の間、實に獅子が叫ぶが如く、百獸震駭するやうな盛んな有様で、一代

法の爲めに盡されたといふのは、何にかといふと、佛の胸中に、一點の悟りも、一點の佛法も何にもない。何にかあつたならば、あれだけの大きい仕事は能きなかつた。實は何にも無い所から、大活動を始め、あの通りの大仕事をされました。其處で問題である。あれ程喋舌つて居りながら、終りに我れ四十九年の間、未だ會て一字をも説かずと、恁う自ら言はれました。「涅槃經」といふのが、一番終りの説法であります。其説法の時に、

「我れは四十九年間、此通り喋舌つたやうであるけれども、其實未だ會て一字も説かない」と言はれました。所謂屢々空しき境界は然うであります。先づ釋尊を始め、代々の菩薩方、祖師方の生活の状態から、其修行の有様を眺めて見ると、畢竟ドン詰りは不可解といふ所謂屢々空しといふ境界に至つたのである。之れは釋尊や、佛敎に屬する人々ばかりではない。孔子の一代とても、殆んど或る場合には喪家の狗の如しとまで、人に見られませんでした。それから陳に行き、齊に行き、其他に行つても、或る場合には、盜賊だと疑はれたり、宛るで乞食であると思はれたりして、多くは轉軻不遇の間に、遂に身は歿して了つた。それは東洋の人は、皆そんなことを得意にしてゐるから不可ないといふ人があるかも知れないが然うでない。そんな低いところを見てゐるのではない。例へて歐羅巴に行つても然うだ。希臘時代の大哲學者ダイオデニウスでも、ソクラテスでも、外にもあのやうな哲學者はゐるが、皆同じやうな有様でありました。子供でも能く知つてゐる話だが、ダイオデニウスの傳を

讀んで見ても、彼れは當時に於ける大哲學者である。所が其頃にアレキサンダー大王といへば、世界に名の轟いた人であつた。其アレキサンダー大王が、其乞食見たやうなダイオチニアスを、何うすることも能きなかつた。作り話かも知れないが、或る時アレキサンダー大王が、侍臣に向つて、我れは殆んど征服すべき國がなくなつて了つたと言ふたとのことであるが、それは作り話にせよ、それ程の勢ひでありました。故に大王の權力威力に怖れて、其命に従はぬ者はなかつた程でありました。ところがダイオチニアス一人のみ、一向大王を眼中に置かなかつたのである。或る時アレキサンダー大王が、

「皆私の所に出て來ぬ者はないのに、吾が領分にゐながらダイオチニアスなる者は、何うして私の所に出て來ぬか」

と言ふと、侍臣が

「彼れは逆も自身で出ては參りませぬ。首にでもしなければ、決して御側には參りませぬ」

と答へた。すると大王は、然う言はれると、尙ほ見たい氣がしてならず、何うかして一遍逢ひたいと言ふので、侍臣はそれでは御自身で御越しにならなければならぬと言ふと、大王は自ら駕を控へて、ダイオチニアスの許に行き、どんな状態かを見ると、酒樽の中に棲んでゐました。酒樽を酒屋から貰つて來て、それを家として生活してゐた。時の書生なり學者なりが、彼方からも此方からも皆、酒樽

の中に生活してゐるダイオチニアスの許へ來て、深く哲學を研究してゐたやうな有様、其處へアレキサンダー大王が行つたのだから、大に驚いた。世界に有名な大哲學者が、如何にして恚ういふ貧しい生活をしてゐるか、

「我れは今此國の大王であるが、若し汝が我れに求むるところがあるならば、何んでも肯き届けて遣るから、遠慮なしに言へ」

と言ふたが、ダイオチニアスの眼中には、別にアレキサンダー大王も何もなかつた。

「別段貴所に求むるところはありませぬが、強つて何んでも叶へてやると言はれるなら、外ではありませぬ。其處を退いて下さい」

と言ふた。其時は寒い時であつたと見えて、ダイオチニアスは背中を日向に向けて、日向ぼつこをしてゐた。所へ大王が來て立つたから、日蔭に爲つたので然ういふた。ダイオチニアスの精神は、實に酒々落々たるもので、其胸中には何物もない。況して富貴とか、功名とかそんなものは何にもない。これはホンの一例として擧げたのであるが、如何に佛法は幽玄微妙で、實に不可思議なるものであるといふても、徹底して蘊奥を究め盡した上に於ては何もない。悟つて了へば悟りはない。佛と爲つて了へば佛はない。其處に佛らしいものとか、悟りらしいものとかいふものがあるならば、未だ眞に蘊奥に徹底したものでないといつても、決して過言でないと思ふ。其處に於て先師が言はんとする。回や

其れ幾いかなで、有繋顔回である。顔回のみは稍道に近い、何故といふと其精神を研き上げた其状態といふものは屢々空し、恚ういふて褒められました。

誠の一字

前段に説いたところを、先師洪川老漢は「至誠、至仁、至道皆同實異名なり」と評せられました。之れを言ひ換へれば何んとも言へるが、誠といふ一字で盡きてゐます。或は仁といふても宜しい、或は道と稱へても宜しい、絶對的の意味を有つ時には、至といふ字が、漢語では頭に置いてある。それは何んといふても皆同實異名であります。名が違ふだけで、其實變りはありません。それでは誠といひ、仁といひ、道といふものは、どんなものであらうか、仁といひ、誠といひ、道といふと、特別に其處に何かがあるやうに思ふのであるが、「其體たるや虚なり」で、其本體といふものを虚にして、了つた以上は何もない。虚といふ字は、偽りとも讀む字である。昔から何も無いといふ字であるが然ういふ單純な意味ではない。何んとも形容の仕様がな。其妙といふ時には、虚といふ何れものもない。塵一本其處に落ちたものがない。昔の言葉で言ふならば、大極のやうな有様である。「故に流行して息むこと無し」到る所に流行してゐる。虚といふと、何も流行しやうにないが、其虚たるや決して死物ではないのだから、限りなき時、限りなき所を貫いて、常に流行して息むことのないもの

であります。「流行して息まざれば則ち實」で、虚ではあるけれども、虚なるものは死物でなく現はれてゐる。間斷なく盛んに行はれてゐる時は矢張實で、其處に確に手捕りにすべき所のものがあらう。其處は銘々修行して、恰も水を飲んで冷暖自知する境界に至らなければならぬ。言葉を重ねて見た處が分らない。人々に於て認めた以上は、其物たるや「實にして虚、虚にして實」である。實といふと、何か固定してありさうなものだが、虚といふと、何もありさうもないが其實ある。虚々實々といふことがあるが、佛教のギリ／＼は、矢張虚々實々といふことに外ならない。獨り佛法ばかりでない。例へば世の中の學問といふ中にも、文學でも、美術でも、所謂藝術其他のことを妙といふことに至つたら、虚々實々であらう。創造の妙は何かといへば、矢張虚々實々より仕様はないであらう。柔道の妙は何うかといふと、矢張虚々實々だ。そんなことばかりではない。外交上の樽俎折衝の妙も、これに外あるまいと思ふ。實業界に於て、其道を扱ふて行く上に於ても、矢張虚々實々、これ以上言ひ現はし方はないであらう。であるから「天地を照して遺すこと莫く、六合に彌綸して欠くこと莫し」其仁なり、誠なり、道なりといふものは、天地を照して遺す處のない。天地間の中に何か挟まれてゐるやうに思はれるが、然うでない。實は此物が天地の中にある。又六合に行き渡つてゐて、然うして缺けた處はない。六合といふのは、上下東西南北「其明妙誠に思議す可からざる者なり」で實に不可思議である。世の中で不可思議とか、不思議とかいふことは、洵に取るに足らないやうなことを言ふ

てゐるが、眞の本體は常に不可思議である。吾々の思慮分別では、到底知り得ることはできない。「聖は之れを得て以て聖と爲り、佛は之れを得て以て佛と爲る」それは聖人の外にはない。之れを我が物にしただけが、佛と人間と違ふのである。其他は言葉のみを以て佛と爲してゐる。同時に凡夫は之れを失ふてゐるから、之れを凡夫といふてゐるだけ、或は邪人といひ、悪人と稱するけれども、之れを無視してゐるから、悪人といひ、邪人といふだけのことでもあります。佛教では佛といひ、儒教では之れを天といひ、或は明といふてゐる。或は外の教へではゴツドといひ、我が物顔にして、色々の名を付けてゐるだけのことである。其ものを孔子が顔回に傳へた。顔回は外の所に出て居つたが如く、不幸にして早世した。それ故に眞の道を得たものは、只曾子一人であるといふことは、外の章で説いた通りであります。「昔は孔子諸れを顔回に傳へ、拳々服膺して、其心三月仁に違はず」三月仁に違はずといふことが有難いので、吾々は其日一日も仁に違はぬといふことは、却々能き得られぬ。勿論今日一日仁に違はざる境界が得られたならば、二日得らるゝ、二日得られたならば、三日得らるゝ、終に三月得られ、一年間も得られ、一生溼通しても得らるゝであらうが、然うは言はずして、僅に三月ばかり、此仁に違はざることを得たといふ。段々修養工夫の次第に進歩して行つたといふことを、然ういふ鹽梅に言ふてゐます。拳々服膺といふと、大切なるものを兩手に捧げたるが如き心持、洵に緻密な心を有つて、洵に周到なる用意を以て服膺して、其心三月仁に違はず、何時でも其仁といふものが階

み外さぬやうに爲すことができた。終には「以て屢空しきに至る」初めは是れが仁、是れが仁でないといふやうな然ういふ心苦しいこともあつたが、終には空しといふ境界が、屢々現はれて来る。「故に孔子稱歎して餘り有り」孔子が多勢の弟子の中で、顔回だけはといふて稱歎された。「空とは、至誠虚明の理を體究して、而かも中心妄情なきの謂なり」本文に空の字が使つてゐるのは外ではない。空といふと、大抵は字義に限られて了つて、何も無いこと、無念無想と口でこそいふが、眞の意味は然ういふ有様に係つたものでない。先師が常に言はれました。空といふ意味は、至誠虚明の大眞理を我れに體究して、中心妄情のなきこと、只これだけを空といふ。「達磨大士曰く、大道は虚懷を本と爲し、不著を宗と爲す」これは禪經などにも引いてあります。唯虚懷といふやうなことが、口や文字に依つて、柄初め然ういふことを言ふてゐるが、眞にそれは虚ではない、種々なものが頭を擡げて、其處に續々として現はれて来る、如何なるものが現はれて來ても、丁度研ぎ澄した明鏡が、一切の萬象に對したやうな境界でやつて行くといふことは、容易に能きない。諸子百家種々のことを調べて、其事を知るだけが空ではない。終に其境界に達するのを以て、目的としてゐる。世の中は見るに就け、聞くに就け、執着すべきやうに能きてゐるが、如何なるものに對しても、聖人は物に滯らずして、能く世と推し移るのであります。「孔門の極功、亦一轍のみ」吾が宗旨上から言ふならば、孔子の教と雖も毫も變るところはない。其處で「嗚呼」と三嘆して「顔回の七十子に傑出するもの、其れ此

に在るか」と云ふて、顔回が只貧乏人だからといふて、貧乏ばかりを賞める譯ではない。物質的に乏しいことをいふのではない。精神的の意味に於て、七十子に傑出してゐると、孔子は顔回に目を着けました。「宋儒の解、賜は命を受けずして、貨殖すの語に對し、空を以て空置と爲す、意を取る太だ淺近なり」即ち朱子などの註釋を見ると、毎でも子貢といふものを引合に出して、子貢は天命に安んぜずして、貨財を増殖することが上手であると、子貢に對しても言はれたことがあるから、丁度反對で、顔回は毎でも貧乏してゐる。其處が面白いと、恚ういふて褒められたやうな註釋が多い。それ故に空を以て空置と爲す。空の字は畢竟空しい、乏しい、足らぬといふ、唯それだけの意味に解してゐる。其處で意を取ること太だ淺近である。「只是れ字句に切ならんことを求むるのみ」で、文字は成程然うであるが、餘り文字の意義を解釋しやうといふことに急なる爲めに、本意を忘れたのである。「若し屢貧にして自ら安んずるを以て、之れを稱せば、應に孔子の嘆を動かすことは是くの如きに至らざるべし」毎でも米櫃の中は空であるけれども、それでも無頓着なことをしてゐる位で、孔子がそれ程に褒めるといふことは當るまい。「乞ふ高見の士反覆焉れを察せよ」それは甚麼ものであらうか、世人の見るところと、今先師洪川和尚の唱へるところと、どちらが當つて居るであらうか、斯道に於て心ある輩なら、其判斷は人々に任すといふのであります。

夕 死 第十則

孔子曰。朝聞道夕死可矣。

此語。孔門真正學者。放身捨命之最難關。而四書六經中一大眼目也。宋張丞相天覺著護法論。便卷首出此一語。立論曰。以仁義忠信爲道耶。則孔子固有仁義忠信矣。以長生久視爲道耶。則曰夕死可矣。是果求聞何道哉。豈非大覺慈尊識心見性無上菩提之道也。云云。予視天覺之爲人。聰明精識。學該三教。名蓋一時。殊留心此道。徹見末後大事。而後成若說。是固駭古震今之偉論也。又如周惇頤。謁黃龍慧南。參扣佛祖不傳之道。南乃引此聖語。諭惇頤曰。畢竟以何爲道。夕死可耶。惇頤疑著不能答。後刻苦用力之久。而方透徹矣。看哉吾門之大事。其難如是。只是以放身捨命之時節爲則。故漫難容苟且之說。惇頤儻若平凡人。挾

容易心。便當時一言一句。豈不能答乎。果以非常人疑情乍塞。緘默而止。故欲學大道者。先須據這本則而起大疑情。但只疑著大道爲何物。厓來厓去至無可厓處。謂之放身捨命大死一番底時節。至茲更鞭羈體。勇猛向前。驀地擊碎碍膺物。則一團之大疑兇頓斃却。便捉得萬劫千生放失之大道。始知夕死可矣。謂之絕後再蘇底時節。其時孔子口頭之美味。過於侯鯖矣。

(訓讀) 孔子曰く、朝に道を聞いて夕に死すとも可なり矣。

此語、孔門真正の學者、放身捨命の最難關にして、四書六經中の一大眼目なり。宋の張丞相天覺、護法論を著し、便ち卷首に此一語を出し、論を立て、曰く、仁義忠信を以て道と爲すか。則ち孔子固より仁義忠信有り。長生久視を以て道と爲すか。則ち夕に死すとも可なりと曰ふ。是れ果して何れの道を聞くを求むるや、豈に大覺慈尊、識心見性、無上菩提の道に非ずや。云々、予天覺の人と爲りを視るに、聰明精識、學三教を該ね、名一時を蓋ふ。殊に心を此道に留め、末後の大事を徹見して而して后若説を成す。是れ固より古を駭かし今を震ふの偉論なり。又周惇頤の如きは、黃龍の慧南に謁し、佛祖不傳の道を參扣す。南乃ち此聖語を引き、惇頤を論して曰く、畢竟何を以

て道と爲して、夕に死すとも可なるや。惇頤疑著して答ふる能はず、後刻苦して力を用ゆること之れ久しくして、方に透徹す。看よや吾が門の大事、其難きことは是くの如し。只是れ放身捨命の時節を以て則と爲す。故に漫りに苟且の説を容れ難し。惇頤儻し平凡人の若く、容易に心を扱まば、便ち當時一言一句、豈に答ふる能はざらんや。果して非常の人なるを以て、疑情乍ち塞がり、緘黙して止む。故に大道を學ばんと欲する者は、先づ須らく這の本則に據りて大疑情を起すべし。但只大道は何物と爲すと疑著す。厓め來り厓め去り、厓む可き無き處に至りて之れを放身捨命大死一番底の時節と謂ふ。茲に至りて更に羈體に鞭ち、勇猛向前せよ。驀地に碍膺物を擊碎すれば、則ち一團の大疑兇頓に斃却す、便ち萬劫千生放失の大道を捉え得て、始めて夕に死すとも可なるを知る。之れを絶後再蘇底の時節と謂ふ。其時孔子口頭の美味、侯鯖よりも過ぎたり。

死の問題

第十則の『夕死』の一則は、誰れしも能く知つてゐる『論語』の里仁篇に出てゐる名高い辭であります。或る時孔子が、門弟子に向つて言はれました。「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり矣」と、洵に此言葉は、簡にして潔なる所のもので、深く考へると、恚ういふところは、納のやうな廻はり遠く諄々しく説かないで、人々自己が吾がものにして、工夫一番したならば、最も親しいであらうと思ふ。

文字は勿論解釋するまでもない。只一二字義を言ふならば「可なり」といふは、最善の言葉ではない。けれども「矣」の字は、これは確定した意味を現はす置字であります。可といふ意味を説くならば、可もなく不可もなくといふやうな、毒にも薬にもならずといふ時に使ふのであるけれども、矣の字がある時、最も可なり、最も佳しといふ意味が、其處に現はれます。此矣の字が頗る利いてゐます。言ふまでもなく、人間の最も大切と思つてゐるものは、何かと言へば生命、それから下つては財産だとか、名譽だとか、種々ありませうが、煎じ詰めると、生命程大切なものはありませぬ。従つて死するといふ位大事なことではない。要するに佛教と言はず、總ての宗教は、此死するといふ一字の解決を、如何にするかといふ問題に歸着して了ふと言ふても宜しい。去れば經文や、語録の中にも、無常迅速生死事大也といふことが、屢々繰り返へされてあります。其處で人生何が一番大切かといふと生命、何が一番大事かといへば、矢張り死であります。然るに孔子が、死は何んでもないやうに、朝に道を聞いたならば、夕に死すとも可なりと言はれた。これは孔子には限らぬが、先づ各宗の開祖とか、又は世界の偉人とかいふものゝ立場から見れば、何うしても斯うでなければならぬ。又吾が國の如き國情の、他國と大に異つてゐるに於ては、道の爲めといふか、最う少し近い所を言へば、國の爲めとか、君の爲めとか、之れが爲めに吾が尊い所の生命を、鴻毛よりも軽く、犠牲にして敢て悔ひないといふ精神が、凜然として各國よりも卓絶してゐます。吾が邦が三千年來、愈々益々向上發展して來

た經路を考へると、物質的に於ても、往々にして我れは彼れに及ばざる所が多かつたにも拘はらず、今日まで進むことあつて、退くことがないといふ。然うした國の歴史を有つてゐるのは、其根柢は何處にあるかといへば、一つの犠牲的精神にあるであらうと思ふ。此精神を廣い意味で言へば、東亞人種の特性であらうと思ふ。それで朝に道を聞いて、夕に死すとも可なりといふことは、これは拙い説明を加へぬ方が可い。只其實例を考へて見ると、衲どもが常に頭に有つてゐるところの釋迦牟尼佛にしても、孔子にしても、或は耶蘇にしても、モハメツトにしても、法然上人でも、親鸞上人でも、日蓮上人でも、始終心を置いてござつた所は、朝に道を聞いて夕に死すとも可なり、其處にあつたらう。例へば釋尊が、自分の尊き位置を、藁履の如く捨て、了つて、そして六年間靈山に於て難行苦行をして、如何なる艱難にも打ち勝つて、修行せられたのは、此道の爲めで、所謂夕に死すとも可なりの精神であります。又孔子の傳を見ても、生涯の間彼方に往き、此方に往き、道を説いて歩行されました。或る時は喪家の狗の如くにも見られ、或る時は盗人と誤り認められ、殆んど危害を加へられんとせられたこともありました。其陳に行き、齊に行き、其國々で最も軼軻不遇を極めました。そして毫も憾む所がなかつたといふのは、何んであるかといふと、即ち夕に死すとも可なりの精神であります。又耶蘇の傳を見ても、彼の如く十字架磔せられて、血を流したは、何んの爲めであるか、是れ亦夕に死すとも可なりの精神であります。其言ふ言葉は、種々違ひませう、言ひ方は違つても、皆道の爲めで

あります。又法然上人などの傳記を讀んでも、上人が流罪に遭はれた時、

露の身は此處かしこにて消えぬとも

心は同じ蓮のうてな

確か斯うであつたと記憶するが、恚ういふ和歌を詠まれた其決心は、是れ又夕に死すとも可なりの意味が現はれてゐます。又日蓮上人が鎌倉の龍の口に引出されて、身首所を異にせんとした時に臨み、「日蓮の臭き首を以て、清けき法華經に換へることが能きれば、實に吾が一生の本懐これに過ぎたることなし」

といふ意味のことを言はれました。之れも同じことでもあります。然ういふ所に目を着けて見ると、一宗を開いた祖師、一派を立てた所の高德といふ者は、常に心を道の上に抛げ出して居られます。道の爲めならば、生命は何時でも犠牲に爲やうといふ決心があるから、釋迦は約三千年前に歿なられたが、其生命は今尙存在してゐます。此世界に十五億の人があるとすれば、少くとも其三分の一の人達の頭に、釋迦の精神が宿つてゐます。時と所と物變り星移つて來てゐる今日も、釋迦の犠牲的精神といふものは、尙ほ躍如として到る所に、光りを放つてゐる有様であります。獨り釋迦ばかりでなく孔子の言はれた此簡單な言葉の中には、實に鼎を揚げ、山を抜く力よりも、より強い、より深い意味が籠つて居るであらう。只此一語でも、常に吾々が生きた守り本尊として、之れを有つてゐたならば

何れに行くとしても、吾れを遮るものはないであらう。それから下つて古の英雄と言ひ、豪傑といふやうな人々も、其事柄に大小廣狹の別はありとも、矢張精神の一到した所は、朝に道を聞いて夕に死すとも可なりでありませう。爲すこと能はざるに非ず、爲さざるなりといふやうな精神は、ネルソンに限らぬ、誰れでも然ういふやうな所があつて、偉い人は皆然ういふ精神であります。我れを遮る者は、アルプス山も何もないといふのは、ナポレオンばかりではない。古豪傑の傳を讀んで見ると、到る所に其精神が生き／＼として働いてゐます。死すとも可なりといふのは實に大いに活きるといふ意味を有つてゐます。身を捨てゝこそ浮ぶ瀬もありで、大死一番してこそ、生き甲斐があるといふ、深い意味が籠つて居るであらうと思ふ。

小覺と大覺

「此語、孔門眞正の學者、放身捨命の最難關にして、四書六經中の一大眼目なり」苟も孔子の門流にして、頗る眞面目な、頗る正しい所の學者即ち修行者ならば、これこそ孔子の道を學ぶ者の放身捨命の最難關であらう。昔ならば之れが函根の關所、支那で言へば之れが函谷關、道の爲めに生命を捨てる所である。生命が惜しさに、卑怯な心が生ずる輩は、一生涯何事も爲し得ることが能かない。之れが爲すことあるものと、ない者との追分道で、四書六經中の一大眼目であらう。此言葉に就いて次の

やうなことがあるので、それを此處に引合に出された。「宋の張丞相天覺、護法論を著し」これは宋朝の歴史を讀んだ人は、能く知るところで、張は張氏で、天覺は字であります。それから佛教の方では無盡居士といふて有名な人で、位丞相に至つて、此張丞相天覺が「護法論」といふものを著した。此天覺が、最初無佛論を著はさうとした時、妻の向氏が

「已に無佛と言は、何んの論することかあらん、宜しく有佛論を著はすべし」と諫めたので止めた。それから後「維摩經」を讀んで、

「此病非地、大亦不離地、大」

といふところで、初めて此佛道といふものゝ入處を得たのであります。それから深く佛教に入り、又禪に入つて、あらゆる高僧知識に親しく參究して力を得ました。其處で「護法論」を書いて、佛法を擁護するといふ意味から、一部の著述をしました。それは禪宗では、時に講釋する書物であります。

「便ち卷首に此一語を出し、論を立て、曰く」其「護法論」の卷首に、朝に道を聞いて夕に死すとも可なりの一語を抜き出して、天覺が論を立て、言ふに「仁義忠信を以て道と爲すか、則ち孔子固より仁義忠信有り」朝に道を聞くといふ其道は、何んの道であるか。若し孔子が仁といひ、義といひ、或は忠信といふことを以て、道と言ふたのは當然で、此處で斯う言はぬでも可さうなものである。「長生久視を以て道と爲すか、則ち夕に死すとも可なり」と曰ふ「長生久視といふのは、一と口にいへば、

仙術のやうなことで、此生命をば長からしむる爲めに、種々の養生法や、調心術といふやうなものもある。一と口に言へば仙術で、然ういふ術を修むれば、何時までも此世に生存してゐることが能きるといふやうなことで、若しそんな長生久視のことを以て道だとするならば、夕に死すとも可なりと言ふのは、所謂自家撞着である。それではなからう。「是れ果して何れの道を聞くを求むるや」朝に道を聞くといふ其道は何んであらう。「豈に大覺慈尊、識心見性、無上菩提の道に非ずや云々」恁ういふ場合に「護法論」の一番始めに出てゐる。大覺といふのは佛で、世の中には小覺は多勢居るであらうが佛はそれよりもズツと上で大覺であります。智慧の方から佛を眺めて大覺といひ、慈悲の方から眺めて慈尊といふのであります。識心見性、無上菩提、同じ佛教でも、大乘佛教は皆見性を論するが、併し禪宗となると、論する所ではない。直ちに吾が本性を見届ける。それ故に達磨大士の言はれた言葉にも

「性を知るは多く、性を見る者は稀なり」

と。心の事を論する者は、世の中に澤山ある。現在の心理學でも、餘程細かに説いてゐるけれども、我が心を掌を指すが如くに、歴々として實見せしむるのは、獨り我が法あるのみと、恁ういふ工合に古人は叫んでゐます。識心見性、無上菩提、之れに超えたものはない。識心見性、それが即ち無上菩提の道、菩提といふのは、これは梵語でありまして、漢字には道と譯し、或は覺といふ字にも譯し

てゐます。即ち此道といふものは、儒道でもなければ又老莊の道でもない。何かといふと即ち佛の道である、張無盡居士が斷じた。「予天覺の人と爲りを視るに聰明精誠」これは傳記を見れば詳しく分るが、此天覺の人物たるや、聰明にして精識である。そして「學三教を該ね、名一時を蓋ふ」三教と言ふと、佛教、老教、儒教で、最初儒老に入り、後佛に入つた。學三教に該博にして、其盛名は一時を蓋ふてゐる。勿論位は人臣を極め、其勢力も從つて時の人に擢んでゐるのみならず「殊に心を此道に留め」そればかりに止まらず、心を禪道に留めて「末後の大事を徹見して而して后若説を成す」これは張無盡居士が、初めて東林總禪師に參し、それから兜率禪師に參し、次いで眞淨文禪師と問答したことがあります。然うした末後の大事を徹見した。世に一知半解の人はあらうけれども、末後の一大事を徹見するといふ人は、洵に稀だ。末後の大事を徹見して後、遂に「護法論」を著はして、恁ういふ説を成した。「是れ固より古を駭かし今を震ふの偉論なり」これは佛教者が佛教のことを褒めたのであるから、僻目で見れば、我田に水を引くやうであるが、公平無私の眼を以て見ても、これは偉論と言はざるを得ぬ。「又周惇頤の如きは、黃龍の慧南に謁し、佛祖不傳の道を參叩す。」これは前にも説いたことがありまして、此周惇頤から、二程子即ち程明道、程伊川の兄弟が出て、それから又朱子などが出ました。斯くして宋學といふものが次第に盛んに行はれました。それは周惇頤が本を爲してゐる。此人は獨り孔子の道に於て深きのみならず、佛に入り更に禪に入りて、親しく參得しました。

然ういふ所から、一寸書く文章などが面白い。「古文眞寶にも」出てゐる「愛蓮説」に、「菊は花の隱逸なる者なり。牡丹は花の富貴なる者なり。蓮は花の君子なる者なり」と説を立て、蓮に事寄せて心事を書きました。短い文章の中にも、殆んど自讃のやうな言葉が現はれてゐます。此周惇頤が、此の大徳たる黃龍の慧南禪師に謁して、そして佛祖不傳の道を參叩しました。それも種々問答がありますが、此處に一箇條を引いて見ると、「南乃ち此聖語を引き、惇頤を諭して曰く」或る時慧南禪師が、此語を引いて、惇頤を諭して言ふには、「畢竟何を以て道と爲して、夕に死すとも可なるや」恰も一則の公案の如くにて詰問した。ところが「惇頤疑著して答ふる能はず」で彼れが如き博學、彼れが如き多識なる者にして、一語も答ふる事が能きなかつた。それから後金山の佛印禪師に參して、何を以て道と爲すかと尋ねた。すると佛印禪師が

「滿目の青山看るに一任す」

と示されました。禪宗の言葉は然うだ。目に一杯青々と聳えた山も看えぬかと恚ういふ所に辯を着けると死んで了ふ。道といふものを大抵な者は、遠い所に持つて行つて論ずるが、滿目の青山見るに一任す、斯うやつたので、理窟の學問とは大分違ふ。其處で惇頤は行き詰つた。すると佛印禪師は呵々と大笑された。此處で始めて惇頤は氣が付いた。恚ういふところが入口であつて、後東林總禪師に參して、法の淵源を盡したのであります。それから後有名な「易學心傳」を撰述しました。其書中に太

極に無極なりといふことを道破したのが、此周惇願の力であります。『後刻苦して力を用ゆること之れ久しくして、方に透徹す』といふのは、佛印禪師などとの問答の一端を挙げましたが、未だ他に種々あります。斯くの如く刻苦力を用ゆること久しくして透徹した。『看よ、吾が門の大事、其難きこと是くの如し、只是れ放身捨命の時節を以て則と爲す』難かしく言へば、難かしいけれども、一とたび吾が身を犠牲的に、其處に差出して了つて、放身捨命してやつたならば、誰れも此境界は得られるであらう。『故に漫りに苟且の説を容れ難し』苟且は假り染めで、當座廻れの説といふことで、只一時の胡魔化しは容れられない。『惇願儻し平凡人の若く、容易に心を挟まば、便ち當時一言一句、豈に答ふる能はざらんや』周惇願が若し平々凡々の人のやうに、何んでもない心、頗る輕薄な心を挟んでゐたならば、何んでも答へられぬことはない。道といふものは恚うである、あゝである。哲學的に解すれば恚う、科學的に解すれば恚う、唯心論でも、唯物論でも、何んでもコヂ附けられるけれどもそんなことは一言も言はなかつたのが、周惇願の偉い所であると、先師洪川老漢は言はれた。『果して非常の人なるを以て、疑情乍ち塞がり、緘黙して止む』此處が周惇願の最も勝れたところで、遂に其時答へなかつた。『故に大道を學ばんと欲する者は、先づ須らく這の本則に據りて大疑情を起すべし』這の本則、即ち此本文に出て居る何を以て道と爲すといふ此本則に據りて、大疑情を起して可からう。禪宗風の修行の仕方には、大疑情といふことがある。大抵の宗教が然うだ。佛敎でも淨土門的の宗教

は、始めから疑ふなよといふ敎へ方で、黙つて従はせる。佛敎以外の宗教でも、昔から信仰箇條といふものは、皆然うであります。智慧も要らぬ、學問も要らぬ、決して疑ふな、決して考へるな、只慈悲に絶れ、只神の懷へ飛び込めよといふ勸め方であります。ところが獨り我が禪門のやらせ方は、大いに疑へ、小さく疑つて不可ぬ。乃ち佛とは何者か、我れとは何者か、生れて何處から來たか、死んで何處へ往くか、現在何を以て居るかと、三通りの資格が備はらなければ、禪を修する資格がない。これは何かといふと、大疑情、大いに疑ひ、大信根、大いに信する、大憤志、人に向つて憤るのでなくして、我れ自身に向つて憤る。此三つがなくては、本當の禪の蓋奥を究めることは能きぬぞよと古人は言ふてゐます。『但只大道は何物と爲すと疑著す』口で以て只神とか、佛とかいふて、それを吾が物にしない時には、殆んど癡人夢を説くの類である。直ちに大道は何物かと恚う尋ねる、心何物かとズン／＼切り込んで行くと、殆んど我れとか、彼れとか、神とか、佛とかいふ區別も何もなくなつて了つて、渾然として一に歸して了ふ。然ういふところから持つて行くから、禪宗では即身即佛といふ遣り方、只口吻だけを學んでも、それは一種の戲論に過ぎない。斯くの如くに『厓め來り厓め去り、厓む可き無き處に至りて、之れを放身捨命、大死一番底の時節と謂ふ』肉體の死滅するのは、お互に實見してゐる。それは小死といふ、吾々が活句の中に實參した眞の境界を大死と言ふてゐる。『茲に至りて更に鬻體に鞭ち』總ていふことが振つてゐる。此肉體を直ちに鬻體と稱するのであります。

毎日大飯を食ふて、大寝坊をしてゐる骸骨に鞭つて「勇猛向前せよ」血がダク／＼してゐる身體が、
 髑髏的に働くやうに爲つて、勇猛向前させよ。「墓地に碍膈物を擊碎す」碍膈物といふのは、換言すれ
 ば一つの疑ひで、何人でも學問をすればしたゞけ、一つの疑ひといふものがある。此胸に横たはつて
 ゐる碍膈物を擊碎して了つたならば、「則ち一團の大疑兇頓に斃却す」兇の字は辭書で調べて見ると、
 毛物の名、牛のやうな形で、角が一つあり、青い色で、重さが千金もある獸である。恚ういふ獸に疑
 ひといふものを譬へて、それ程の凝固つた疑ひが、頓に斃れた如くに消えて了つて「便ち萬劫千生放
 失の大道を捉え得て、初めて夕に死すとも可なるを知る」此大道なるものは、外來のものではない。
 吾等は皆大道の中から生れたと言ふても宜しい。又大道といふものを生み出したと言ふても可い、萬
 劫千生、此大道の中に、吾々は起臥して居つたのであるが、それを取り失つてゐた。其取り失つた大
 道を捉へて、始めて夕に死すとも可なることを知る、頗る深刻に對切に、先師は言はれました。禪門
 の高德方の傳記を讀んで見ると、往々斯ういふことがあります。例へば松島瑞巖寺の開山法身國師は
 以前眞璧の平四郎といふた人で、其平四郎は國主の草履取をしてゐた、或る雪の日に、主人の國主が
 何處かへ招待されました。玄關に侍待をしてゐた平四郎が、今に主人が出てござるだらうが、履物を
 暖めて置かうと、主人思ひの忠義心から、其履物を懷に入れて暖めた。其處へ主人の國主が玄關へ
 出て來たから、暖めた履物を据ゑると、國主は穿いて見て暖みがあるので、さては吾が履物を尻の下

に敷いて居つたな。無禮な奴と憤り、矢庭に平四郎を蹴飛ばしました。誤解も甚しく、然ういふ亂
 暴なことをした。其時平四郎は、其片方の履物を持つて、其儘逃亡しました。それで志を發して思
 ふやう、彼も人なり、我れも人なり、自分が賤しい草履取をしてゐたから、彼れを主人としてゐたが
 自分が奮發して偉い者に爲つて見やうと考へました。けれども此時代は格式とか、門閥とかいふもの
 があつて、普通では出世が能きない。これは僧に爲つたらば、修行一つで高僧にも爲れて、人から尊
 敬せらるゝことが能きと思ふた。其處で或る寺に投じて頭を剃り、出家得度し、あらゆる艱難辛苦
 をして、後に唐土の徑山まで往つて、大事因縁を明らめ、遂に器を成就して歸朝し、松島瑞巖寺の開
 山法身國師と爲られました。或る時以前の主人であつた國主が、瑞巖寺に參詣し、音に名高い大徳が
 今度唐土から歸られて、斯くの如き寺を建てられたから、一度御目にかゝらうと、法身國師に面會す
 ると、思はざりき其法身國師は、以前自分の草履取の平四郎であつたから、大いに驚いて段々其因由
 を訊くと、實は彼の時、殘念口惜しと思ふたから、志を起して修行中、貴所の其時の履物を持つて
 ゐて、懶け根性が起ると、毎でも其履物を見て、奮發心を起し自分を勵ました。ところが今日圖らず
 も再び相見ゆることを得た。自分が今日あるは、言はゞ貴所の賜物であると言ふたので、國主は涙を
 流して、心から頭を垂れて、弟子の禮を取り、心底から法身國師に歸依したといふことであります。
 一説には其國主こそは、彼の一代の奇傑伊達政宗であつたといふ説もありますが、そんなことは何う

でも宜しい。さて平四郎の法身國師が、瑞巖寺晋山の時の偈頌は、

遠尋風月登徑山、歸開圓福大道場。
法身覺了無一物、元是真壁平四郎。

といふのでありまして、實に痛切なる偈と言ふて宜しい。再び生れ變つて來た此境界が「之れを絶後、再蘇底の時節と謂ふ」ので「其時孔子口頭の美味」孔子が、朝に道を聞いて、夕に死すとも可なりと言はれた口頭の美味といふのは「侯鯖よりも過ぎたり」侯鯖は故事でありまして、前漢の時代に樓護といふ醫者があつて、其時の貴族に大層信用を得た。其時王氏が頗る盛んであつて、其王氏が五家の侯爵に爲つてゐた。其五家の侯爵から、あちらからも、こちらからも樓護に來てくれと引つ張り合ひの有様だ、それで其御馳走は、迎も食ひ盡されぬから、五家の侯爵から持つて來た御馳走を、鯖(吹き寄せ鯖)に拵えたところが、其味ひ頗る美であつた。それから美味いものを侯鯖といふた。其時の孔子口頭の美味は、侯鯖よりも過ぎるであらう。其處は人々各自が味は、ねば分りませぬ。

編者竹の島人曰く、侯鯖の故事に就き『書言故事』に『漢の樓護五侯に傳會して、各々其歡心を得たり。競ふて奇膳を致す。護合せて以て鯖と爲す。甚だ美なり。世に五侯鯖と稱す焉。註に五侯は、漢の成帝の母舅王潭、王根、王立、王商、王逢、同日侯に封ぜらる。鯖は調和の名なり』とあり、又『蒙求』の註に、魚を煮肉を煎るを鯖といふ。鯖は鮓と同じ、煎り和するの名とある。

不見 第十一則

中庸曰。不見而章。不動而變。無爲而成。

吾門抱道學士。於是等語。恰如食蔗稍入佳境。何則不見之見。彰莫大焉。不動之動。變莫大焉。無爲之爲。成莫大焉。豈不是識心見性無上妙覺之道而何。大凡明眼者之於視聽。視之不以眼。聽之不以耳。而應眼時若千日竝照。應耳時若幽谷餘響。萬形千聲。一無所逃焉。大異於迷者之視聽。故曰。知遠之近。知風之自。知微之顯。可與入德矣。世之聰明者。只會淺近處。不辨幽遠理。若聞山野說。恐嘲笑而不信之。澆季大道之不明。職此之由。孔子不云乎。道之不明也我知之矣。賢者過之。不肖者不及也。人莫不飲食也。鮮能知味也。知言矣哉。

(訓讀) 中庸に曰く、見はさずして章かに、動かずして變じ、爲すこと無くして成る。

吾が門抱道の學士、是等の語に於て、恰も蔗を食ふて稍や佳境に入るが如し、何んとなれば則ち不見の見、彰焉れより大なるは莫し。不動の動、變焉れより大なるは莫し。無爲の爲、成焉れより大なるは莫し。豈に是れ識心見性無上妙覺の道にあらずして何んぞや。大凡そ明眼の者の視聽に於ける、之れを視るに眼を以てせず、之れを聽くに耳を以てせず、而かも眼に應ずる時は、千日竝び照らす若く、耳に應ずる時は、幽谷の谿谷の若く、萬形千聲、一も逃るゝ所無し。大いに迷者の視聽に異る。故に曰く、遠きの近きを知り、風の自るを知り、微の顯はるゝを知れば、與に徳に入るべし。世の聰明なる者、只淺近の處を會して、幽遠の理を辨ぜず、若し山野の説を聞かば恐らくは嘲笑して之れを信ぜざらん。澆季大道の明かならざる、職として此に之れ由る。孔子云はずや、道の明かならざるや、我れ之れを知れり。賢者は之れに過ぐ、不肖者は及ばざるなり。人飲食せざるは莫し、能く味を知る鮮し、知言なる哉。

自然の趣

本則は「中庸」の二十六章に出でる語を引用してあります。「見はさずして章かに、動かすして變じ、爲すこと無くして成る」恂ういふ聖人の言葉といふものは、總て簡にして潔なるものであるが、愈々味へば、愈々妙が其處に現はれて来る。唯言ふばかり、聽いたばかりでは、一向味が無い。「見は

さずして章かに」とは、何うであらうか、仰いで天象を見ると、天に在りては日月星辰、燦爛として光りを放つてゐる。之れは何か、所謂章かなる所である。俯して地上を眺めて見ると、總て草木國土山河大地、洵に整然として形を現はしてゐる。之れが即ち章かなる所で、山は少しも造作を加へぬが、自ら岷々として聳えてゐる。水は誰れも手傳はぬが、洋々として湛へてゐる。柳の緑なる、花の紅なる有様、谷川を流れるところの潺湲たる泉、峰の上を吹いてゐるところの松風、皆これは自然の趣で、見はさずして章かに、ハツキリと、目に一杯、耳に一杯に現はれる。「動かすして變じ」其實動く動くけれども、少しも其處に跡形も止めない。自然に變じて動いてゐる。例へば晝夜の更代する有様は何うか。日々地球が廻轉してゐるに従つて、此處に日が暮れる。夜が明けるといふ現象があつて、毎日寸分も、其軌道を外さずに動いてゐる。四時の循環する有様は何うか。「年毎に咲くや芳野の山櫻、木を割りて見よ花のありかを」で、木を割いて見ても、花が孕まれてゐるではないか、自然の造化が働いて、春風駘蕩と爲つて来ると、百花爛漫の景色が、目の前に現はれて來ます。丁度古人の詩に「春に百花有りて秋に月有り、夏に涼風有りて冬に雪有り」とある如く、知らず識らずの間に滯ることなくして、移り變つて行く、此當體が即ち動かすして變ずるといふ有様であります。「爲すこと無くして成る」別に誰れが手を下して、恂ういふ事を爲すといふのでも何んでもない。無爲にして而かも生々として、物を發育して往く有様、吾々が現實に於て、スツクリ目で見、耳で聞いてゐる此當

體が、即ち無爲にして成るといふ有様であります。今いふた詩に似た御詠歌の中にも
 春は花夏は橘 秋は菊
 いつも絶えせぬ法の花山
 といふのがあります。自然に此處に現はれてゐる。恠うした本文といふものは、殆んど禪宗の立派な
 一則の公案として宜しい。勿論此三十則は、先師洪川和尚が、一つ一つの公案に象つて、これだけ三
 十則を選ばれたので、能く當人自身の心に乘せて、親しく工夫せしめやう、親しくこれで鍛錬せしめ
 やうといふのであります。

走る船を止める

先師の評に『吾が門抱道の學士、是等の語に於て、恰も蔗を食ふて稍や佳境に入るが如し』と、矢
 張禪を修めるといふても、只一週間か二週間やつて見たが、薩張り得る所がないと言ふて、熄めるや
 うなことでは不可ぬ。抱道の學士夫等の人が見ると、其味が津々として禁することが能きぬ。之れ
 は往昔晋の顧顛之の言ふた言葉であるが『恰も蔗を食ふて稍や佳境に入るが如し』蔗といふのは砂糖
 の木で、臺灣邊では之れが大なる物産であるが、蔑に似たやうなもので、一寸口に入れた所で、何ん
 の味もないが、それを噛み締め／＼して往く内に、次第に甘い汁が出て来る。一則の公案を授けられ

た時にも、又然うであります。宛るで鐵饅頭でも口に頬張らせられたやうなもの、熱したる鐵丸を
 咽喉に押し込められたやうなもので、吐くことも吞むことも能きず、實に苦しい。苦しいが、それが
 明かに爲つて、頭の頂邊から、足の爪先まで、全身公案三昧と爲り切つたならば、それから當人が段
 々と蔗を噛んで稍佳境に入つて行くやうに爲るのであります。其處までの勇氣が乏しく、意思の力が
 強くないから、其處まで至らぬで、抛り投げて了ふ輩があります。然ういふ輩は、禪宗の公案は、一
 種の寓言であるとか、然ういふものを授けて、人を苦しましむるものであるとか、そんな莫迦氣の評
 を下してゐる者があります。併し抱道の學士ならば、恰も蔗を噛んで、稍佳境に入るが如くである。
 『何んとなれば則ち不見の見、彰焉れより大なるは莫し』凡そ物の見はれと言ふても、彰はさずして
 そして見はれた位、彰はれの大きいものはない。前に説いた通りの有様が、見はさずして彰はれる
 のであります。見はして彰はすならば、丁度人間が假裝して、種々時代劇、近代劇の芝居をするやう
 なもので、それは見はして彰はすのだが、此天地自然の彰はれといふものは、見はさずして彰はれて
 ゐる。これ位大なる彰はれはない。此處で一つの例を引いて見ると『碧巖錄』中の雪峰が、衆に示さ
 れた一則に、

『盡大地撮し來るに、粟米粒の大きいさの如し』

此盡くの大を摘んだ所が、指二本で、粟粒を摘んだやうなものだとある。そんなことは假設的の

ことである、一種の寓言であらうなどといふであらうが、決して然うでない。然ういふのは素人が言葉に付いて廻つた見方で、「面前に抛向す漆桶不會」目の前に差し付けてあるが、眞黒であるから素人目では見えまい「鼓を打ちて普請して看よ」それが分らぬならば、鐘太鼓で探し廻つて見よ。禪宗では労働をするとか、掃除をするとかいふことは、日常行住の重なる意味を現はしてゐる。其時は老僧も小僧も、十人居れば十人、百人居れば百人、我れも彼れも出て労働する。普請といふ意味は、然ういふことで、それが世間の言葉と爲つて、一寸工事でも起し、造作でもする時には、普請するといふが、普ねく請するといふ意味から、其文字が出てゐる。鼓を打ちて普請して看よ、それは雪峰和尚の垂示であります。面前に抛り出してゐる。其處は人々の活眼で看破らなければならぬ。それが分つたならば、見はさずして彰はれるといふことが、すつかり證據立てられるだらう。「不動の動、變焉れよ大なるは莫し」不動の動といふことを、實地に證據立てやうとして、白隠和尚などが言はれたことがあります。一寸擧げて見ると「走る船を止める」といふ公案があります。今ならば太平洋を全速力で走つてゐる船を、此處で止めて見る。然ういふことを假りに設けたのであらうと言ふが、決して假りではない。そんなことが假りで堪るものでない。分らぬから、當然の言葉でないが如く思ふてゐる。「川向ふの喧嘩を、何う止めたものであらう」といふのも同じで、それが分つたならば、動かすして動くといふことが分るであらう。例へば遠い山寺で、ゴーンと鳴る鐘を何う止めるか、恚ういふ所を

段々經て行かなければ、天と心と一如とか、物と我れと不二といふことは、口でこそ言ふても、境界は分つて居らぬ、これが行けたならば、變焉れより大なるは莫しであります。「無爲の爲、成焉れより大なるは莫し」爲すこと無くして成るといふ。大抵人間のしてゐることは、多くは爲すこと有つて成るといふことが多いが、此天地自然の働きといふものは、無爲の爲めで、それを實地に證明すると、種々調べ方がある。例へば傳大士法身の偈といふがある。法を以て我が身として見はす、其意味で法身といふ。其法身の意味を見はした五言絶句の偈頌があります。

空手把鋤頭、步行騎水牛、
人自橋上過、橋流水不流、

白地に言ふたならば、手無くして鋤頭を把り、步行して水牛に騎り、其處へ出て來た人が橋の上を通り過ぎたが、橋が流れて水は流れず、吾々が一寸見た所とは大分違ふ、橋は滔々と瀬を切つて流れてゐる。水は一寸も流れぬ、恚ういふ境界を知らぬと、此言葉の爲めに迷はされ、薩張珍粉漢で、猫に小判で分るまいが、若し禪といふ意味を得たならば、此位のこととは一番初歩で、朝の間のお茶の子であります。此偈頌一つでも、吾が手に入つたならば、此處等の言葉が一目瞭然として分るであらうと思ふ。それが無爲の爲で、爲すことなくして、成るのは焉れより大なるはない。「豈に是れ識心見性無上妙覺の道にあらずして何んぞや」これは即ち一寸前に言ふた如く、張天覺の「護法論」にも出し

てある識心、佛法は心法を説いたもので、神や佛と初めから分けてない。一切心から割り出すものであります。そして見性の性といふことを説いたり、分つたりする者は澤山あるけれども、性を見るといふことは、吾が宗門獨特のことであります。故に達磨大士でも、六祖大師でも然うであるが、性を知る者は多し、性を見る者は稀なり、千聞一見に如かず、何程理窟をいふて見ても駄目であります。實見するが宜しい。外のものは實見が能きながら、心は無形のものだから、實見が能きぬといふのは、素人のことで、明かに實見が能き。無上妙覺、悟りの道も、種々澤山あらうけれども、此我が大乘佛教、就中此教外別傳不立文字の禪の本領といふものは外ではない、眞の無上妙覺であるが、不見の見、不動の動、無爲の爲といふものが、眞に手に入つたならば、識心と見性と無上妙覺の道にあらずして何んぞや、無上妙覺を明らかにすることが能き。『大凡そ明眼者の視聽に於ける、之れを視るに眼を以てせず、之れを聽くに耳を以てせず』大抵世間的に何事を研究するのも、五官といふものが標準で、例へば天文学を調べるにしても、地理學を調べるにしても、五官といふものを標準として、見たとか聞いたとか、知つたとか言ふてゐるのであります。畢竟標準は目だとか、耳だとか、そんなことを當てにしてゐるけれども、此廣大なる宇宙間の眞理といふものが、五官で以て明らかめ盡されるものでない。然るに科學者などは、五官以上といふものは、到底吾々が思ひ至らぬことであると言ふて抛つて了つてゐる。目を離れて見ることが能きぬ、耳を離れて聞くことが能きぬ、今の學問が如何程

進んだといふても、それ位なものである。所が明眼者は、人間の五官の範圍内に囚はれて居ない。吾々は一とたび五官の上に出て見なければならぬ。其無限絶對を見やうといふのには、目に囚はれたり、耳に囚はれたり、鼻に囚はれたり、舌に囚はれて居つては、到底得られるものでない。無字といふも隻手といふも、其處から見て來なければならぬ。所が若し眞の心の眼を以て見る者は、眼に重きを置かない、眞の心の耳を以て聞く者は、耳に重きを置かない。心で見、心で聞くのであります、例へば塙保己一などが然うであります。盲人であつて、日本の學問の爲めには、實に空前絶後の人で『群書類從』三千卷を編纂したといふ實に驚くべき人でありませぬ。彼の人の傳記を讀むと、あの位精力絶倫で、あの位志が立つて居れば、何事でも能きないことはない。或る時多勢を集めて講釋してゐると、折から夏の夜であつたから、障子を明け放してあつたが、不意と風が吹いて來て、燭臺の火が消えた。聽講者が

「風で燭臺の火が消えて、一同書籍を見ることが能きぬから、火を點けるまで、一寸講釋を御熄め下さい。」

といふと、保己一は笑つて

「さてく目明きといふものは、不自由なものでござるな」といふたと。併し之れは獨り塙檢校には限りませぬ。道の妙を得た者は、皆然うであります。耳で聞

いたとか、目で見たとかいふのは、ズツと末のことで、古人は恚ういふやうなことも言ふてゐます。「荷も禪を一つ工夫しやうといふ者は、耳で見、目で聽けよ。五官に囚はれないで、耳で見、目で聽くといふ態度で、道に入れよ。」と説いてゐます。

耳に見て目に聽くならば疑はじ
おのづからなる軒の玉水

といふて、大燈國師の詠ぜられたと傳へられてゐる和歌もあります。此處に至れば最う透視とか、千里眼とか、そんなものは何んでもありません。恚ういふ有様であるから「眼に應ずる時は、千日竝び照らす若く、耳に應ずる時は、幽谷の鈴符の若し」此意味に於て、目を使ふ時に於ては、千日も竝び照らすやうである。一つの太陽でも、斯くの如きものであるのに、千の太陽が竝び照らすやうな有様、恚ういふ意味で、耳を使ふたならば、深い谷間に往つて、オイーといふと同時に、オイーと答へる、俗にいふ山彦で、洵に明かなことである。「萬形千聲一も逃るゝに所無し」斯くの如き有様である、と、どんな姿が現はれて來ても、どんな聲が其處へ響いても、逃れつこはない。丁度明鏡の像に對したやうな有様、響の聲に應ずるやうな有様であります。例へば聲法師の書かれた「寶藏論」の中に、恚ういふ語があります。

「玄道は絶域にあり、故に不得以て之れを得、妙智は物外に存す。故に不知以て之れを知る。大象は無形に隱る。故に不見以て之れを見る。大音は希聲に匿くる。故に不聞以て之れを聞く、唯信入の時自然に洞鑒す。」

恚ういふやうな言葉は、洵に味はふべきであります。儒者で禪的學理を説くに彼の王陽明の如きは、「學者時々刻々常に其觀ざる所を觀、常に其聞かざる所を聞き、工夫方に箇の實落の處有り、久々に成熟の後、則ち力を著くることを須ゐず、防檢することを俟たずして、而かも眞性自から息まず豈に外に在る者の聞見を以て累と爲さんや。」

と言ふてゐますが、吾が禪門の趣意と餘程近い。「大に迷者の視聽に異れり」凡夫の見たところとは大分違ひます。「故に曰く、遠きの近きを知り、風の自るを知り、微の顯はるゝを知れば、與に徳に入る可し」これは「中庸」の二十三章に出て居る。遠きの近きを知り、風の自るを知るといふのは、

「公案の雨何れの所より來り、風何んの色を爲す」

といふ調べが透過できれば、直ちに吾が物に爲ります。又微の顯かなるを知る。これも

「毛端、巨海を呑み、芥子に須彌を納る」

といふ語を透得し得て、それが分つたならば、與に徳に入ることができます。此に至りて眞に道徳の根本が分るであります。「世の聰明なる者只淺近の處を會して、幽遠の理を辨ぜず」世間の賢い輩は

只淺く近い所のことは分つてゐるが、目で聞き、耳で見るといふやうな幽遠の道理を辨じない。只五官内で理窟をいふてゐます。然ういふ輩は『若し山野の説を聞かば、恐らくは嘲笑して之れを信ぜざらん』此洪川の言ふ所を聞かば、恐らく嘲つて信ぜぬであらう。例へば夏蟬は雪や氷を知らぬと同じであります。凡夫に今の話を聞かせても信ぜぬ。それは境界が違ひ、智識が違ふからであります。『澆季大道の明かならざる職として此に之れ由る』世が末に爲つて、大道が明かならぬのは、心の眼が開けぬからである。『孔子云はずや、道の明かならざるや、我れ之れを知れり。賢者は之れに過ぐ、不肖者は及ばざるなり。』賢者は之れに過ぐで、賢い輩は餘り行き過ぎて了ふ。不肖者は何うしても届かない。帯に短し褌に長しといふ言葉があるが、人間も聰明なもの、耳目の上に遂囚はれて了ふ。不肖者といふ類は、本當に道を明にすることができない。修業の上でも然うで、どちらかといふと伶俐な輩は、一寸善いやうな風であるが、小成に安んずる。中途で根氣を折つて了ふ。愚鈍な輩は、逆も自分には、然ういふことはできぬと、自ら逡巡する傾きがあるが、併し何うかすると、然ういふ者に、眞の大意志力の強い輩がある。大器は晩成で、愚鈍の方が、道の上には良い位で、頗る遅い頗る遅いけれども、遂には行り上げる者があります。『人飲食せざる莫し、能く味を知る鮮し』御馳走なども然うであります。西洋料理や、支那料理を御馳走しても、其味を知らぬ者には、良い味か、悪るい味か分らぬ。日本料理でも同じであつて、田舎者に本當の甘い物を食はせても、只其盛りやう

が不足らしいやうにのみ思つて、其味を知らない。人は飲食せざる者はないが、眞に其味を知る者は尠い。恚ういふことを孔子も言はれたが『知言なる哉』此味を本當に知る者は稀である。

盡心 第十二則

孟軻曰。盡其心者。知其性也。知其性則知天矣。

曰天。曰佛。曰道。曰性。曰明德。曰菩提。曰至誠。曰真如。一實多名。其爲物也。先天地生。亘古今常現在。論其體。則妙有真空圓明寂淨廣大不可思議者也。古之爲人主者。得之以治身。其緒餘土苴以治天下國家。故無不得之之聖哲。無不得之之佛祖。易曰。仁者得之謂之仁。智者得之謂之智。是已。蓋聖哲之揚化。或於中國。或於西竺。或於日東。各雖方殊言異。其得諸心之實一而已。孟軻深知其實。而故區別曰性曰天。亦甚好。只恨不曰見其性。蛇出頭寸。自知其長短。山野尋常云。知性者多。見性者少。知性則不過知天。見性則得天。皮下有血底。莫等閑看予語哉。

(訓讀) 孟軻曰く、其心を盡す者は、其性を知る也。其性を知れば則ち天を知る。

天と曰ひ、佛と曰ひ、道と曰ひ、性と曰ひ、明德と曰ひ、菩提と曰ひ、至誠と曰ひ、真如と曰ひ一實多名なり。其物たるや天地に先ちて生じ、古今に亘りて常に現在す。其體を論ずれば、則ち妙有真空、圓明寂淨、廣大にして思議すべからざる者也。古の人主たる者、之れを得て以て身を治む、其緒餘土苴、以て天下國家を治む。故に之れを得ざるの聖哲無く、之れを得ざるの佛祖無し。易に曰く、仁者は之れを得て之れを仁と謂ひ、智者は之れを得て之れを智と謂ふ、是れのみ。蓋し聖哲の化を揚ぐる、或は中國に於てし、或は西竺に於てし、或は日東に於てす。各方殊に言異ると雖も、其諸れ心を得るの實は一のみ。孟軻深く其實を知る、故に區別して性と曰ひ、天と曰ふ。亦甚だ好し。只恨むらくは、其性を見ると曰はざるを。蛇頭を出すこと寸にして、自ら其長短を知る山野尋常に云ふ、性を知る者は多く、性を見る者は少し。性を知れば則ち天を知るに過ぎず、性を見れば則ち天を得。皮下血有る底、等閑に予が語を看る莫からん哉。

究め盡すの意味

本則は「孟子」の盡心の篇に出てゐる所の一則で、「其心を盡す者は其性を知るなり、其性を知れば則ち天を知る」さて其心といふことではありますが、吾が佛教に於ては、此心といふことから始まつ

て、そして佛が一代の説法をせられたのであります。故に心といふことを調べられたことは、教相學上殆んど盡言してゐるといふ有様であります。又世間に於ても、今日は心理學上の學問といふものも大變開けて來てゐるが、何分心といふものを只心理學的に知つたといふだけでは、未だ吾が宗門などの上で言ふと、それで満足することができない。吾が禪宗では、直指人心見性成佛と云ふて直ちに人心を指して見性成佛せしむるといふてあるから、此評の中にも、先師が性を見るといふことに至らなくては、本當の心の妙が味はうことができぬと言はれてゐます。それは暫く措いて、今孟子の言葉だけを言ふならば、其心を盡す者は、其性を知ると、此處に盡すといふ字がありますが、若しそれに最う一字加へるならば、究め盡すといふ意味で、今までも心のことは、大分説いたから、此處では餘り執拗く説かぬが、兎に角心の全體、或は本體、總て心の全體を究め盡した時に於ては、始めて其性を知り得ることが能きる。畢竟心といふ字と、性といふ字と、どちらも心であるけれども、若し強いて分つて言ふならば、心といふ字は、吾々が五官の機能上からして及ぶ所のものであります。そして性といふ方は、本然の性を指してゐます。心といふ時には、言はゞ心の末、性と言ふ時には、言はゞ心の本を指して言ふ。勿論假りであるが、假りに分けて置いても可い。それで吾々が心の全體といふものを究め盡したならば、性を知ることが能きる。若し吾々が本然の性といふものを知り得たならば、其時初めて天といふものを知り得ることが能きやう。それ故に同じ儒者の中に於ても、天命之

を性と謂ふ。恁ういふことがあります。性に率ふ之れを道と謂ふ。道を修むる之れを教といふといふやうな言葉が、矢張孟子の言ふた所に、聯帶してゐる言葉であります。兎も角心を盡すといふことはこれは只一時的に考へただけでは盡すといふ譯には往かぬ。何うしても實地の上に於て、此心の如何に盡すかといふ着實の工夫に取りかゝらねばならぬ。其點に至ると、吾が禪宗の如きは、直指人心といふて、佛の心を其儘に、吾々が傳へるといふことを以て、宗旨を立てゝあるから、如何にして心を盡すかといふことに至ると、餘程深く其道は開かれてある。苟も斯道に入つた人々ならば、大いに其點を肯ふことが能きませう。

撥草參玄

心に就いては、古人が種々示してゐますけれども、今此處に思ひ浮んだ一例を挙げると、禪宗に『兜率の三關』といふことがあります。それは兜率の悅和尚の設けた三つの關門で、之れは吾が宗門でも最も大切の調べとしてあります。何を三關といふかと云へば、

『撥草參玄は只見性を圖る』

撥草參玄といふことは、禪宗の修行者が、あちらこちらと行脚して、道を尋ね廻はることで、それは要するに見性を圖るのであります。即今上人の性甚れの處にあるか、此心の有様を如何に只學問的に

滔々として説明しても、教相學風にそれを解釋して見ても、これは只火は熱い、水は冷めたいといふことを、口を究めて言ふと同じである。火と言ふても、未だ嘗て口を焼却せずだ。又御馳走の獻立を並べると同じやうで、少しも腹はふくれない。何うしても其者の所在を知らなければならぬ。果して然らば、即今上人の性甚れの處に在る、上人といふものは、例へば法然上人とか、親鸞上人とかいふやうな工合で、總て僧を尊稱したので、即今お前さんの本性は、何處にあるといふことであります。これは何程講釋しても届かぬ、それを實際に見せしむる。吾が掌を指すが如くに見せしめた所の法、之れが第一關であります。第二關に至りては、

「自性を識得すれば方に生死を脱す」

で、自分の本性を識り得たならば、即ち生死を脱す、生れたり死んだり、換言すれば迷ひの境を透脱し、藻抜けて了ふことが能きながら、それでは眼光落地の時作麼生か脱せん、眼光落地とは、眼の光りが地に落ちる。平たく言はゞ、今や死の土壇場に臨んで、湯水も通らない。何んとしてもそれを救ふことの能きないといふ實際に於て、如何に生死の境を脱得し、飛び越えるかといふことが、第二の關門であります。第三關は、

「生死を脱得すれば、便ち去處を知る」

生れたり死んだりの其境を、自由に藻抜け得たならば、去る所を知る。今此處に居るが、これから何

處に往くかといふことを、明かに知り得る。四大分離して甚れの處に向つてかまざる、四大といふことは、これまで度々説いた通り、地水火風といふことで、畢竟此身は地水火風の四大の假和合に依りて出来てゐるといふのが佛説であります。去れば四大分離といへば、即ち此肉體が分離した、一言にして言へば、死んで了つたことで、四大分離して何れの處に向つて去る、何處へ向つて行くか、之れを明かに知り得なければならぬ。又知り得られる。之れを兜率和尚の三關と稱する。恁ういふことを自己の骨折に依りて、實際に味はねば、心を盡すといふても、性を知らるといふても、只噂に止まるのみである。然ういふものだらう、恁うだらう位では、逆も親しく水を飲んで、冷暖自知する境界は得られない。其點に至りては、毎も能く引合に出る言葉であるが、彼の王陽明の言ふた

「道は方體なし、執着すべからず、却つて文義の上に拘滯して、道を求めば遠し、如今、人只天を説く、其實何んぞ嘗て天を見ん。日月風雷即ち天と謂ふ不可なり。人物草木是れ天ならずといふも亦不可なり。道即ち是れ天、若し識得する時は、何くに適くとしてか道に非ざらん。古に亘り、今に亘り、始め無く終り無し、更に何んの道異かあらん。心即ち道、道即ち天、心を知る時は、即ち道を知り、天を知る云々」

は、禪の立場から見ても、餘程適切な語でありませう。其他經文や、祖師方の説には至る所に教へてあります。例へば「大般若經」の中の言葉を引いて見ると、

「若し菩薩、見性を知れば即ち是れ菩提、而して能く大菩薩心を發起する是れを菩薩と名づく」
 恚ういふやうな言葉が、至る所にあります。一々此處に列擧するまでもない。畢竟天といふものが、
 儒者の方でいふと、之れが宗教の根本に爲つてゐる。天命といひ、又は上帝と指してゐるのは、畢竟
 吾々が人間以上の一つの本領それを指して天と言ふ。

「天と曰ひ、佛と曰ひ、道と曰ひ、性と曰ひ、明德と曰ひ、菩提と曰ひ、至誠と曰ひ、眞如と曰ひ」
 と種々並べられた。儒教の方では、天と曰ふ、佛教の方では佛と曰ひ、又は道と曰ひ、性と曰ひ、明
 徳と曰ひ、菩提と曰ひ、至誠と曰ひ、眞如と曰ふ。これは佛家の名前と儒教の名前とを列擧したので
 あります。或は又即心即佛、非心非佛、阿字不生の日輪、根本無作の戒體なども言ひ、或は明德と
 も、未發の中とも言ふてゐます。或は老子の言葉だと、恬淡虚無、或は無爲自然などもいふてゐま
 す。然ういふことを並べると、限りもない程ありますが、併し天を知るといふ點から言ふたならば一
 である。未だ其心を盡さず、未だ其本性を知らざる時は、天は天、佛は佛、道は道、性は性、一々別
 だ。知る時に於いては、大道一に歸する。恚ういふやうに種々に言ひ現はすけれども「一實多名なり」
 名は夥多あるが、其實は一つだ。今日では理想といふ名も付けてゐます。或は實在とか、實我とかい
 ふ名も付けてゐるが、皆一つであります。「其物たるや、天地に先ちて生じ、古今に亘りて常に現在す」
 とところで其物たるや、どんな物かといふに、其物たるや、天地に先だつて生じた。何時此物が生れ出

て、何時何處で無くなるといふ譯のものではない。又同じ宗教でも、或る宗教に依りては、有始有終
 と言ふたり、無始無終と言ふたり、或は神と人と物との三段に分けたりしてゐるやうな、宗旨もある
 が、今此儒教若しくは佛教の立場から言ふと、神でも人も總てのものは皆一つだ。其一とは何物を
 指してゐるかといふと、天地に先だちて生れてゐる。此物である。未だ天地と分れぬ以前の消息であ
 るから、これは始まりがないので、古今に亘つて常に現在する。往昔の往昔の大昔から、末の末まで
 を一以て貫いてゐる。始めもなければ、終りもなく、そして毎も現在してゐる。「其體を論すれば、則
 ち妙有眞空」これも只文字だけを見れば、妙に有るとか、眞空なりとも思ふだけではありませんが、然う
 ではありませぬ。同じ有と言ふても、無に對する有ではない。それが爲めに妙の字を、之れに加へた。
 空と言ふても、何も無い洞穴のやうな空ではないから、眞の字が付つてあります。有が即ち無であ
 るから妙有、無が即ち有なりといふ時に眞空といふので、妙それ自身が有である。眞實自身が空だ。
 妙有眞空である。幾ら繰り返して見ても、何うしても親參實證して、我が心を見破つて見なければ分
 らぬ。「圓明寂淨、廣大にして思議すべからざる者也」缺けることがないから圓であります。暗いこと
 がないか明かであります。日月は明かだが、時あつて晝夜といふものが分れる。けれども此物は常に
 暗いことはない。そして寂かにして淨し、廣大にして不可思議である。到底吾々が意思の作用で以て
 それを盡すといふことは却々難かしい。此に至りては最早不可思議とか、不可得とか、然ういふより

仕様がなない。古の人主たる者、之れを得て、以て身を治む。此一物を得て、始めて能く身を治め得る。そして「其緒餘土直、以て天下國家を治む」これは「莊子」の中にある語で、其緒餘以て國家を治め其土直以て天下を治むといふ、其處から來た言葉であります。土直といふのは、糟粕或は土芥といふ程の意味で、往昔の人主たる人は、之れを得て身を治めた。堯舜禹湯文武皆然りである。そして其餘りものを以て、天下國家を治めたといふに過ぎない。故に之れを得ざるの聖哲無く、之れを得ざるの佛祖無し。堯舜禹湯といふ聖哲で、之れを得ざる所の聖哲はない。又三世の諸佛、歴代の祖師一人として、之れを得ざるの佛祖はない。之れを得て始めて聖哲たり、之れを得て始めて佛祖たるに至つたのである。「易に曰く、仁者は之れを得て之れを仁と謂ひ、智者は之れを得て之れを智と謂ふ」仁者が之れを得れば、仁と呼んでも差支ない。智者が之れを得れば、智と呼んでも差支ない。何故なれば元來一つ所のもの「是れのみ」である。蓋し聖哲の化を揚ぐる、或は中國に於てし、或は西竺に於てし、或は日東に於てす。恚うふいことを往昔は論じてゐる。佛が天竺に生れ出で、教法を説いたといふのは、即ち全世界の中心を選んで、其處に現はれたのであると、種々論じてゐる書物があるが、併し現今から見れば、餘り然ういふことは重きを置かぬでも宜しい。兎に角聖哲の教化を揚げられた者が、或は中國即ち支那に於てし、或は西竺即ち印度に於てし、或は日東即ち日本に於てした。「各殊に言異ると雖も」其出處が違ふてゐるに随つて、其唱へ方も異つてゐる。同じ佛教でも、日本言葉

に爲つて居るのもあり、支那言葉に爲つて居るのもあり、印度語に爲つて居るのもある。種々違つてゐるけれども「其諸れ心に得るの實は一のみ」である。此處の意味を頗る通俗的に現はしてゐるのは例へば一つの酢甕の廻はりに、釋迦と、孔子と、老子の三人が集つてゐて、其甕の中の酢を嘗めて、皆酸っぱいやうな顔付をしてゐる繪畫が描かれてあります。それはものに譬へて描いたものであるが畢竟それに異ならぬ。「孟軻深く其實を知る。故に區別して性と曰ひ、天と曰ふ、亦甚だ好し」孟子が其實を知るが故に、性と曰ひ、天と分けた。畢竟性と天と一つだが、殊更に性と天を分けた。而して人に名を與へる時は性と曰ひ、人以上に名を與へる時には、天といふやうに區別して、名を付けたのは甚だ面白い。「只恨むらくは、其性を見ると曰はざるを」只遺憾なのは、其性を見るといはなかつたことである。我が大乘佛敎、就中此佛心宗といふ禪などの立場から見ると、最う一と息痒い所に手の届かぬやうな心持がする。吾々なれば性を見ると明かに言ひたかつた。「蛇頭を出すこと寸にして自ら其長短を知る」蛇が穴から頭を出しかけてゐても、其蛇は何尺程あるといふことを知り得る。百聞一見に如かず、頭だけを見ても、蛇の全體を知る。如何に性と曰ひ、天と曰ふて理窟を並べて見ても、百聞は一見に如かずといふやうな譯で、「山野尋常に云ふ」此洪川は口癖のやうに、人に向つて言ふてゐる。「性を知る者は多く、性を見る者は少し」生理上のことを能く知つてゐる人は多い。殊に今日の如く精神科學的のことが開けて來れば、誰れでも性のことは知つてゐるが、性を見る者は少い。大抵

は此身體は、形而下のものであるが、心といふものは、形而上のものであるといふやうなことを言ふて、心といふものは、目で見ることができぬ、耳で聞くこともできぬと言ふのが世の常だが、獨り吾が禪門にありては然うでない。直ちに心を見せしむる。それが爲め的手段として、隻手に何んの聲ありやとか、或は父母未生已前本來の面目といふ工合に、直ちに心を見せしむるのであります。それならば知ると見るとは、どれ程の間があるかと言へば「性を知れば則ち天を知るに過ぎず」心を知るといふことだけならば、漸く天の道理を知るだけである。然るに一方は何うかと言ふと「性を見れば則ち天を得」我が心の本體を徹見したならば、天を知るところではない。天を得る、大抵の者は、我れ以外のものと思ふてゐるかも知れぬが、若し性を見たならば、其廣大無邊なる天を、我が物にすることができる。此處が大いに着眼すべき所で「皮下血有る底、等閑に予が語を看る莫からん哉」血のない動物は仕様がな。切つても血の出ぬ者は死人だが、苟も活きた所の精神を有つてゐるやうな輩ならば、此洪川の言ふたことを、等閑に見過してくるなよ。其心して看分けて貰はねばならぬといふのであります。

曲 肱 第十三則

孔子曰。飯_レ疏_レ食_レ飲_レ水。曲_レ肱_レ而_レ枕_レ之。樂_レ亦_レ在_レ其中_レ矣。

夫人之處_レ世。莫_レ急_レ於_レ飲食。又莫_レ樂_レ於_レ飲食。而聖哲之於_レ樂_レ道。有_レ甚_レ焉。子曰。君子謀_レ道不_レ謀_レ食。又曰。吾爲_レ人也。發_レ憤忘_レ食。樂_レ以_レ忘_レ憂。不_レ知_レ老之將_レ至。又曰。回也。一簞食。一瓢飲。在_レ陋巷。人不_レ勝_レ其憂。回也。不_レ改_レ其樂。賢哉回。看是皆不_レ急_レ人之所_レ急。不_レ樂_レ人之所_レ樂也。畢竟其所_レ急且樂。何爲物哉。亦甚奇怪矣。蓋賢不肖之分界。全在_レ于此。宋周惇頤平日舉_レ示_レ此章。教_レ學者看_レ孔顏之所_レ樂何事。真是痛切矣。學者若知_レ其所_レ樂之一事。則侯鯖之珍味亦不_レ如焉。至此始可_レ與_レ談_レ道已。吾庫厨空乏甚枯淡。亦只以_レ彼一事之可_レ樂者充_レ本食。呵呵。

(訓讀) 孔子曰く、疏食を飯ひ水を飲み、肱を曲げて之れを枕す、樂み亦其中に在り。

夫れ人の世に處する、飲食より急なるは莫く、又飲食より樂きは莫し。而して聖哲の道を樂むに於て、焉れより甚しき有り。子曰く、君子は道を謀つて食を謀らず、又曰く、吾が人と爲りや、憤りを發して食を忘れ、樂み以て憂ひを忘れ、老の將に至らんとするを知らず。又曰く、回や、一簞の食一瓢の飲、陋巷に在り、人其憂ひに勝へず。回や、其樂みを改めず、賢なる哉回やと。看よ是れ皆人の急とする所を急とせず、人の樂む所を樂まざるなり。畢竟其急且つ樂む所は、何爲れの物ぞや。亦甚だ奇怪なり。蓋し賢不肖の分界、全く此に在り。宋の周惇頤平日此章を擧示して、學者をして孔顔の樂む所は何事と看せしむ。眞に是れ痛切なり。學者若し其樂む所の一事を知らば、則ち侯鯖の珍味亦如かず。此に至りて始めて與に道を談す可きのみ。吾が庫厨空乏にして甚だ枯淡、亦只彼の一事の樂む可き者を以て本食に充つ、呵々。

禪 的 生 活

第十三則は「曲肱」といふ一則で、抑も此三十則なるものは、我が禪門の公案として、經書の中から、先師洪川和尚が引き出して來たもので、故にこれを説明し、それを讀んだといふだけでは、事は終つて居りませぬ。それ以上は自分自身の念頭に、之れを提擧して、親しく工夫一番して、始めて當人の力を得ることが能きるのであります。さて本則は「論語」の述而篇に出てゐる、

「子曰く、疏食を飯ひ水を飲み、肱を曲げて之れを枕す、樂み亦其中に在り矣」

で、本文は洵に簡潔、言葉は洵に平易でありまして、敢て字句の講釋をする必要はありません。凡そ吾々人間としては、一つの樂みといふものが、何れの邊になくなってあらうと思ふ。誰れしも樂みといふことに目を着けて居るでありませう。けれども只其樂みの方面が少し違ふ。種々に言ふことが能きやうけれども、普通に言ふならば、只物質的の樂みに満足するか、將たそれでは満足が能きないで、精神上に一つの満足を得るか、只それだけであらうと思ふ。ところが此世の中は、大なり小なり、今日まで經驗して、能く分つて來てゐる通り、人間は何うしても物質だけでは、満足が能きません。今は精神生活と唱へてゐる人もあるし、或は簡易生活とか、理想生活とか言ふてゐるけれども、單に精神的生活といふて、物質的を離れた精神的生活といふものがあります。要するに人間は物質的の樂しみを得たゞけでは、満足しませぬ。まだそれ以上に精神上的の樂しみがあります。其樂しみを樂しむといふのが、人として立派な品性のある人といふて可いと思ひます。此本文を只字面通りに拘泥して言ふならば、世の中は何時でも貧乏してゐれば可い。只貧しきに安んじて居れば可いといふやうに誤解すると、殆んど人生に進歩もなければ、變化もなければ、發達もなければ、何んの向上する所もなく、只行き止りに爲つて了ふ。だから恚ういふことは、皮相上から何んとも言ふことは能きぬ。皆當人自身の精神上に、親しく工夫一番して、始めて其味はひを見出すものであらう。兎に角

樂しみといふことに就いては、大抵世間の物質的の樂しみといふものは、多くは五官以内の樂しみで目を喜ばしむる、或は耳を喜ばしむる、或は鼻なり、口なり此四肢五體なり、肉體の満足を得るといふことが、これが凡俗の樂しみであります。併し其満足を得たら、それで充分安心することが能きるかといへば、物質的の樂しみには限りがある。又樂しみを得ざる内は、樂しみを得たいと思ふが、既に得て了ふと、物質の樂しみは、何んだかまだ足りないものが出来て来る。世界の大勢が既に然ういふやうな有様で、物質の最も發達した國々、又物質に最も富んでゐるやうな人々でも、それに満足せずして、他の精神上の方面に、何等か無限の樂しみを得やうとしてゐる趣が、一般大勢の上に現はれてゐます。さて然ういふやうなことに就いて、廣く古人の實際に行ふてゐたのを考へて見ると、種々ありますが、其一を擧げると、往昔支那の宋の國に、子罕といふ人があつて、或る人が此子罕に、頗る結構な玉を進上しやうと言ふて來ました。すると子罕はそれを退けて、受けることが能きないと言ふた。其處で其人と言ふには

『私は折角貴方に進上しやうと思ふのに、受けられぬと言はるゝのは、此玉に何か缺點でもあるのか。若し然うならば、玉造りに見せて、調べさせても宜しいが、此玉は最も優秀なるものと鑑定が附いて、態々貴方に差上げたいと持つて來ましたが、何うしても受けて下さらぬか。』

と。すると子罕は

『吾れは食らざるを賣とす。今私に下さらうといふ玉は、世の中の寶であらうが、吾れに於ては、それは寶でない。吾れは食らざる精神を以て寶としてゐる。玉のやうな寶は、他の人に與へたが可からう』

と答へて、玉を受けなかつたといふ話があります。恚ういふ類例を擧げると、古今東西に幾らもあらうと思ひますが、併し現代に然うした人は、却々稀であらうと思ふ。何んでも自分の目指すところは自分の名と富とに違ひない、富さへあれば、如何なることでも容易に得られる。殆んど黄金萬能といふやうな有様に傾いてゐるから、宋の子罕のやうな人は、滅多に得ることは能きぬ。元來人間といふものは、樂しみを得なければ、承知が能きないやうに出来てゐる。良い衣服を着たい、美味しいものを喰ひたい、美しい家に住みたい、甚しきは金錢を得るを以て樂しみとして、其金錢の多いのを樂しみとする人もある。故に人々其學問、經驗、品性に依りて、其樂しむところが違ひます。池大雅といふ有名な畫家は、其畫の勝れてゐたことは、古來天下の公評であります。併し納は其畫よりも、寧ろ其人物が勝れてゐたと思ふ。妻を玉蘭といふたが、これは京都祇園のお百合茶屋の娘で、蝶よ花よと育てられた者だが、池大雅の許に嫁して妻と爲りました。大雅の住宅は、京都の眞葛ヶ原といふ所にあつて、僅に膝を容るゝに足る四疊半位の手狭な家でありました。疊は破れて足が引ツかゝる程であつたし、戸障子も破れて、風が吹き込む有様であつたが、それでも一向不自由を感じなかつた。春の日

永などに、大雅が繪を描いて退屈すると、三味線を取り出して弾き、鑄た聲で歌を唄ふと、妻の王蘭は、琴を出して合奏する有様で、洵に夫婦相和樂して、殆んど貧の身にあるを知らず、不自由が眼の前に迫つてゐるのも打ち忘れて、笑ひ興じて暮すことが多かつたといふことであります。精神生活の楽しみは、斯る處にあるのであります。勿論物質的文明といはるゝ彼の泰西にも、亦然ういふ人があつたやうであります。人間は如何なる業務に就き、如何なる境遇に居つても、然ういふ一頭地を抽んでた樂み、換言すれば胸中の一つの閑日月がなくてはならぬ。只飽くまで食ひ、飽くまで着て、寝たり起きたりして、人生五十年を醉生夢死で通つたのでは、此世の中に何んの使命を受けて生れて來たのか、人生の意義といふものが分らぬことに爲ります。されば現今では、西洋の學者も、精神生活といふやうなことを、頻りと唱へてゐます。併しながら精神生活といふことは、何も新にオイケンが唱へ出した譯でもなからう。昔からある主義らしいが、東洋にありては、之れを禪的生活といふても可い。其處で精神生活といふても、此物質とか、現實とかいふことを、全然破壊して、別に精神生活があるといふ譯ではない。此凡俗の世界に住みながら、自分の理想とする所に依つて、物質を理想化する。物質を悉く精神化する、其深きに至れば、純然たる一個の宗教の信念上よりして、人々各自に然ういふ世界を發見せねばならぬ。否な寧ろ建設せねばならぬ。此點よりして孔子の言はれたことを、工夫一番して見たら、大いに面白いことでありませう。「疏食を飯ひ水を飲み」大抵野蠻時代は、恠ういふ

ものであります。尤も今でも、開けぬところは恠うであります。納は嘗て臺灣に往き、生蕃の生活振りを見ましたが、恰も恠ういふ有様で、生菜、生大根を食ふて、谷の水を飲んでゐます。簡易といへばこれ程簡易なことではない。幼稚といへばこれ程幼稚なことではない。疏食を飯ひ、水を飲む、然うした不自由な生活をして、而かも立派な邸宅に身を置く譯ではなく、亦結構な褥の上に寝る譯でもなく朝から晩まで眞黒に爲つて働き、疲れれば親から貰ふた瘦せた肱を曲げて枕とし、其處へゴロリと寝る。恠うした生活は、其表面だけを見たならば、洵に何うも不自由千萬であらう。物質上から見たならば、定めて不満足なことであらうと思はれるが、併し之れを精神的に見れば、「樂み其中に在り」であります。古人の和歌にも

人毎に一つの癖はあるものを

われには許せ敷島の道

とありまして、癖と樂しみとは違ふが、併し人間には必ず何か一方に癖するものがある。歌人は歌に僻し、茶人は茶に僻し、學者は學問に、發明家は發明に、各一方に僻して以て樂しみとしてゐます。人生には一日も樂しみがなくては協はぬ。

樂しみは夕顔棚の下涼み

男はてゝら女はふたのして

これ等も疏食を飯ひ水を飲みと同じで、百姓が終日労働して、行水でも使ひ、夕顔棚の下あたりに、蕙でも敷いてあつて、嬪は湯卷一つ、亭主は禪一つでゴロリと寝轉んで、青天井でも仰ぎ見てゐる様子、野蠻時代の有様のやうだが然うでない。眞に一家の和合した夫婦の心の能く通じた有様、一點の穢れたところの慾望を有つて居らぬ。其美しい精神状態が見えるであります。然ういふことから世間の俗の言葉で「楽しみは後ろに柱懐に金」といひ、然うした所にも楽しみはあるが、只心ある人は、物質界ばかりの楽しみに安んで居らぬ。どちらかといへば慾が深い、最う一つ精神上の楽しみを得やうといふので、此點に於ては、夫婦で汗水垂らして、夫は先きへ立つて荷車を牽き、嬪は後から押して、自分の背中には嬰兒を負ふてゐます。一と息休める爲めに、其處らあたりで憩ひ、嬰兒に乳を吞ませてゐるし、夫は汗を拭いてゐるし、其様子は縦令彼れは労働者だ、彼れは水呑み百姓だといふならば、それ迄であるが、其當人の精神界にありては洵に愉快であります。廣い世間には、シルクハットを冠り、自家用の自動車に乗つて、飛び歩行いてゐる其人の精神は、どんなであります。有名ある財産家で、囹圄の下に繋かれ、名譽も財産も消盡して了ひ、其人の心は火の車の廻轉する如く心中には宗教的の慰安もなく、道德的の觀念もなく、只利の爲めに、只名の爲めに、動かされてゐるといふ有様であります。世の中が進めば進む程、次第に然ういふ風に爲つて來てゐるが、眞の楽しみは、精神上の楽しみで、樂み亦其中に在りであります。

禪定安樂の法味

「夫れ人の世に處する、飲食より急なるは莫く、又飲食より樂きは莫し」飲まず食はずといふことでは、どんな結構なこともすることは能きぬ。其急場といふても、飲食ほど急場なことはありませぬ。楽しいといへば先づ飲食であります。縦令三人でも五人でも、人の頭に立つて、人を使ふ時には、食物といふことに一つ氣を付けて遣らなければならぬ。只自分だけが美味いものを食ふて、奉公人には無味いものを食はせるといふことでは、三人五人の人間を心服させて使ふことは能きぬ。食物から種々の争ひごとが出来る、故に急切なものといふたら、飲食物であります。又飲食より樂しきはない。ところが「聖哲の道を樂むに於て、焉れより甚しき有り」聖といひ哲といはれる人が、道を樂むの急切なるは、飲食よりも又急切なものがある。それに就いて孔子が「論語」あたりに言はれたことを、此處に三つ四つ出したのであるが「君子は道を謀つて食を謀らず」恚ういふ語があつて、一々解釋するには及ばぬ、只讀んだけの方が味があります。禪宗の祖師方の語にも

「食ありと雖も法なき所には住す可からず、食なしと雖も法ある所には、即ち住す可し」とか、又

「衣食の中には道心無し、道心の中には衣食あり」

などの語があります。孔子の言に「吾が人と爲りや、憤りを發して食を忘れ、樂み以て憂ひを忘れ、老の將に至らんとするを知らず」と吾れ孔子とても、外に勝れた所がある譯ではない、道の爲めに發奮した時に、飲食も忘れる。其精神上の樂しみを以て、一切世の中の憂さ辛さを忘れる。縦令年は耳順に至つても、吾れは年寄つたなどは思はぬ。昔から偉人とか、大人とかいふ人は、然ういふ自信がある。百歳までも二百歳も生きるといふ自信がある。又孔子の言に「回や、一簞の食一瓢の飲、陋巷に在り」簞といふのは、竹で造つた所の飯の容れ物、瓢はふくべで造つた水の容器、それは洵に微かな生活の状態を言ふたのであります。言はゞ裏長家住居の人の生活で、九尺二間の長家の中にゐても「人其憂ひに勝へず、回や、其樂みを改めず」普通の人ならば、斯様な生活に就いて、始終愚痴ばかり零してゐるであらう、或は甲斐がないとて煩悶するであらうが、回は其樂しみを改めない。然うした不自由な中に在つて、精神の樂しみを改めない。「賢なる哉回や」孔子が顔回を褒めた。「看よ是れ皆人の急とする所を急とせず、人の樂む所を樂まざるなり」人の急とする所を急としない、人の樂む所を樂しまない。「畢竟其急且つ樂む所は、何爲れの物ぞや」斯ういふ工合に、人々に當てがうて、考へさせるやうにしてゐる。何んの樂しみと言ふて了つては甚だ狭い。何ういふ樂しみであらう。「亦甚だ奇怪なり」餘程妙ではないか。佛敎中でも「維摩經」あたりには「法喜禪悅を以て食とする」

と言ふてある。畢竟禪定安樂の法味を以て、食饌とするといふのであります。「蓋し賢不肖の分界、全く此に在り」人間は誰れを見ても、似たやうな顔をしてゐるけれども、只此點に於て、彼れは賢なり彼れは不肖なりと分けるのだが、其分界は畢竟人の急とする所を急にしてゐると、人の急にしてゐる所を急にせざると、此處だけが違ふのである。「宋の周惇頤平日此章を擧示して」これも屢々前々から出ましたが、宋朝で勝れた學者で、程明道、程伊川は皆此門下であるが、其周惇頤が平日此章を以て「學者をして孔顔の樂む所は何事と看せしむ」孔顔の樂しむところは何んであるか、人々自ら考へよと、禪宗の僧が、公案を工夫するやうにして考へさせた。「眞に是れ痛切なり」實に痛切なやり方で、「學者若し其樂む所の一事を知らば」其樂しむ所を若し知るならば「則ち侯鯖の珍味亦如かず」侯鯖の故事は、前に説いたが、美味いものゝ話の時には、何時でも引合に出る漢の樓護の故事で、其侯鯖の珍味も、之れに如かぬであらう。「此に至りて始めて與に道を談ず可きのみ」一言にしていふならば道の味が直ぐ分る。「吾が庫厨空乏にして甚だ枯淡」此時分先師洪川和尚は、周防岩國の吉川家の菩提寺に住職をして居られた。藩侯の菩提寺であつたが、隨分貧乏寺である。事實は然ういふことも含まれてゐます。吾が庫厨は空乏で、何も大衆に振舞ふものがない。「亦只彼の一事の樂む可き者を以て本食に充つ」只皆に満足せざるやうに、腹一杯食せしめやうといふものが一つある。只彼の一事の樂しむ可き者を以て、本食に充て、之れを一つ惜氣もなく振舞はふと思ふが、食し得ることが能きるか呵

々。恁ういふことを以て、本食に充てがはうと思ふが、何うだと言はれた。

德 輶 第十四則

中庸曰。詩曰。予懷明德。不大聲以色。子曰。聲色之於以化民末也。詩云。德輶如毛。毛猶有倫。上天之載。無聲無臭。至矣。

這章。聖學之樞紐。孔門之極功也。抑道德之微妙。始于無聲無臭。而終于禮儀三百威儀三千。窮於禮儀三百威儀三千。而復歸于無聲無臭。於是始成就大道之體用者也。考其出入隱顯。甚妙之難言矣。吾門謂之明暗雙底。若欲得這三昧。恰如人學射。久久習鍊。則自然得其妙。不勉而皆中。孔子所謂七十從心所欲不踰矩。是也。至其佳境。始知聲色之於化民末也。昔宋晦堂謂朱世英曰。予初入道。自恃甚易。逮見黃龍先師。後退思日用。與理矛盾者極多。遂力行之三年。雖祁寒溽暑。確志不移。然後方得事事如理。而今咳唾掉臂也。是祖師西來意。儒士動云釋

氏取空已。殊不知。吾門之空者不空。而有如是之妙理也。孔子亦稱無聲無臭。是又不空也。如予嚮辯焉。語不云乎。不知爲不知。是知也。乞學者勿如韓廬之逐塊哉。

(訓讀) 中庸に曰く、詩に曰く、予明德を懷ふて、聲と色とを以て大にせずと、子曰く、聲色の以て民を化するに於けるは末なり。詩に云く、徳の翰きこと毛の如し、毛は猶ほ倫有り、上天の載は無聲無臭にして至れり矣。

この章は、聖學の綱紐、孔門の極功なり。抑も道徳の微妙は、無聲無臭に始まり、而して禮儀三百威儀三千に終る。禮儀三百威儀三千に窮まつて、復た無聲無臭に歸す。是に於て、始めて大道の體用を成就する者なり。其出入隱顯を考ふるに、甚だ妙にして之れ言ひ難し。吾が門之れを明暗雙雙底と謂ふ。若し這の三昧を得んと欲せば、恰も人の射を學ぶが如し、久々に習練すれば、則ち自然に其妙を得、勉めずして皆中る。孔子の所謂七十にして心の欲する所に從つて矩を踰えずと、是れなり。其佳境に至りて、始めて聲色の民を化するに於て末なるを知るなり。昔は宋の晦堂、朱世英に謂つて曰く、予初め道に入り、自ら甚だ易きを恃む。黃龍先師に見ゆるに速びて、後退いて日用を思ふに、理と矛盾する者極めて多し。遂に力行すること之れ三年、祁寒酷暑と雖も、志を確

にして移さず、然る後方に事々理の如くなるを得、而して今咳唾掉臂も也是れ祖師西來意、儒士動もすれば云ふ、釋氏空を取るのみと、殊に知らず、吾が門の空なる者は不空なるを、而して是くの如きの妙理有る也。孔子亦無聲無臭を稱す、是れ又不空なるや、予の嚮きに辯するが如し。語に云はずや、知らざるを知らずと爲せ、是れ知れるなり。乞ふ學者韓廬の塊を逐ふが如くなる勿れ。

心の徳の讚歎

本則は「中庸」の語でありまして、文の意味は、心の徳を讚歎したのであります。それは「詩經」を引いて「詩に曰く、予明德を懷ふて、聲と色とを以て大にせず」明德といふことは、即ち前の第一則に於て、説きましたから、此處では再びそれを繰り返へしませぬ。畢竟心の本體を、或る時は明德と言ふのであります。それでこれは「詩經」の大雅皇矣の篇に出てゐる言葉で、予れ明德を懷ふて、聲と色とを大にせず、凡そ吾が五官に映する所のものは、目には色、耳には聲、其他手足のことも皆籠つてゐる。大抵物の姿の現はれた以上は、吾々が目なり耳なり、其他五官を以て、測り知ることが能きるのであるけれども、此宇宙觀といふものは、決して吾が五官の及ぶ所に限つたものではない。何うしても哲學の奥義とか、最う一つ進んで宗教の本領といふことに爲ると、吾々が五官以上に、一つ目を着けなければならぬものであります。だから瞑目して見、耳を塞いで聞く、慙うしたことを言

ふと、禪宗風の臭ひがするやうだが、然ういふ譯ではない、何うしても五官以上に見付けなければ、實在とか本體とかいふことも當てにならぬ。今明德の本體から言ふと、予れ明德を思ふが故に、目ばかりを當てにしない、耳ばかりを當てにしない。これが「詩經」の言葉の意であります。それに就いて孔子が恚ういふ言葉を扱まれた。「聲色の以て民を化するに於けるは末なり」最早目に色差し付け、耳に聲を差し付け、形相の上で心の本體を視はふといふことは、抑も末であると、恚う孔子が言はれました。そして又「詩經」の言葉を引いて「徳の轄るきこと毛の如し」これは「詩經」の烝民の篇に出てゐる言葉で、此處でいふ徳は、言ふまでもなく明德であります。其明德はどんなものであるかといへば、實は譬へやうも何もない筈だが、強いて譬へれば、其輕ること毛の如し、明德といふと素人考へでは、何かに作り付けたやうなものがある如くに考へるが、然うした譯ではなく、至極輕いもので、然ういふ作り付けた重大らしものでない。それを譬へて言ふならば、毛の如くである。毛には種々あるけれども、此處では一寸した毛筋一本程のもので、殊更其處に大きなものがある譯でない。これまでが「詩經」の言葉で、其處へ孔子が又言葉を扱まれた。「毛は猶ほ倫有り」「詩經」には徳の轄ること毛の如しと言ふてあるが、自分が見ると、其毛といふものは、餘程輕いことを意味したのであるけれども、まだ類ひがある。如何程微かなものでも、輕いものでも、其處に一つの物體があれば、類ひがある。比べものがある。それか又「詩經」の言葉を引いて「上天の載は、無聲無臭」これ

は「詩經」の文王の篇に出てゐる。上天の載、載といふのも心の本體といふのも見方に依つて名が違ふだけで、實は同じものであります。上天といふても、高い所にあるものだと思ふてゐては當らぬ。且つ又上天といふと、其處に何かありさうに思ふけれども、我が目を以て見、耳を以て聞くといふやうなものがある譯でない。無聲無臭、耳を澄ませても、此耳では聞えぬ、目を開いても、此目では見ることが能きぬ。音もなく、香もない。恚う「詩經」に諷ふてあるが「至れり矣」實に至れり盡せりであると、孔子が又此二字を扱まれた。恚ういふ所は、言葉を重ねれば重ねる程、却つて迂遠に爲るから、これは人々の工夫に任せて置きます。

弓術の奥義

先師洪川和尚評して曰く「この章は、聖學の樞紐、孔門の極功なり」本文へ現はれた一章の言葉は此處で聖學といふのは、孔子の道を言ひます。孔子の道に於ても、恚ういふところが、門のとぼそ紐の結び目であつて、そして孔子門下の極致である。「抑も道德の微妙は、無聲無臭に始まり、而して禮儀三百威儀三千に終る」これは人間の根本道德を指して言ふので、其根本道德たる明德は、本來音もなく香もなしである。併し其働から言ふならば、禮儀三百威儀三千に分れてゐる。詳しく言へば、禮樂とか、刑政とか、冠婚とか、喪祭とか、種々排列すれば澤山ある。音に然ういふ四角張つたこと

ばかりでない。大工のカチ／＼、左官のベタ／＼、兵隊の鐵砲も、百姓の鋤鋤も、皆無聲無臭に始まつてゐる。『法華經』の言葉に、

「治世産業皆實相と違背せず」

といふことがあります。即ち其當體の無聲無臭が、直ちに其處へ現はれて来る。現はれただけで、それで了ひかといへば然うでない。『禮儀三百威儀三千に窮まつて、復た無聲無臭に歸す』丁度四時の循環した晝夜の更代するやうな有様である。往昔の往昔の大昔から、末の末を一貫して、毫釐も一筋道を外れて居らぬ。終つて又始まる。是に於て、始めて大道の體用を成就する者なり。一方から言ふと本體、一方から言ふと作用、別に引分くべきものはない。大道の體用を圓滿に成就したものである。『其出入隱顯を考ふるに』其一理なるものが、或は出で、或は入り、或は隠れ、或は顯はれ、千差萬別活動して止まない有様は、『甚だ妙にして之れ言ひ難し』其處を儒教では、今の如く言ふたが「吾が門之れを明暗雙々底と謂ふ」吾が禪門では、恚ういふことを、明暗雙々底と謂ふてゐる。明暗といふ字義は、明といふのは差別、暗といふのは平等で、若し本體を暗と言ふならば、現象は即ち明で、種々換え言葉はあるが、煩はしいから略すとして、明中に暗あり、暗中に明あり、平等即差別、差別即平等であります。恚ういふことを『寶鏡三昧』の言葉などで言ふと

「夜半正明 天曉不露」

といひ、これはほんの一例として、此處に持ち出したのであるが、海に草木も眠るやうな眞夜中に、明かな眞晝間の境界があると同時に、夜が明けて露はれずで、晝日中に眞暗がりがあると、斯ういふ言葉を使ふてあります。明暗雙々といふのは、明と暗とが別々にある譯でないから雙々で、明は暗を兼ね、暗は明を兼ねる。此事を洞上の五位などと言ふと、初めは正中偏、第二は偏中正、第三は正中來、第四は偏中至、第五は兼中到、これは名目だけを擧げたので、其境界は眞參實證せねば容易に得らるゝものでありませぬ。要するに五位の調べは、明暗雙々底を明らかにするものであります。『若し這の三昧を得んと欲せば』三昧のことも、度々説明してゐますから、此處では詳しく説かぬが、要するに三昧は正受なり。見るものと見られるものと一つに爲り、聞くものと、聞かれるものと一つに爲る。我れと一切の物と融合するに外ならぬ。若し此明と暗との三昧を得やうといふならば、却々一朝一夕に、理窟や論理で、押し詰める譯に往かぬ。『恰も人の射を學ぶが如し』丁度人が射を學ぶやうにせよ。射を學ぶといふことを、洪川先師が納どもに能く話されたが、『列子』の湯問篇に、

「甘蠅は古の射に善き者なり、弓を設りて獸伏し鳥下る。弟子名は飛衛、射を甘蠅に學ぶ。而して巧は其師に過ぐ、紀昌なる者、又射を飛衛に學ぶ。飛衛曰く、爾先づ瞬せざることを學んで而して後に射を言ふ可し。紀昌歸へりて、其妻の機下に偃臥して、目を以て牽挺を承く。二年の後、錐末皆を倒すと雖も、而かも瞬せざるなり。以て飛衛に告ぐ、飛衛曰く、未だし、亞いで視を學んで而

して後に小を視ること大の如く、微を視ること著なるが如くして、而して我れに告げよ。昌菴を以て虱を膺に懸け、南面して而して之れを望む。旬日の間に浸く大なり、三年の後車輪の如し焉。以て餘物を覩るに皆丘山なり。乃ち燕角の弧、朔蓬の箛を以て之れを射る、虱の心を貫いて、而も懸りて絶ちず。以て飛衛に告ぐ、飛衛高蹈して膺を拊つて曰く、汝之れを得たり矣」

と出てゐますが、單に之れを讀んだだけでも了解されます。恚ういふやうに、一つ稽古を重ね、專心一意に工夫するならば、「久々に習練すれば、則ち自然に其妙を得、勉めずして皆中る」勉めずして皆中るといふので、其處で妙を得られます。勉めて中るならば、未だ妙ではありませぬ。「孔子の所謂七十にして心の欲する所に従つて矩を踰えずと、是れなり」孔子の一代の經歷から言ふたならば、七十歳に至りて、心の欲する所に従つて、矩を踰えずといふことを明言せられてゐる。恰も其境界が妙である。「其佳境に至りて、始めて聲色の民を化するに於て未なるを知るなり」恚ういふ所に至りて、目に色を差し付けたり、耳に聲を差し付けたりして、そして殊更に民を治めやうといふことは、抑も末であるといふことが分るのであらう。「昔は宋の晦堂」これは宗門では名高い人で、宋朝時代の高僧であります。其傳記の一齣を言ふと、

「黃龍山晦堂禪師は儒生たり。既に聲あり、年十九にして盲す。父母許すに出家を以てす。忽ち復た物を見る。游方して南禪師に謁す。深く此事を信ずと雖も、而かも大いに發明せず。石霜山に止

まる。因みに傳燈錄を閲す。僧あり多福禪師に問ふ、如何なるか是れ多福一叢の竹、福曰く、一莖兩莖は斜なり。僧曰く會せず。福曰く、三莖四莖は曲れりと云ふに至りて、此時頓に南公の作略を見る。歸つて南公を禮す、南曰く、汝吾が室に入れり。師亦踊躍して自ら喜ぶ。其後南公の入滅に會ふ。道俗師を請して踵を繼がしむ。師四方の公卿と意合すれば、千里も之れに應じ、合せざれば比隣と雖も往かず。内外の書を以て徵詰開示す云々」

と。其晦堂禪師が、當時の大儒たる「朱世英に謂つて曰く、予初め道に入り、自ら甚だ易きを恃む」大抵始めの内は、誰れでも同じことで、禪門の悟道など、言ふても、多寡の知れたものと思ふたところが、「黃龍先師に見ゆるに速びて、後退いて日用を思ふに、理と矛盾する者極めて多し」それはお互に誰れしも然うであらうと思ふ。納ども、今から前のことを追懐すると、理智の上では分つてゐるが實行如何といふことに爲ると、矛盾といふことがある。矛盾といふことは「韓非子」に出てゐる。

「楚人其盾の堅を譽めて曰く、物能く陥るゝなきなり。又其矛の利なるを譽めて曰く、物として陥れざるはなしと。或る人曰く、子の矛を以て、子の盾を陥れば如何、其人應ふる能はず」

とありまして、それから後の頓珍漢なことを矛盾といふに至りました。「遂に力行すること之れ三年」其三年の間は、如何に寒い日でも、暑い日でも、「祁寒溽暑と雖も、志を確にして移さず」古詩に

「安禪は必ずしも山水を用ゐず、心頭を滅却すれば火も自ら涼し」

といふ句があるが、昔甲斐の國の快川國師が、此詩偈を唱へつゝ、火定三昧に入られた有名な話があります。恚ういふやうな意氣込みで、三年間力行して「然る後方に事々理の如くなるを得」今日の行事と、是迄究めた道理とが一致することができた。而して今咳唾掉臂も也た是祖師西來意」今咳拂ひしてゐる時も、唾をしてゐる時も、臂を掉ひ街道を無意識に歩行してゐる時も、達磨大師西來の極意と少しも違はぬと、恚様に晦堂禪師が朱世英に語られた。然るに「儒士動もすれば云ふ、釋氏空を取るのみと」然るに儒者達は、動もすると釋氏空を取ると言ふてゐる。殊に同じ宋朝時代の學者でも、司馬溫公などは、學問は出來てゐるが、宗旨のことは分らんで、毎でも佛法は空だと言ふてゐた。司馬溫公程の人が、恚ういふことを言ふが「殊に知らず、吾が門の空なる者は不空なるを」不空といふ出處を質せば澤山あります。「宗鏡錄」に

「此圓融の旨、無礙の宗は常と説く時は、無常の常、無常と説く時は、常の無常、空と説く時は、不空の空、不空と説く時は、空の不空、有と説く時は、幻有の有、理を立つる時は、成事の理、事を立つる時は、顯理の事、是れを以て卷舒我れに在り、隱顯同時なり。説無説に乖かず」

とありまして、恚ういふことは經文から引けば幾らでもあります。吾が禪門の空は、何も無いといふ空とは違ふ。而して是くの如きの明理有る也」古歌に
佛法は若き女の亂れ髪

いふにいはれず解くに解かれず

といふのがありますが、實際然うした妙理があります。「孔子亦無聲無臭を稱す。是れ又不空なるや」恰も孔子とても同じ所を指してゐる。孔子は無聲無臭と言ふてゐるが、是れ又不空であることは「予の嚮きに辯するが如く」である。「語に云はずや」それは「論語」に出てゐるが「知らざるを知らずと爲せ是れ知れるなり」門外漢が彼れ是れ言ふのは見苦しい。知らぬならば黙つてゐたら可からう。「乞ふ學者韓獝の塊を逐ふが如くなる勿れ」韓は人の姓であります。韓氏の飼ふてゐた狗が、頗る賢いが、矢張狗は狗で、人が塊を投げつけたならば、其投げた人にかゝらないで、其塊に向つて噛みついた。如何に賢いといふても、字句に附いて廻はる。我れは學者だといふても、多くは文字に付いて廻はる、乞ふ學者は韓獝の塊を逐ふが如くなる勿れと評されたのでありまして、獝は韓國の猛犬であります。

至誠 第十五則

中庸曰。至誠無息。

大矣哉。至誠之德。配天地而不預天地。胞萬物而不干萬物。自寂然不動中。遂感通天下之故。流行無止息。不因一緣。不立一法。而明明歷歷。不昧一緣一法。譬如以鳥鳴春。以雷鳴夏。以蟲鳴秋。以風鳴冬也。其唯毫釐不欺。而循環無息。無息故悠遠。悠遠故高明也。是又何物。只在學者反己自得焉。語曰。其爲物不貳。則其生物不測。又曰。知仁勇三者。天下之達德也。所以行之者一也。故山野常言。孔門亦惟有此至誠一乘法。無二亦無三。予昔日警地後。於此至誠一語。鍛究鍊磨。頗得正念工夫相續之力矣。其恩洪大。不知所報也。如今此書編述之志願。全在于此。乞學者細嚼至誠無息之滋味。深自得之。則於正念工夫不斷相續。其得力必有可觀者矣。

(訓讀) 中庸に曰く、至誠息むこと無し。

大なる哉、至誠の徳、天地に配して天地に預らず、萬物に胞ふて萬物に干らず、寂然不動中よりして、遂に感じて天下の故に通ず。流行して止息無く、一縁に因らず、一法を立てず、而して明々歴々として、一縁一法に味からず、譬へば鳥は以て春に鳴き、雷は以て夏に鳴り、蟲は以て秋に鳴き、風は以て冬に鳴るが如き也。其れ唯毫釐も欺かずして、而かも循環息むこと無し。息む無きが故に悠遠、悠遠なるが故に高明なり。是れ又何物ぞ。只學者己れに反つて自得するに在り焉。語に曰く、其物たる貳ならざれば、則ち其物を生ずる測られず。又曰く、智仁勇の三者は、天下の達徳なり、之れを行ふ所以の者は一なり、故に山野常に言ふ、孔門亦惟れ此至誠一乗の法有り、二無く亦三無し。予昔日警地の後、此至誠の一語に於て鍛究鍊磨、頗る正念工夫相續の力を得たり矣。其恩洪大にして、報ゆる所を知らざるなり。如今此書編述の志願、全く此に基す。乞ふ學者至誠無息の滋味を細嚼して、深く之れを自得すれば、則ち正念工夫不斷相續に於て、其力を得る必ず觀る可き者有らん矣。

誠といふ一字

此一則是「中庸」の二十六章に出てゐまして、「至誠息むこと無し」恁ういふ所に至ると、寧ろ種々

説明を加へぬ方が、却つて尊い位であります。此誠といふ字の換へ言葉は、佛敎にも儒敎にも、其他の敎へにもあるけれども、其種々の道徳、種々の善きことを約めて言ふて了つたものが、此誠といふ一字に外ならない。此誠が直ちに親に對すれば孝と爲り、君に對すれば忠と爲り、朋友に交はつては信と爲ります。種々に名が變はつて往くけれども、其實は至誠といふ。此一つであります。所が此至誠といふものは、只人類のみが之れを私すべきやうなものではない。言はゞ大は天地よりして、小は一微塵に至るまで、總ての物は、此至誠といふものゝ現はれに外ならない。畢竟至誠の凝結した所のもが、千差萬別各々其形を變へ、姿を異にして森々羅々と現はれてゐる。此者は空間にあつて、何處までといふ限りはない。無窮に通じ、無邊に満ち充ちてゐる所のものであります。明治天皇陛下の御製に、

目に見えぬ神に向ひて恥ぢざるは

人の心の誠なりけり

といふのがありますが、實にそれに外ならない。至誠ある爲めに、神人合一することが出来ます。此至誠ある爲めに、佛と凡夫と親しく接觸することが出来ます。此至誠ある爲めに、此大なる宇宙と、此小なる我れと相合して、一團に爲ることが出来ます。儒敎或は佛敎といふても、煎じ詰めれば、至極僅かでありませう。例へば佛敎で『金剛經』にしても、其要は阿耨多羅三藐三菩提の一句に歸すると

古人もいふて居ます。阿耨多羅三藐三菩提といふのを、更に之れを約めると、只覺の一字であります。又『中庸』の如きも、一篇の要する所は、畢竟此誠といふことに歸するのであります。それで此至誠が、天地の間に充ち満ちてあるといふて、何か天地に覆ひ冠さつてゐるやうに思ふかも知れぬが、其實は天地も、萬物も皆至誠に包まれてゐるといふても可い位であります。『列子』を見ると、

『天地は氣中の一細物なり』

とありますが、面白い言葉で、天地といふと、頗る廣い世界のやうに見えるが、天地は氣中の頗る細かいものであります。洪川先師も

『彼の至誠の大なるを以て、天地の小なるに配視すべんや。大凡そ至誠の靈物たる最大最尊最妙の者なり。是れを以て一回至誠を領略する時は、則ち老少を分たず、智愚を論ぜず、直ちに梵天王の位に昇るが如く、更に階級次第なし云々』

と説かれました。然ういふ工合に、我々が見當を付けて見るが宜しい。

寂然不動

『大なる哉、至誠の徳、天地に配して、天地に預らず』此大なる所の天地宇宙に、一杯満ち充ちてゐてそして天地といふものゝ表面に拘泥して居らぬ。天地に親しく配合されてあつて、そして天地といふ

ものに括られてゐない。「萬物に陷ふて萬物に干らず」それならば、宇宙といふものは只大きい、天地は只大きいといふやうなものばかりに爲るかといへば、然うでない。萬物即ち一切の物に、皆これが行き渡つて、最う人類は言ふまでもない。それ以下の動物界にも一杯、植物界にも一杯、有機界にも一杯、無機界にも一杯、濱の眞砂にも一杯、そこらの土塊の中にも一杯、蚤の踵の中にも一杯、それ位細かに添ふてゐて、そして其物に決して拘泥して居らぬ。それは五ひの経験してゐる通りのもので其至誠といふものは「寂然不動中よりして、遂に感じて天下の故に通ず」至誠は何處にあるといふて次第に至誠の大本に立ち還つて見ると、寂然不動、外の言葉で言ふと、上天のことは、聲も無く、臭も無しといふやうなものである。それは時にも所にも少しも變らない、寂然不動でありまして、毎も止水明鏡の如きものかといふに然うでありませぬ。止水明鏡のやうな中から、直ちに總てのものに感じて、天下の故に通ず、故といふ字は事といふ意味で、天下一切の事に皆融通してゐる。鳶飛んで天に戻り、魚淵に躍る、恠うしたところを「華嚴經」には

「佛身法界に充滿して、普く一切群生の前に現す、縁に隨ひ、感に赴いて周ねからずといふことなし。而かも常に此菩提座に處す」

といふてあります。其言ひ方は違ふが、意味は同じであります。「流行して止息無く」これが暫くも停滯してゐるものでなく、何處かに潜んで、影を隠してゐる譯のものでなく常に流行してゐます。素人

目にはそれが直ぐ見えない。「一縁に因らず、一法を立てず」至誠其者の本體から言ふならば、何んの縁にも決して因りはしない。亦決して何んの法をも立てない。塵毛一本も立てない。然らば決して一法を立てないからと言ふて、空々寂々、何もないかといへば然うでない。「明々歴々として一縁一法に味からず」一縁一法何事にも矢張り渡つてゐる。これを「華嚴經」などには、

「眞如は自性を守らず、染淨の縁自性に隨つて不合にして合す」

と言ふてあります。乃ち只昵として居らない、穢れたる中にも、清淨なる中にも、總ての縁に従ふて合致する。これが些とも括られて居らぬ。それでは如何に一縁一法に味くないかといふならば、能く見よ、斯くの如く明かに至誠は現はれてゐる。譬へば鳥は以て春に鳴き、雷は以て夏に鳴り、蟲は以て秋に鳴き、風は以て冬に鳴るが如し。妙なもので、春に爲ると、誰れが指圖する譯でもなく、梅の花が咲くと、鶯が鳴く、誰れの支配を受けるでもないが、夏に爲ると、雷がおどろくと鳴り出す。秋に爲ると草の中に蟲がすたく、冬に爲ると木枯が吹く、こんなことは生れ落ちると、耳に馴れ、目に見慣れてゐるから、何んとも思はないけれども、若し此天地自然の運用の有様を、精神的に、精細に觀察し來つたならば、實に奇々妙々、實に不可思議の有様である。併し餘り不可思議に慣れてゐるから、何んとも思はないのであるが、實に妙と言はんか、奇と言はんか、殆んど言説を絶してゐる。「其れ唯毫釐も欺かずして、而かも循環息むこと無し」其四時循環し、晝夜更代し、萬物生々發育し